

桂園門下家集

續日本歌學全書 第十編

東京博文館

佐々木信綱編纂

桂園門下家集

東京博文館發行

911.108
N6852
S2

桂園門下家集

| | |
|--------|------------|
| 解題 | 一 |
| 志の女草 | 八田知紀……一三 |
| 浦の沙貝拾遺 | 熊谷直好……一七七 |
| 斐雄歌集 | 菅沼斐雄……三四一 |
| 六帖題和歌 | 妙泉寺亞元……三五一 |
| 殘の夢 | 高橋殘夢……三六七 |
| 箭園和歌集 | 竹内享壽……四〇五 |
| 桂 | 蔭波忠秋……四一七 |
| 桂芳院遺草 | 柳原安子……四五九 |
| 稻の峰 | 香川景樹……四六五 |
| 五番自歌合 | 木下幸文判……四七四 |
| 船路日記 | 熊谷直好……四七七 |
| 船路のゆき | 熊谷直好……四八五 |
| 嚴島日記 | 熊谷直好……五二七 |
| 影前百首 | 兒山紀成……五三七 |
| 調の說 | 八田知紀……五四五 |
| 桂の下枝綴篇 | 内山眞弓等……五五三 |



251122

此の、田代三郎

たむらひ

はなはた

あつた

あつた

七十

香川景樹翁肖像



(井上通泰氏蔵)

小川一真製

管 沼 斐 雄 翁 真 蹟

冬日詠歲暮雪
凌歊
源 雜
此物
一
海
如
如
如

(藤 氏 泰 通 上 井)

八田知紀翁肖像



(御歌所長崎男爵)

續日本歌學全書第十編

佐々木信綱編

解題

ささ木香川翁全集二巻を出して、翁及門下の家集歌論等を載せ、また近世名家々集上巻小
木下幸文の亮々遺稿を掲げしるゝ、猶洩れらるもの少あらざ。かゝれば更に桂園門下家
集を物する事とあしつ。あの巻々の家集八種、記行七種、歌合百首歌論雜筆各一種をそへ
たり。

まのぶ草

八田知紀、通稱の喜左衛門、桃岡と號す。寛政十一年九月十五日鹿兒島西田村に生る。幼
名を彦太郎といふ。文化十年九月明時館火消手を命ぜらる。同十三年九月東郷家射術此
入門をなす。文政八年八月、京都藏役人を命ぜられて上京す。さるゝ歌學執心のさめかね
て懇望せしむるあり。同十二月富小路貞直卿に參殿、月次會ひいづ。また城戸千楯のも
とひいふりて、萬葉集此會讀をよむ。此頃交はりし雅友の、加茂季鷹、村田春門、大江

廣海、大橋長廣、服部敏夏、垣本雪臣等あり。香川翁のもとに殊によく音づれり。同十年五月歸府。同十二年八月香川翁入門す。その山田一郎左衛門上京使ふ、書翰もて頼みしあり。さるの在京の時の、折々相見しまで入門を果さざりしか、此頃彌感じたる事ありて、初めて入門せしかりといふ。天保十三年一月、芝山國典朝臣の請より萬葉集を説く。同六月堤哲長朝臣の歌道を教ふ。同十月琉球人參府のつぎ伏見滞在中、浦添王子の望みより、詠歌まゝ記行等を添削せ。さるの王子歌道執心なるをもて、香川翁入門此紹介をかしぬ。同十四年三月香川翁卒去。弘化二年十二月桃岡雜記上木成る。同三年八月同書を天覽お備ふ。明治元年十月、皇學所御用掛を命ぜられ、同十二月講官とある。同三年十二月宣教使少博士に任じ、同四年九月權中博士に進む。同十月文部省より編輯寮語彙掛兼勤を命ぜらる。同五年四月宮内省に出任し、御歌掛となり、同六年九月二日卒す。年七十五芝伊皿子大圓寺に葬る。八田知紀一代略記及要用留による著書のまのぶ草、小門比沙干、都島集、白雲日記、桃岡雜記、桃岡家訓、幽郷眞語、藤川記行、芳野記行、調の直路、千代比古道等なり。翁の門下ある高崎御歌所長の物語も、翁の美衣美食を好まざ、洒落淡泊おして、人より仙人とよばれしやどありき。まゝ酒茶を嗜み、酔ひての琴を弾じ、萬葉の古歌をうたひ、又書をも好みて畫りれりといふ。

まのぶ草の家集おして、四編おこりてり。第五編の、門人澁谷國安撰びあつめて、板お上さんのあらましありしを、國安旅おして歿りしうへ、稿本さへお失はまつとぞ。加藤雄吉氏筆記による近き頃、愛發春樹氏、まのぶ草の歌、まゝ何くれ此歌集ともより拾ひとり、短冊おて見ざるをも加へ、そを四季戀雜おこりち、桃岡集と題して、歌學全書の料おとおおせらまぬ。好意の喜ばしけれ、原集のまゝ、よみ出られし年代をまゝよりよみければ、原集を載せつるおなむ。

浦の沙貝拾遺

熊谷直好、姓の平、初め八十八と稱し、後助左衛門と改む。蓮生坊直實より廿四世の孫。周防岩國侯の世臣おて、父茂仁右衛門直昌といふ。後東庵といふ武田流の平學にけしかりき天明二年二月八日岩國横山お生る。人となり奇偉不羈、身体長大おして、結髪必ず其鬚を太おせり。文才あり學を好み、又武技をよくま。壯おして物頭役となり、又御究方を勤む。彈究の席おして、書記お口供を筆記せしめ、口供終りて後自ら筆をとりて、緊要の所一條も遺さぬ記したりといふ。又法曹至要抄を熟讀し、註解頭書を作れり。幼より歌を好み、郷人吉田嘉太郎お就きて學ぶ。初めて詠ましの雪の題おて、

夜きれど土のまろさのまらゆきのはどろくおふれがかりなり

十六歳の時、京師香川翁の詠草をおくり添削をこふ。翁いさく感じて、詠草の奥の

みみからむ秋をおもへば小山田のいねがたきまで嬉しかりなり

とよみ加へて返されり。十九歳の時京師お登り、翁のもとお留り學ぶ事一年あまり、後まばく往來して、深くこの道をうかいひ、かさはら相國寺おて誠拙禪師お參禪し、悟入を得、香一居士の號を授かりぬ。又喫茶を好み、松風禪の音を友として、終焉の折までも、自ら席を清め香を炷き、茶を喫せぬ日ありき。されど世此人のむねとせる器物の翫ぼせ、さし新らしきも此を好み、狭き室に入らせ、端坐して心廣く娛しそりき。文政八年九月、故わりて岩國をのがれ去り、京師お住まむとしなるお、心お協はせとて浪華お下り、江戸堀ふて、ある諸侯の船屋形を家を作りて、そこお住まぬ。輕舟亭といへり。後高麗橋の西に住み、小園お長春あるをもて、長春亭と名づけ、人々の乞ふよりて歌詠を事とせり。さて後三年を経て、天王寺のふどり百濟野お近き家隆塚お庵をもとめ、管絃の道を心ざし、花園三位より大曲を許さるゝおいたりぬ。著書の浦の沙貝三冊、同拾遺四冊、梁塵後鈔四冊等刻成る。紀行の文、古今正義附録等の刻あらせ。七十六才の冬、老此身此野邊近く住まるゝいかにあらむと、人々のまゝむるまゝお、再び市中おいで北濱の家お住ま、八十一才の秋文久二年八月八日身おのりぬ。小橋西念寺お葬りぬ。
平尾東齋氏及藤田葆氏筆記による

浦此沙貝初篇の、ささお第五編おのげつれば、おの拾遺採録せるあり。

斐雄歌集

菅沼斐雄の備中國小田郡吉濱の人あり。號を蘆渚といへるの、吉濱の名を漢譯せしなるべし。前名を北村綾雄といへり。斐雄此慕の、下谷龍泉寺町西徳寺おあり。墓誌お、諱斐雄、字子英、號蘆渚又桔梗園、源姓菅沼氏、通稱頼母、年四十九、天保五年八月二十五日歿、法諡妙徳院釋普聞信士とあり。文政元年二月景樹翁の江戸お赴かるゝ折、斐雄の備中おありしお、都お此おりて、廿日お都をさち、廿三日お池鯉鮒おて追ひまき、ともお江戸おいりき。さて翁の江戸を去らるゝお臨み、斐雄をとめおきて、角田川ある夕踰館を預からしめたりしかば、江戸おて東塙の門お入らむとせる人を、翁おかはりて教へ導きそりき。桂園歌集による斐雄歌集の、井上通泰氏より假り得てお、お掲ぐ。されと精選せしものありあらざるべし。桂園門下お名茂齊しうせし、直好幸文知紀等の家集の、刻ありて世お行はれしを、ひとり斐雄此全集此傳はらざるの、いとあきらしき限なりや。

六帖題和歌

僧亞元の阿元隱言阿幻ともかけり。法名を亮瑞といふ。京にありて自在庵、小竹園、一日庵とよび、江戸お下りて葵園といへり。晩年築地本願寺中妙泉寺に住す。天保十三年九月

廿一日寂す。年七十。墓の寺中あり。子あり、元瑞といふ。
亞元の歌集の、亞元詠草、亞元集、六帖和歌題等あり。三種とも井上通泰氏より借りつれど、今の六帖題はるゝをとりつ。

残の夢

高橋正澄、通稱の文右衛門、後殘夢といふ。清園すがのまゝ有所遊居と號す。京都金龍水の傍にて生る。初め歌を鳴祐爲ふ學ぶ。備中笠岡の大庄屋ありしが、親族丸山某のよめあり、領主龍野侯に讒せられて、家産を沒收せられしうへ、文政五年十月浪華ふ出て、初の立賣堀の後、大川町字浮世小路に居る。晩年明を失し、嘉永四年二月廿七日没す。年八十七。大阪天満寺町専念寺に葬る。歌集の、塵室草露三卷、清園詞草三卷、心月詞花帖二卷、刻なれりと云。著書の、記紀萬葉及國語に關するもの二十余种あり。子正純熊彦といふ。萱園と號す。文政十三年桂園の門に入り、明治十三年八月浪華福島にて歿す。歌集の園の高萱二卷、萱の一束、せみぐ音、大和撫子各一卷あり。桂園叢話より
殘の夢の、文政十二年十月剃髮後の詠を載せり。井上喜復氏より借り得てこゝに載す。

同氏の祖父嘉倫以下三世五人皆正澄父子に學び、清園後草四卷も借りえつれど、よはえ掲げず

前園和歌集抄

竹内享壽、初め備後と稱し、越中と改め、後淡路といふ。前園と號す。東寺の公人上坐榎淨門字子春號南郊此次子にて、同職竹内慶壽の養子とある。八歳の時東寺觀智院主寶洲僧正のきて剃髮す。法眼に至り、中綱職の長となる。慶應元年三月廿八日卒す。年五十四。墓の東寺の西郊字狐塚あり。幼より書をよくし歌を好み、文政十一年四月景樹翁の門に入りしに、翁其歌の自らと、此へるお驚きぬといふ。翁の卒後、京師ある弟子、多くの享壽と松園坊清根と此門に入りぬ。一代此詠數萬首及びびりとぞ。
前園和歌集の、歌の數五百九十四首あり。そが中より村山松根の抄出せし百六十余首をかゝぐ。井上通泰氏のもも享壽の歿後其素志に従ひて門人鈴木某が五十首擇び出したものありといふ

桂蔭

渡忠秋、楊園と號す。父を政舎といふ、近江の人あり。忠秋初め新太郎安雄といふ。京師に移りきて、桂園此門に入り、故三條右府に仕ふ。後宮内省より徵され、正八位に叙す。著書、桂蔭、讀史有感集、先入抄、妍哉抄等あり。文化八年二月十日に生れ、明治十四年六月五日歿す。年七十一。遺言して南禪寺中天授庵に葬りぬ。墓誌銘より
桂蔭の、慶應三年に刻なりぬ。元治元年此兵火に詠草焼々失せし故、門人ら此輯めし也。

桂芳院遺草

柳原安子の、前參議正親町三條維新後廢職實同卿の女改稱すにて、天明三年改稱すお生る。正二位前權大納言均光卿の室とあり、慶應二年十二月廿八日世を去りましぬ。八十四歳ありき。桂園門下の女流ふての、秋園古香と共に、歌北小路子爵おまじくさるる名高かりきといふ。筆記による桂芳院遺草の、今の柳原伯爵より、詠草數卷を借り得しりば、そが中よりすぐれざるをぬきいでて、かくい名づけつるおまじ。

稻 此 峯

稻の峰の、景樹翁の、因幡よりはじめて上京せられし折の道の記ふて、桂園一枝に出るいくうさせ云々の歌景樹翁全集上あり。この鹿兒島人松本時直知紀もたりしを、鎌田氏の寫されしをまゝ寫し、也。よみとささぐさふしもまじく、もとのまゝになしおまじ。

桂園翁五番自歌合

この其名おへる如く、景樹翁とつらの歌を、五番おつがひたるを、木下幸文の判心するものあり。

船路日記

船路のゆき

嚴嶋日記

このいづれも熊谷直好の日記の中ふて、船路日記の長谷川友之輔岩國の所藏、直好自筆のうきさ一冊おして、船路日記とうはぐさあり。船路のゆき、の岩國と京師との間を往來せし四回の日記を、假おのく名づけしなり。第一文化六年正月第二文化八年九月及嚴嶋日記文化八の、鎌田氏の所藏、文化五年より同八年までの日記此うちあり。第三文化九年四月、林陸夫氏の所藏なり。

天満宮影前百首

兒山のり紀成、通稱の勇、後勝之進と改む。愛松軒と號す。伊勢庄野の人早川直記の三男也。寛政十一年長崎奉行松平石見守お従ひて長崎お赴き、翌年國お歸る。文化三年江戸お上り、本郷御弓町お住む。四年九月西丸御書院番夏目長左衛門お抱へられ、五年正月夏目氏に從ひて、蝦夷東地えとる島お赴き、九月江戸に歸る。次で旗本津田錦之助に仕ふ。十一年五月津田氏を退き、御徒士兒山平三可至此養子とあり、目白の邸お移る。天保十一年四月廿七日歿す。著書、蝦夷日記一卷、松の落葉三卷あり。桂園叢書による。天満宮影前百首の、井上通泰氏より借り得て、こゝおのゝぐ。

調 の 説

八田知紀の、調おつきて論らはれし書なり。調の直路歌學全書十と引合せ見るべし。鎌田氏より借りえてのゝぐ。原本は知紀門人面高俊秀の所藏なりといふ。

桂の下枝續篇

景樹翁全集下巻に、桂の下枝と名づけて、人々の雜筆を掲げつるものならひ、此續篇を物しつ。内山真弓の東塙塾中書抄、景樹翁評赤尾可官詠草、直好評景恒詠草、直好の書翰、幸文亞元問答、知紀の應問書等を載す。

附言

卷のはじめに載せし景樹翁像、及直好斐雄の懷紙の、井上通泰氏の所藏あり。同氏の書狀に曰く、

此景樹像の、景樹の卒後最初に出來し像なり。これをもとめて出來し像の、即今京都鈴鹿氏(連胤の跡)所藏の分めて松波翁編輯の景樹直好兩大人遺文を添へたるもの、原本なり。(以上二本の筆者井上忠興)彼衣冠の像(桂園叢書第一集及續歌學全書第四編等に出でたる分)の、最後に出來し像にて、筆者區々、容貌も修飾を加へしため、追々おかはりゆきおき。されば景樹が本來此面目を知らむと云ふ、我所藏のものを措きて外お無之。傳ふ云ふ、此像の景樹の高弟松岡歸厚同門の井上忠興お囑して畫かせし所と。(忠興の景樹の婿にて、やがて其媒者の歸厚なりと云ふ説あれど、眞偽を知らず)歸厚の名の中空日記などに出たれば、知れる人多かるべし。通稱の左内といひて、吉田家の家司

なり。忠興の香川家の入門名簿に、天保四年八月二十三日、京井上司書忠興とあり。禁裡の官吏なりと云ふ。

直好此懷紙の、形の如きめづらものなるが、其はし書中に見えたる琴山大人(岩國藩の老臣香川景晃、即景樹の家の本家なり)の臨江樓の記(懷紙)も、また余が筐中あり。此文左の如し。

遊臨江樓記

ふん月の七日、夕立少しとゞきて、名殘涼しき宵のまざれお、信好直好の二才子を誘ひて、片岡東籟法橋が川むかひの家におよぶ。此家の、土手おかゝかけたる樓めく屋など、錦川を見おろして、をかしうまつらひなしたれば、臨江の樓と名づく。折しも夕月はつかおさし傾きたるお、西の方なる薺おしあけて端居すれば、川風ひや、かお吹來りて、常の、葎生のけがしき屋など窓近くありて目ざはりあるも、木蔭をぐらくて見えわかき。吸江わたりの月のけはひいと面白く見え渡るお、里此子ら田舎ぶら歌ひつゝ踊りの、しり、あるの笛の音なども遙お聞ゆれば、法橋父子いと喜ばひて、何くれとあるじえけるおぞ、諸共お酒たうべて古へ今の物語などするうち、程なくいぬの時とも聞えて、やうく夜ふくる迄お、お休らひ、晝の暑さも老の苦しさも打忘れて

鶉のより羽ふ似たる錦此橋を渡りつゝ、涼みがてらこれかれわがれのへりけるも、
今宵の星合の空ふしもあれは、これもまた年ふ稀なる老此すさびなりき。

琴山隱人漫筆

斐雄此懐紙の、普通此ものなり。別ふ申すべき事なし。

本書第八編ふ出でたる葎園集の作者河邊一也の、通稱清意、(名ふわらず) 根岸ふ住めり
き。晩年景樹の門ふ入りき。其證の香川家の入門名簿ふ、

天保二年十二月十八日一橋家河部清意

とあり。(一橋家の茶道なりといふ)又其集中なる景樹追悼の歌の、桂花餘香ふ出でたり。
右の御訂正可被成い。

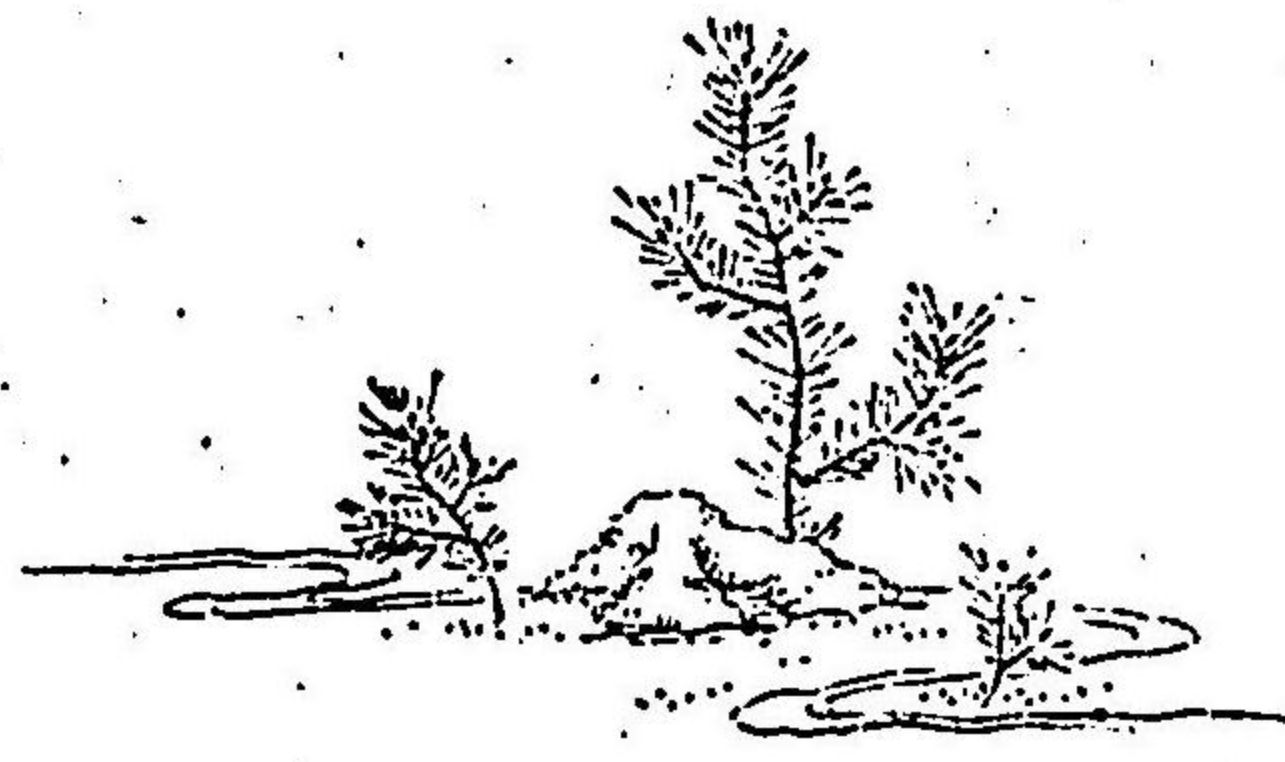
八田翁像の、翁の都嶋ふありし頃、門弟速見晴文ぬしのうつし、ふて、同氏より、高崎御
歌所長ふねくらましもものあり。

志のぶぐさ序

志のぶ草といひとりわが世の昔忘れぬ心ばへふて名づけ給ひしかりたり
さるの下れる世のきらひ大かゝ題詠をむねとまあるが本意あきわざある
より初編の見るもの聞く物ふつけてうめきいでたる限をどてさのまよし
あしをもいはせざる方此ををつまいで給ひしかりけりざるを此年ごろ都
へもえのぼらで打ひそめてのま居給ひしかばあはしき海邊山邊ふつこ
得給ひしの一葉ぶああるべきあらま例の題詠此とつどひさるいとあかぬ
方ふうち思はれもどより家集あど世にはやうひろゆんのかからま後の悔
あるべきまざりなど常ふ此まふもうへありたりさればまべての集此
ありいでんいつの世あうのいとこのまき心地をめればまづわが
どちの見き、及ぶ限をうきつどへておればかりをだふとあかがちふこひ
きおえてかりふ板ふ此ばせまばらく此ほどのまさまぐさといふあしぬ先

安政二年神無月

鶴園親義



志のぶぐさ

八田知紀

一編

嵐山を遊びし折々此歌ども

夜残惜しむ有明此月もあるも此を忘らま果るる花の色う奇
 まき此戸をあけてぞ見つる山櫻まの此嵐此起きよぬ間お
 うぐひまの花のねぐらに宿りて共お起きつる朝をらけ哉
 櫻花さたおし日よりおやる川水のみどりぞうつろひおける
 おやる川かはべ此花の朝まめり嵐の山乃名おこそありなれ
 さく花乃句や風抜さづぬらむおまりのどけき春の日おれ
 峯の嵐下行く水のさそふとも知らでや花のおやひそめけん
 さきたまむ川ま櫻心せよ井手越すお折られもをまる
 いづくまで今いられん兼てより心のそらお成おしものを

さく花の上おこゝろのちり果て今日我身此我身ともなし
 乃どのなる御世此さりの花盛あそぶ盛もはまおこそあれ
 願ふ事ならぬ哉さぶと思ひしおかゝる遊もある世なりけり
 大井川うるべる舟のひまもあしはづくお花此浪の寄まらむ
 そことあくうゐれて宿の出しりど今日も櫻の許お來おたり
 櫻色おそ免たる瀧の糸なればひうまぬ袖もあらじとぞ思ふ
 はなの上お遊びくらしして鶯のねぬまばやぶて鳴くかはづ哉
 花を此まわはれど何お思ひけむ蛙おく夜のありけるもの哉
 嵐山ゆけんあしたを待ちまびて春此夜ながき旅寐哉ぞする
 大井川浪おたゞよふ月見れば空までかけしるせごありなり
 小倉山うつろふ秋の色哉見てつまどふ鹿やみどまそめけむ
 もみち葉此まづくや淵とありぬらんくれある深き水乃色哉
 蔭見れば散らぬ紅葉も山川乃るせぎにたまる心地こそあれ
 もみち葉のいろお出つゝくむ酒のえひの盛お時雨ふりさぬ
 一とせ花見お物しるるついで

大悲閣おのりて

みち月のまゑ鳥羽お物して

萬世の花おのこして大君のいはぐれけむかめ此尾のやま
 おやの川かはべの松や龜此哉の萬代おひくまどりあるらむ
 さく花の雲よがれくの古寺の風のうき世も知らぬありたり
 おやのさへまだはお出ぬ秋風哉鳥羽田のいねの上お見る哉
 おやぐらのいりに吹き越ぬ秋風おわさ田花ちる岡のやの里
 物へゆきて歸りたる道おて

まはまばかり龍安寺の水鳥見お行きて

池水のひろき心や頼むらんむれくるどりのあざりなきあ
 まづあおもくれまふるかな水鳥の折々はぶく音ばありして
 春のはじめ衣笠山哉此ぞみて

佐保ひめのうすみどりなる霞もてぬひあらためし衣笠の山
 同じころ九條なるあおがし此樓おつどひて酒のみなどしけるついで

打向ふ比良の雪の寒けれどけたるまどる春めさふなり
師の翁お従ひて長閑寺の糸櫻見おゆきなる時

ひがし山花のたより我聞そめて君とともおも出し今日おき
まち得さる初花櫻々ふまでの心づくしも知らせやあるらむ
彌生のまゑ清瀧おて

なみの上お打おびきてもささふたり清瀧川のやまぶさの花
同じころ横川おまうでて

大びえや我びえの雲我ふみ分てよがはのふくの花我見し哉
月のいたう霞める夜大路をゆく

臘夜のこひしき人お似さるかな心我そらお浮おれしむれば
まつりの日 卯花の白がさねして神山のまわれ見お行く今日おも有る哉
白川おて時鳥をさきて

かどいぎを聞くらむるさのあらめども卯花さける白河の里
うの花のおやふ夜道を久るさの月のおくると思ひなるかな
加茂川おすいみしける夜

夕涼みいひおはせたる心地していつまお出る山の端のつき
大空の影お忘れてみなそこの月もてあそぶ夜半おもある哉
水鳥お賀茂おは瀬我ふき渡る風いつくまで涼しあるらむ
秋乃はじめ西山めぐりしける時

都おの名のまたちける秋風我今日しも袖おならしつるかお
同じ日おおのしの禪師我どぶらひけるお物へ行てなき程なりなればよみて残し置きける
ものもなき心の知まど住家まで空しからたと思ひうけさや
花のおる比較お山ある音羽の瀧見おゆきて

年へさるさきの水うま白けれどかざせる花おおの隠れつ
瀧お糸のまらべの琴おあらねどもなをとお通へ峯おまの風
横笛お聲聞ゆ 鶯のさへづりおはせ聲おうちおまのふしの物の音おまを
清水おて ふちなまおられるときお音羽山音せぬ瀧も落るおりなり
宇治おものしける時

行く春も世我うち山お入りぬらん夏まで匂ふ山ぶさのはお
うち川のそこの龜石いたの世の聖お御代おあらはれおけむ

たいまの社ふまるとるしける日初秋はあゝる哉

今朝のしも秋はさそひて神垣のまたらし川あかへるなみ哉

初午に稻荷にまうでて

稲荷山花もかざさぬ今日あれどゆきかふ袖の春めさみけり
梅の盛に伏見ありて
い先びどの伏見此里は朝ゆきや梅が香からぬ風ありたり
さく梅はみやひのうちみありみけり伏見此里は春の夜の月

通天橋の紅葉見ゆゆきて

天竺通ふ少女が袖はくれあゝるのほはひや橋の紅葉あるらむ
ちりくくお歸る袂はみぢ葉は木の間にたまふ見る夕べ哉
笙は笛さこゆ うはばりの塵のいうからん笛のねまづ漂ふの心ありけり

神樂岡ふ子日しける時

打ひれてはなる哉見えは神樂岡まつみ引れぬ人あかりたり
殊更に千代のなしきの見ゆる哉松も子日の今日や知るらむ
今日といへば神も出てや遊ぶらむ小松原のかまみ隠れに

彌生の末大原此寂光院お詣でし時

風をさる汀のはなをあらそひてまどるゝも此の涙ありけり
立かへりいつかの訪はん大原や芹生のさとの春のゆふぐさ
同じころ鞍馬おて
たぐまても尋ねざりせば大方の日数あまなる花は見えしや

八月十五夜かぐら岡おて

いつしかとまされし月の山まつの嵐はうへあなりみける哉
あと更お満ちあまりても見ゆる哉大御代から此秋の夜の月
あゝにして松の上高く見る月此のげや都此もあゝあるらむ
人々遠目のねもて見ればおのれもとてみる
久方の月の桂も手おどりて見る心地する夜半ももあるかき

九月十三日此あしよ

ねや比叡やあびえの雲はふく風お今宵の月此影はこそ知ま
同じ夜東山おのりて
山の端の松の嵐あさはれていまいと此なるつきの影あり

みち残る影いさのともある物哉今宵お限る名こそをしけれ
あへりあむ秋哉待つ間も長月の今宵の月夜をしくもある哉
高雄の紅葉見に行きて

あきの着る紅葉の錦長ければやまた水おすそのぬまつゝ
もみぢ葉の蔭おて聞けば山川の音もまぐまの心地おそをれ
おもへども折られぬ峯の梢よりうましく袖お散る紅葉の香
光なき谷のあげこそ中々おもみぢのてらまどころかりま
地藏院の紅葉切手といふもの哉見て

雲はるる高根の紅葉枝あふらふさおくる風お嬉しありけり
雪のふりける朝御ついでのうちふて
ちり哉ごふすゑむいをしき白雪お跡つけそめし人や誰なり
同じ日東山なるあふのし此樓お登りて

雪ふれば遠山もどの梢までみさどのうちおなりおける哉
風吹たば緑あへるくま竹のあげばかりこそ雪のくまされ
む月のはじめ夕さりつ方よりふり出さるおこれのま伴おひて例のなほのし樓お登る

わらしよりまつらつづもれてあはさ山雪こそつもれ峰の松原
雪折の音ぞきあゆる吳竹此夜もいとふらくありおらしさ
むし衾なごやが下お埋もれてさおらん雪も知らぬ夜半うな
雪の上お有明の月此照りされば明るともあくあらし夜半哉
歸るさふ三條の大橋おうりて

ふる雪お鴨のかはら哉見渡せばまおまら浪とありおける哉
かも川此岸此柳此いとよりぞ今朝此ま雪お解々はじめける
九月ばより玉水わたりお物しける時高倉の宮此井手此まさりに時雨してとよませまひ
し哉思ひいでて

君もゑおながるゝ涙やぶて又井手のまさりの時雨ありたり
逢坂哉こはける折々

都いでて今日うち渡る音羽川やぶても旅のうきせありけり
あふさあらの山路いなつ此越えざらむ今もつめたき走井の水
いつのまにまぐれの雨いこえつらむ紅葉しおけり逢坂の關
彌生ばより大津の古郷おて

宮人のそでのみやひやぶねらん花よりすぐるまがの浦風
八月ばより三井の法明院にて

さやのみ昔の影は見えぬこそ月すむ志賀のうらまえけれ
友がち此江戸へくだる旅送りて

都よりともにもにうち出の濱まで嬉しとぼり思ひしもの旅
又まゝしき人を勢多までおくりて共お橋を渡りける時

別き路ありまると今日近江路此せの長橋長しともあし
いつしうと君が待つ間の長橋の幾としあまの上ありけまし
一とせ大和の國にゆきけるとき所々物しつるが中

かまみたち萌出る春あわれねどもうらなつかしき若草の山
石上ふるの日は田のひでされど初穂雁がねいまだ來鳴らず
ものよりもゆるしきものふる乃山老たる杉乃心なりたり
白雲のこゝろや空みだるらむかつらぎ山のまねれあき風
あやのたの空もひとつの朝霧お埋もれのあるかつらぎ山
あかし山朝ある雲お旅ちあちの谷間さやのみ見え渡るうさ

年が経て又みまの山こと更あうらあつあしくおもゆる哉
あさづく日みやへる時ふ久方此天乃の山見るまふとさ
はみやまの池のいさかきまとも昔の影のみえまゝる哉
あつさ此枕の上おひくあり飛鳥の森の八ひら手のおる
さち變る世のあざ浪あくらぶれば飛鳥此川の常おざりける
うべしこそまむの山霧茂あらしまざき木葉の色づく見れば
打ちびく霧の底あるみあぶちの細川まゆみはるおそめあむ
はつせ山檜原の嵐ふらみはり雲井おまめるおねのおとあき
今日もまゝ眺めくはつせ山入相のかねの聲を聞くかな
立花のみやふときみあはらねどもむし戀しきすの原此里
あまみも恐ぶむし跡おやま面影さへお立はまきまつ
まづの男の園のわは畑霧こめてをま此音寒し秋しれさと
吉野おて月のありけりける夜

心おもあらでまきけんあしへのみ影も見ゆる秋の夜の月
めのまへお見ゆる昔のかけばり隈どのなりぬ秋此夜の月

いといたく夜のふけぬらし梟の聲物すてくさおゆあるりか
一とせ花見小物しなる時

吉野山玄峯りもせでや分入らんふみ迷ひてぞ花の見るべき
よしの山霞のかくの知らねども見ゆる限のさくらありけり
霞む夜の花此こそるおまづまりて月の光もちらぬはるの赤
花おねて見るおよひこそ春此夜のおぼる月夜の盛ありけれ
藏王権現の殊に櫻めで給ふ神ありと里人のいへりたれば

この神お給ひやのけむうつせみ乃我世の限花茂見るべく
伊勢大神宮お詣でなる時道中

天乃戸此あけかんとする心茂ばまごたお知りて鶴の鳴ある
赤き渡る初雁おねぞあつらしき我茂ともおふ心地のとして
あさ霧お静まりはてし小山田の穂かみの末茂渡るかりおね
旅人のあさおまづるくし田川鏡とすめるみづのおもろさ
ねりよん事もらしおし神のせやみもまそ川のたよき流の
大前茂拜きてたち出ける時

かしおまる程みや絲茂もなきつらむ立出る袖お露乃懸れる

右此歌どもい都の任ありけるやど折と物しつる日記おどの中よ

りぬさ出るあり

日向大隅此旅ありけるやど折ふふれて物しつるの中

さえ此あるたのねのこ雪寒ければまごたちなれぬ春霞の赤
あつらしき野への緑茂朝おくねたくもろくまはる霞かな
あつらひ月も霞もみやひあてうめよりわか春ありけり
さそふ風あらばといつの春べより梅の匂のうかれそめけむ
静あるあめ此心おなしはてまつ人さへぞ音づれもせぬ
わけぬども知らでや月の残らん霞こめたる浦かみの上お
久方の雲路のかすみはてあけりいづくゆくらん春此夜此月
のつ見れどあさおれもての戀しさに幾重う花の峯茂越けむ
人知れぬみ谷おくまの花も見つ春の高根茂越ゆべかりたり
青葉おのまごなりはてぬ花此木のどあるくお見ゆる頃哉
は赤鳥お心のつくしはておなりさてしもをしき春の暮の赤

山川のさしのいはやうのはさの浪の底も成おけるのさ
 むちばあのかげの月日のたねばや今も昔の心地のまをる
 やどいごま鳴く聲あげし山里のまのまかりの明ぶたの空
 時鳥鳴く聲さけは秋をおきて物此かあしきときありや
 さみだれのはれ間く旅ゆく旅の心づくし誰か知るらむ
 うらあみお打よせられし月おげ此歸るも待たで明る夜半哉
 せみの羽のうすき袂残るる月此身おしむ夏お成おるるか
 墨ぞめ此夕べおあればなく蟬の聲のまきりお物残こそ思へ
 びつ門の小田此白露さやあも秋來おけりと見ゆる今朝哉
 あたのせのさちそ死しより桐の葉此落ぬ日もなき我泪のさ
 山さのま軒端残るるむら鳥の音づれまげくあれるあさ哉
 物おもふやどおや秋のたけぬらむ雲井の雁も音づれおたり
 人も今いでて來んま此まばらく残松おいさよへ山の端の月
 山の端の松やむのしの友ならむはあれうねても見ゆる月哉
 白雲のゆふるる峯残こえのねてやまらふやどお出し月を

高千穂お物しける時

物残おいひものはさぬ大空の月しもなとくまさしおるらむ
 さつ矢もて身残射るよりも悲しきあつさ方此弓張此月
 いつしかと心の奥に染てたりまぐれぬさたの峯のまみち葉
 浮雲のさぶめあき世お似ぬもの冬知る今朝の時雨えたり
 山里のまはのち葉残吹く風の跡こそ見ゆれとふ人のあし
 ちひあわひてさえ渡るのち笹此葉のさやく霜夜の有明の月
 けさ見ればまづ枝おなれる立花の色を雪お残りけるかあ
 大空のはままもあれど松の雪さえまこぼるる峯のまやうさ
 わらいその松よりおつる白雪残くごくる波とおもひたる哉
 春残のみまつことおする山里の心残知りてさけるうめあ
 何事残急ぐ身なればかくばり残しとい年残思ふあるらむ
 ぬば玉のよるの夢うらまさしくて都のさよりさくお嬉しさ
 よの中い現ありとも見えなくお夢とも見えぬ夢の見ゆらむ

大空此まはしとありて皇神お仕へまつりし山おやのあらぬ

又のしこけれと警余彦尊此御うへ茂よめる旋頭歌

高千穂の此みづ山の眞木乃一もと萬代の我日の本の大宮柱
裾野茂けて歸りくるやど

高千穂のまいのま乃原打さやぎさびくと見れば雲降るあり
それよりあふのしの關あいにれなるお關もる茂のて茶さどくみてねもどろあわしらふ
いと思ひの外あり

此どかある御代茂心の關守のいよはりてこそ人茂とめけれ
鶴戸乃いは屋おまうでし時

山松お福かつき嵐ふきたちて星のくもりもさくありあなり
のぜ早と木の葉まぐる、山あげ茂足もそらおて下り行く哉
木の間よりはつゝ見ゆる谷水おこりさく宿る夕月のあげ
鶯もこさゑおのへきかへる花おほふ小春のそらひ此どけれ
大海の浪おうたれて岩ださみかさおもてもやころびおけり
白妙此はまの眞砂おあつつけて我より先おゆくちどりのな
馬おも通はぬ道茂あつと來て今宵も絲なん海士の磯屋お

種の子が乳こふ聲おそ聞ゆかれ夜の明方おありやまぬらむ
薩摩此市來郷お物しなる時みちちて

さらちね乃袖おきごりてありさちし昔おひしきはや川の水
出水郷なる大野原といふとあるおて

さつ人のおや野ら遠く射る弓此矢はつが嶽お雲ぞたさびく
米此津ある孝女おにがしおもとあて

おやのため心づくしのれくおおそ人の鏡のやまのありけれ
坊津に物しけるおや

西の海のありその上のたの薄穂おいでて今朝の秋を待たり
西此うみ此浪路をさる荒おしのほばさ休むる沖の石見ゆ
いはおねのおいしき山の高山のやまどおも似ぬ所ありたり
さけおちりちれば咲つゝ渡つゝ此浪の花こそ時ありたり
鷹乃巢くふとあるおや

雲のゐる山乃頂に生たちてさうといふ名はうへおひにけり
坊乃岬ある双劍石といふ茂みて

焼太刀の名ふかふ磯の岩の根の抜出てこそさやふ見えられ
かさし北みささ北北ふあうりて吹上北高きと限さ所あり

和田の海のいさで波浪ふ運ばせて風のあしたる山のあやし
藤川に物しけること

かぎり飛くなま木の松の見ゆる哉嵐のまふ日をや暮さん
宿るべきふも空の里ふきこゆれどうあしき物う入相のか絲

藤川の薩摩北國東郷北地名ありそふ名さる紅梅ありそのもと一木なりけるが千代松
ふるまゝに打垂れたる枝ささ上あつきて根さしをどめつやうくふして今の五十株
ふえりれ三反ばのり廣これり傍に菅公の御社もありていと谷深くよしめさる所あり

松竹もふよばぬ千代のうげみえてのまさび渡る神さきの梅
神さきの梅のさうりふありあたりまふの心も春や知るらむ
谷の戸の梅のにやひふとちはて、今はと出ん道なかりたり
家ふのへりつきて

梅の花かさしあがらに歸りさぬ北どけかりなる旅のまるしに
はじめて都にのちりたる時の記行の中

さくさくんとしつれどとなく別をしむやどに時うつりふなり

わのま路のなれさる道と思へども今日我初の心地おそすれ
かい人のゆらびといひてとりすぶり泣し面影身を離れず
なぐむらん君の袂よはるあらんまなくまぐる、道のそら哉
いくそさびあゆひぬらしで薩摩山谷北岩川うちこるらむ
あふがしの津より船ふ乗りて肥の國お渡る葦北に到れりけるふ俄お追手あくありぬれば
そこ北磯さた泊らむとて舟子ども碇下しもはてま高軒張してぬるいとみくし屋形だに
なき船のうち星の林のま親しくみえ渡りて天の海にも乗出さらん心地ぞしける

あさつれてゆかましもの我有明の月のま船の出てさふあせ
明る我待ちてや、こぞゆくほどお小さき離島ありその島の岩ねふはとをのしきさまの松
の木生ひよりそま我みて梶とる男おの松の小島の松と申して世お隠れなき名木お侍り今
これ我都のふもてまぬらばうへもなき實おぞ侍るべき我などやこりがにいふをさきて

葦北のこの島の松の海士ならで知る人あまにぬまぬ日やなき
野坂の浦すぐるころ波たつちともいはぬ海のおもて例北追手ふつにたえぬれば舟子ども
あはやくも我出してたはささふあげとも船の後さまへのまゆくやうあて日もくれみけり

あまくさの上あらいやくつづの隠れぬ程舟のこぎてよ
赤根さす夕日のさとりざりぐさここがれて見ゆる浪の上哉
ゆて水嶋のあまごもたはれ嶋の見えず船子どもにどへさる島りあしとのこいふ

ふはれ島ありてたつ名残なしといふ思へばそれも浪の濡衣
内野のやどりにて夜あはばうり

さと神樂はじ先けらしな時もりの鼓のやうお物のねぞする
いづこもく田のもはひつち打のへしつゝ麥作るさま賑へり

豊のふもありし田の實残頼まひて更ふや麥の秋残まつらむ
くろさきの驛につきたりけるふ市此ちまたふ人あまふつとひて物見なる何事やあると立
寄り乃ぞけは福助めさるるを此まぶみづのら謠ひはやしつゝ輕業するにけりそれが足乃
短きこと人ふ似す

人皆のくれたるわし残あしおして世残かる業と渡る也けり
同じ所ふて さやうふもみえ渡る哉くろさきの浦のむらひ此わか松の里
下は關ふて 舟さやふ關のとまりの浪よりも物賣る聲はさわびしきあ
今宵しも風浪いと荒ければ鍋の浦といふ處おかしいて泊りぬ

よもまぶらつぶぶつ浪の音きけはささるら鍋のたぎるなり
乾珠満珠此嶋 長門此海まやひ汐みつ玉此名乃小島おてれる朝づく日うあ
周防灘三十五里とうはふ間残風の心一筋おとかりて一日の内おひさまば船の射る矢な
ま鳴り響きてゆくあるおそれいどこころもなく酔ひ臥して人々此心よげお物食ふあど妬
く思へり又の日も四五十里の程残はと疾く物しつと白浪残伊豫おもとやまといひし
あふりの今もふがふ事あくまへて西さまへのと泪おち行きて風の心おも任せぬと辛う
じて讃岐此獅子の鳥といふまで着きて暫く時をまつ

あら浪の聲残はうりて獅子の鳥吼るさうりお我のさあなり
金毘羅詣せんと願ふもの有れば多度津といふ處お船残よまさて昨日今日にまじうさえ
まふりしもまゑるく海遠き山々の皆白くなりぬ

やさ太刀の土佐の遠山さやうふも初雪ふれり土佐のとを山
白峯此御廟の東南の方ありときけとえまうて走丸龜此城の右ふあうりてはとうるはしき
山あり名残とへば小富士とあにいふ

大空はものとはありの見ぬねども上ふ立つへき山ありのりなり
ひろはとまり 月清まねさめて見れば播磨海ひろのとまりお船のはてあさ

明石の浦はりま海明石のとま月照りて夜船うれしき旅もある哉
須磨此浦過るやど明けはあれゆくお例の舟心地の醒めはてぬ物のらなとあらぬ浦傳ひお
おもはえを船やらの旅はひいでぬの此内裏の跡をみて

うつせみの世の仇浪のあと我見てあらも袖我濡しつる哉
千鳥さく淡路此島も遠くあり明石此浦も隠れふされど鶴越より武庫山のおりのりけて名
さくる限我一目お見渡しる景色物此心知らぬ限もいとたぐらぬ心地をめぐり日頃時雨
がちかて風の心も定めおのりければ船といふ舟ども皆浦々あつとひふたりとまえて今日
しも此よた日おれくれをも朝びらさしなり

なみは津の大船小舟まき取みの寄まるが如くよする之けり
安治川ぐちふいる

あぢ川の浪の上取るかけづくりなつおもやゆる所ありなり
又の日淀川我此ぼる

ゆく水此心もあさく成にけり流れての世ぞかきしりける
世中の思ひよどのみづぐるまめぐりくはてはておのりなり
みどりある空もひとつの霧の海お浮べる島や此叡のとや山

伏見の驛お着さよりけるお我君此江戸へくだり給ふとてお此御館お物し給ふ程あり
りまことや此あたりさきつ君此御世おのりらさ軍し給ひ人をも心くぐさし處あるを
今のうめでさき御時おしるあへる事かしてしおどいはひおろのにこそ

長閑おも太刀の緒とさて我君のおより近くもぬる夜半哉
まゝ此日 朝たちて竹田此はら我をけくれは都の霧のおくおぞ有ける
そことおき竹田の原の霧の上おあおの峰ぞ現はれおける
一とせ國おくだりける時の記行此中

旅よそひ何くれの事いと懇お相はよりける人々此心まらひ我忝々おきて
別路を思ふばうりの旅おらばかくまで袖のぬらさいらまし
伏見の津よりふねおのる

都思ふ心此綱手さりのねてたゆたふ間おぞ夜いふ々おける
海 路 見るぶうちお浪路へだて、山乃端の細くあり行く我心のあ

海おし乃山の端出る月おの浪とともおぞあらはれおける
夜おる過るおる西おらくふさ出雨さへえたひさぬるおやいとあせしう帆引おるし管
ふさなどお窓引さわたりて見ればつくともまられぬ浪の上おあやしき火ども此見ゆる我

船子ども亡霊ありとはひ騒ぎてたゞ漕ぎおこぐやう／＼明け離るゝ頃うらうじて周防の中此せきといふ處おつく今日しも日哉よめは年はつる日ありされば船の内もがこの如く春のまうけするとてきめ引きききとち急ぐ程お日もくれぬ夜更々て後例此式ありとて舟子ども船歌はとあはれふうたふさて盃のきられ限あくありて上あう下一つふうさあをぞぶことぞいかりぬ

こん春とゆくとしきま此中の關はさもろ共あもり明してん元日屠蘇白散りなけまどかはらけとう出て例の祝けしきばうりものす

ふるとし我送りおろして新玉此春をのせたるふねのうへ哉さゆいへ うぐひまも通はぬ船の窓我あなてあら磯浪の花のまぞ見る

よもまおらたどる夢路もやまうらま都古里かた／＼あして又の日 あさ日さきひんぶし山乃面影も遙るお霞ひはるのきあけり

春風もけさよりまや吹たちて船人ひさむきまのうへあ筑紫路 あさ夕あたてる都の面影もあ／＼あびのおも荷あけり

峯の雪とけてなるゝたお水の聲なはさむき春あもある哉山里のなや風さむしさく梅のおほひもあゆる心地此として

山もとの萱が軒端お梅さきてあつたあまべき時ハ來あたりうち渡ま野中あまてる梅の花もままお宿のものとするらむ打あびく野原のかすま心せよあてる小松此千代のかき見ん家路おとむちうつ駒ハ隼人のせとのまほせも越ぬべらありあまおはる弓張月のあげを見て鶯ぞあ／＼飛く磯のいはお根西の海の磯もとゆする白浪のいつまの日おる春我知るらむ母子じま今ぞ語らむよそあしてあまた年浪越えしつらさああら玉の年の七とせまち／＼しみ心いあおあびしありけむこの歌ともい文政乃六年頃より天保乃未までお物しつるが中あり

一一編 上 卷

春 歌

大嘗祭行はれし又の年此春の始によめる

天の原かまきまをふりて春のきぬかきまを去られぬ御代の例に

初春鶴 都みてあまたの年の経たれども今年ばかりの春あやまら
立返る春のあしたづあらためて呼らむ千世此聲のさやけさ
春風春水一時來

東風暖入簾 玉ぶれのをその内なる空ぶき此あやひ動うまはるの初るせ
雪消山色静 さのふらふ春此姿にありになり雪にやつましつらぎの山
瀧音知春 とけぬらんさうねのこ雪瀧つせの響とありて春や告ぐらむ
子 日 子日せぬ春しあけまば松よりも久しき世をば我の経あまし
若菜知時 時まらぬ猶ふる雪の心あもあらはぬものわの菜あやむ
折にふまゝる 霜さやぐ小笹の原のうぐひすのいつ打とたて音をば鳴らむ
春色満湖上 近江のや八十の湊此隈もあちたへて春の色をゆらむ
湖上霞 さい波此志賀の大さ霞む日のかいみ此山も影なありたり
遊 糸 けや姫のかまみの袖をふく風あはつれし糸やまだれ初らむ
歸 雁 天ははらあひぐ霞のみやひだにいさらぬ方に雁のゆくらん
海邊春月 春とあらし筑紫の崎此みるめまで臘月夜にもれぬころあ

雲 雀 ぬえを鳴く雲雀此聲の春の野に乱るゝ糸をくるかとぞ聞く
故郷董 ふる里の野邊の董此花むしろちり此をまゑて春や経ぬらん
雨中柳 打ちびく柳のいとにさそはれてなふも霞の初光とありけむ
閑中春雨 降れくゝとふる我世になし果て春此あめもいはぬ宿哉
雨中待花 咲いでん花をばぬれぬはざらむ長きひねもま春雨ぞふる
山家待花 願ふ事あは山里もさくら花まつにこゝろぞうごたそめぬる
尋 花 ゆくら花さづねむびぬる我さめぬ峰此霞もつまあありたり
陽明殿にて花の宴さまはりける日

霞中花 かりさちて君の御袖やふれつらんあやみにあへる糸櫻のあ
かくてとるぬ光しもあがき糸櫻いかにうたさる契あむらむ
霞む日此花のあたり旅行く時のおぼる月夜の心地あそまれ
故郷花 いおしへの春にもあはぬ花ばありまえこそ渡れ志賀の故郷
湖邊花 桜花なごらの山にさたしよりまがは濱邊にたぬ日ぞあき

山家花 影うつる花此下水よの中にいつるもをしきこゝちあそすれ
 夕花 色も香もかきみの内にをさまりて暮るぬる花の陰のあ
 風前花 ぬらでしもうた世のさまの知るもの花此上おも吹く嵐哉
 落花如雪 墨ぞめのゆふへの空の心うらゆきとまぶれて花のちるらむ
 若 鮎 散るゝる花あまじりてよし此河鮎子とぶかり清き瀬ごと
 藤 藤の花うさげにつけてあひしき初もとゆひの昔かりたり
 山 吹 さそはまん行方もまえて吉野河浪にうつるふ山ぶきのはな
 春 欲 暮 今日明日ののぎりもまえて山此端此青葉にあびく夕霞うあ
 暮 春 雨 今日までとくれ行く空の春雨の暮るのぎり袖よりやふる
 旅泊春暮 行く春もまぶしむゆさへ水鳥のうたねわぶするゆらの湊あ
 折あふまざる 山里此はるのくれがたうぐひまの古巢に歸る聲ばありして

夏歌

新 樹 かしあべて梢青葉にさる時の花もかもはぬものになりなる
 大空此まどりのくらくくもゆるまで山の青葉にありにりなる哉

朝 新 樹 朝あゝまげる青葉の山こればはるの眠のあどりぶになし
 新 樹 風 目おまえて涼しきもの夏山此若葉を渡るわらしあひたり
 雨 中 橋 けまゝと雨にこもりて橋此香哉かぐ時ぞそでのぬれける
 旅 宿 橋 たちばあの花ちるさどにぬされとも昔を語る友あひたり
 郭 公 橋のちりにし日よりうらぶれて空あのを鳴くをとゞま哉
 朝 山 郭 公 山びこもまらぬ雲の流さつうおもあきてまぎゆく時鳥うあ
 郭 公 遍 ちつらさや高間の山のやとゞまを朝なる雲のうちに鳴あひ
 郭 公 稀 時鳥軒のあやめ此香をとめてなげばやあひぬ里あひるらん
 雨 中 郭 公 ちとゞまを二度あらず成にかり一夜聞しの夢あやありたり
 初 五 月 雨 つまゝと雨此ふる日残足引の山をとゞまを音づまになり
 初 五 月 雨 五月雨の雲にのき端の埋もれてやまはとゞまを枕おぞ啼く
 湖 五 月 雨 たち花此香吹かかくる夕風にさそはま初しさをだれ此雨
 湖 五 月 雨 大君此あものゝ濱此海士人もいたづらにふるさみぶれの頃
 濱 五 月 雨 さまどまにぬれどなりたる長濱此濱の真砂のいつの乾あむ
 五 月 雨 久 五月雨の雲の内にや朽ぬらん波のかにまゆる山此端もなし

田 上 螢 植し田のまだ稻葉ともええなくに露とまだれて飛ぶ螢うな
 夏 月 たりし日の同じ雲井をゆきめぐる影ともええぬ夏の夜の月
 遠 夕 立 大空此雲此嶺までかゝるらんかつらき山此ゆふだちのほめ
 島 夕 立 神のごと鳴門の浪やさそひらんゆふさちすなり淡路ま山
 社頭納涼 かみぎさのみさらし河此夕涼を更に願ひのゐる世ともなし
 瀧下納涼 夏の日此影もくゞけて流を行く清き河乃かとのまゝし
 樹陰納涼 いつしゝの空をまをまちけん心地して袂にまぶるなら此下風
 船中納涼 川上此たゞの杜のまゝ風を袖につゝみてかへるあるか
 祇園會 うつり來て山も大路抜るさるうき神の心此ひげなるらん
 夏 糸 つくはねの新桑眉をいとに引きくる手隙なき夏にのかりぬ
 夏 地 儀 三吉野の瀧つ河内の夏なぶらわきの霧ふるところなりなり
 夏 海 山ならぬ大海原のみどりまで涼しきなつになりなるかな
 夏日祈雨 世の人の千々の願ひも久方の雨ひとすぢになれるころかな
 野草秋近 花さるぬ草もみなぶら來む秋此景色になびくむさし野此原

山家晩夏

みそぎする川邊の夏も思はぬの横まつ山此すまのなりけり

秋 歌

水邊秋來 心おもいまささはら老三島江の玉江のあし此秋のはつるせ
 初秋曉露 志此ゝめ此小笹の上此えら露にのせよりさきの秋葉える哉
 初秋露 夕月此のげ萩の葉になびくなり風まつ露やおきはじめけむ
 裁女郎花 我宿にひるまゝとりの女郎花馴し野風もえらずやあるらむ
 薄未出穂 まねくらむ景色のやおも出なぶらなに悉ぶらんまのゝを薄
 雨 中 萩 わぶ袖にすらむと思ひし萩が花けふ降る雨にちりる過なむ
 萩 對 水 萩が花ちらぬも水のさそへばやなぶるゝ方に打なびくらん
 雲間稻妻 いなづはののの光くさびにまゆる哉かつらき山の峯の白雲
 故郷秋風 故郷の秋此野風わぶそで此上にのま吹くおゝちこそすれ
 秋此歌此中お 秋風に露此のぼれぬ里もほらむいつこにからん物思ふ身萩
 蟲聲非一 かぎりなくさこゆる野への蟲此聲いつれの秋う數へ盡さむ
 月 月のまむ雲の秋をえりぶやに向へばかつる我なまだかな

都 月 秋ごとにもままさり行く月をまばかきなる年や光あるらむ
萬代のいま此都の玉しきの名おあそつき此すまをさりけむ
大空此月も光やかさぬらむ千とせうつらぬいま此まやこの
新宮つくりみぶさ給へる秋都月といふ事故

山 月 大宮此光やそらにかよふらむさらにも月此てりまさるうき
てる月のまだみぬねども足曳此遠山まゆぞおやひそめさる
田 家 月 雁のくる山田此秋をわぶとへたり穂のうへに月も匂ひぬ
故 郷 月 古里の雲をまでおやかははりけん見しよおも似ぬ月此影をか
八月十四日此夜

十五夜月 隈もきた今宵の月此嬉しきの明日此空までまゆるかりなり
かくばうりみちなる月此光おの消ぬ思もあらじと思ふ
敷しま此道の上おてまる月此満ちさる今宵うたのさらめや
九月十三夜笠洲のみさたにて

松の嵐磯打つ浪もこゑやめて月を散しむに似るよはかき
秋此夜の月の行方をまふふおの西の海おそこよなるりなれ

月前松風 かれく〜てふくともまらぬ松の風月夜とかれが聲の聞ゆる
夕べく〜月の出汐の時つげて松にふくなりみつのはまのせ
月前遠情 月にそふ面あげあらでえやいとむちのの鹽が味天此はし立
駒 迎 君の代に逢坂此山うちこえてまやあへいつる駒いさむあり
初 鴈 物ごとに悲しき秋をはつりの聲になみだのおとしつる哉
田 家 興 さ此ふらふ初穂のりがね音づまて田中此杜に人つとふなり
足引の山田此さり穂こく時になりにならしもうたふ聲まる
野 鹿 風ふらぬ野邊の萩原おびくあり妻とふをじか今まさるらし
鹿 聲 幽 さくかれてさけはこそあれ白雲のおはさの奥此さ萩鹿の聲
海 邊 霧 難波がさ霧此おしる海原の生駒あさりやなぎさあるらむ
海 邊 袴 衣 浦人此おれ衣とわあらひうの聲さむくかれるあきかな
網引するふねの夜寒我身にし死てねらまぬ妻や衣うつらむ
水 邊 菊 岩間ゆく水のみさるみ来てこれバ一むらぎくの雫おまけり
夕 紅 葉 かし引の山下でらすもみぢ葉の夕日此後此ものにざりける
みさぶちの細河まゆまふつ霧のいるまでそめてくる空哉

雨中紅葉 時雨ともえぬ雨ふりもみち葉此句ふ小春の空の長閑けし
秋 霜 長月の有明此月此のなさをむしまぶ目に見えぬ霜やおくらむ

冬 歌

初冬 嵐 生駒山おびくまぐれの雲見れば嵐ぞふゆをさそひ來にたる
閑居落葉 嵐のみ朝さよめする山里此のき根此まちにちるおの葉のな
月前落葉 足曳の山の木おらしさちにたり木の葉にくもる有るけ此月
曉落葉 曉此おの葉の雨にくらぶれば時雨のをでぬらさうけり
寒 蘆 霜さゆる渚此をしのつるぎ羽に觸まけん蘆や下をまぬらむ
橋 霜 津の國此難波堀江此いさばしにいづ此人間に霜のおくらむ
氷 始 結 見えそめしたらひの水のうま氷まぶ幼子此手おもろくらず
水 鳥 多 朝おぎふ浦の洲さき波來てまればたゞ蘆鴨のよするえたり
鷹 狩 御狩野にたづねむれふつ鷹人の影はるおもみえ渡りけむ
閑庭雪 静にもつもる雪哉我いなのまめのほりまてひと目おえつゝ

名所雪 ふじのねの晴まらずともよし庵原此清見が崎おふまるまら雪
連日雪 めづらしと見し初雪此面あげもつもる日敷に埋もれにけり
霧中雪 東路の草のまくらにふる雪の旅の日おのつもるおりなり
旅宿雪 故郷此友こひしさうねてよりつもりしものを積る雪かお
江上雪 三鳥江此玉江の蘆にふる雪のたづねよりやこぼれ初らむ
雪中千鳥 日敷ふる佐保此川原の白雪に跡つけかねて千とりおくなり
寒 松 まら雪此つもらぬ日こそ中々に松のまぶさの寒くまえけれ
年のくれ山里にありて

谷水のおとのみさゝて年浪のはるにこゆるも知らぬ宿のな

戀 歌

戀 わたつこのありそうつ浪徒らにかけぬ日もなき君が上りお
たましひも我身おそはせ成にけりさてもおすまぬ君が上哉
人言のさぶあき世ともまらせして君をつらしと思ひたる哉
うき人の心のふくの五百重山いつの世までう我をへだてむ

我まもる衣の玉いとしをへてあはぬ思ひのなみぶなりけり
 思はじと思ふおそむく心こそ人おまさりてつれなかりけれ
 手枕おかつる涙のたきつせの人のそまらねおとなしおして
 ここの葉のはるにむすびし我中の契の神もまらじと思ふ
 秋風のおといたよりにあら糸どもさくより殊おまさる我戀
 早く世おいひ騒おれし中ぞともつゆ知らせして月日経おたり
 わはさらば命もあくてあらめやの嬉しくうまし我ねがひ哉
 いかなればまてとも人のいはあくにまつ心おも今の成けん
 違約戀 おぼつうき終此契のいるあらむされめし宵の數多さびひぬ
 不逢戀 我ためお君がもるらん逢坂の關のいづれの世おひらけむ
 乍臥無實戀 どけさらばさてもあるべき下紐此打ゆるびてもまゆる夜半哉
 切戀 わはれてふ言の葉ぶおもつと得てはまなぬ藥おならまし物を
 互恨戀 中垣のへぶておかゝる葛の葉此いづれをり先うらみ初らん
 互偽戀 山ぶたのさき言葉の花此色にわび心さへうつろひおけり
 逢増戀 涙川み流こすおまのいさびの逢ふせよりこそうへり初られ

通書戀 思ひ余りかきやる文を言の葉の花とばりかや人のまらむ
 見書増戀 水莖おあまる情をくまてこそ我おるも手のぬれまさりたれ
 思貴人戀 雲井ふく風おらなくに玉だれのうちまでかよふわが心のさ
 絶後逢戀 ささえしこゝろを共に糺川つひの逢瀬の今日よりまふむ
 疑真偽戀 うらとへどうらおものらせいおせん思ひ思はぬ人の心の
 疑行末戀 八えや路の末まら浪をゆく舟のうらやまおらぬ我ちぎり哉
 閑居戀 世の外おまがく鏡と思ひてしてゝるおうつる人のおもかげ
 深夜戀 君こふるおゝろのやまの曉此かねより此ちも明がてにして
 馬上戀 妹おりとまのお夜道お乗る時のかひの黒駒うひぞありける
 戀命 おもふ人おからましうの空蟬のよおをしむべきわが命の
 寄檜戀 わおれおねやまらふおに咲おけり妹おまがきの朝顔の花
 寄蕙戀 菅蕙夜をもうさねぬふさりねの三ふも七ふも定めおねつゝ
 寄烟戀 此おろの我胸の火をうつしお富士の烟もさちやうへらむ

雑歌

社頭水 五十鈴川これも神代のまかみ此おあじ心み澄わたりの
目みえぬ神も影を寫まべくまめるの賀茂のみたらし此水
天皇御位おつりせ給へる日

萬代をまゝあらためて高きくら今日さし昇る天つ日のかげ
天の下此大みたららぬはじ岩木もうゝへ君が萬代
大嘗祭行はれし時

黒木さて尾花かりふくまわらうに作らぬ道のまえあたる哉
おや前お今宵たく火の千早振神代のまも我あををかりなり
神の代を遠き昔と思ひしこのみ手ぶりをまらぬかりけり
かしてさに落る涙のいついあれど今宵ふ似たる時をのりなり
年月の空ふうるべし面うかひふもとにきえつふじのまば山

山上曉雲 夜も今うらなはかるらん高間山うつりそめぬる峰のまら雲
わたつみの沖ふたゝよふ白雲もやどり定むるうたの有りなり

雨後山 高砂の尾上の松の朝ぐもりはれぬやあめ此おありあるらん
名所川 流もてい濁り行く世もまらざらん吉野の河の音のさやりさ
河水久澄 ちぶれての世の人をちも水上此こゝろくまると宮川此みづ
海 大君のまゝてあさむとうき原の沙の八百あひお浪の立らん
嶋 おしてゐるや難波の沖あふさつかく浮べる玉のわはぢま山
峯 松 雲風あたちまじりても峯此松うつる心此まえまもあるかき
湖底松 人ままぬ谷の老松まづうにも経あけん千代を思ひこそやれ
馬上眺望 乗る駒のはやきを何ふた此まけんあゝぬ野山も有たる物を
海邊眺望 風まゝる蘆の葉こしにまゆる哉難波の沖此海士のいさり火
川邊眺望 萬代のまてぐらあして神島のいそま此松あゝるまらま
海邊眺望 伊勢の海を豊さののなる天つ日の二見の岩や高みくらある
水草隔舟 舟まつとやけらふやどお河上の山の端まえて夜の明あけり
扁舟暮歸 ゆふ月の影あまうれてあしの海の雲よりあへる海士の釣舟

舟行夜己深 大橋のゆきうひたえて難波舟みをさる此なる音のさや
 夕陽映島 以つまで沖つ島ねおのふるらん浪おかくれし天つ日此影
 幽徑 苔 むき苔のみさを残せても世の中此道の再びふまれざりたり
 洞 棋 霧はれぬ横川の洞の棋此葉の露のいつれの世おるか
 故郷 木 故郷此志賀の濱松老おけりうらむるかぜ此おるぼりして
 山家 煙 やまごしにまゆるりぶり此一筋を隣とたのむ日がままひ哉
 山家 水 山うまに水の心のまむをまてわれもとこそ思ひ入りしう
 山家 送年 年もへぬ今にいふおど世の中もかついゆるしき山の奥の
 山 山さとも都戀しくありおけりむおし友此ふりはへしより
 窓 窓 わぶまどの螢も雪もわつ免ねど月と花といへだてざりたり
 窓 雨晴 雨晴れん空をさざりと見るふまに窓此光のさしてたるお
 夢 夢 うつゝこそはうありけまぬば玉此夢の昔の人もませたり
 閑居 夢 ゆめぢよりまばし通ひてくる時の思ひ捨たる愛世ともおし
 柳 久しき松の根さしもありといへど檜柳ふり増らざりたり

名所 鶴 みち此く此末の松山よろづ代おあゆるん浪の天のたづむら
 鶏 庭鳥も老のまぶたお寐醒してあくる遅しと絲をや鳴くらむ
 蝸 海 かつ隠れ且あらはれてかたつぶりよ我お心おまうせける哉
 瓢 老牛 びうおれバ老かいままる老えびの頭に雪此つもらさるらむ
 橋 世中をこゝろかるくも渡る身の友いひさでの外おありけり
 山家 橋 今い世お残らぬ橋もおはかる我心のうちおつくりてぞ見る
 野徑 橋 たふれ木我橋とまとして踏みおれし我山住も久しかりけり
 野 鶏 おまたさび打わたれどもひとつ橋おおじ野河此流おりたり
 野 中 鶏 たちてゆく道のそらおて曉の鳥のはつ音をさるぬ夜ぞおた
 野 中 關 關こえておへりますれば殊更お都の空のとほくもあるお
 野 中 友 旅おしてうれしき物の敷島のみち行く人おあへるおりけり
 旅 宿 夢 さめぬれバおくぞ悲しき故郷此夢此うをひ路今いた此まじ
 旅 泊 夢 うれしくもうさねを夢とまじゆ免のうつゝに歸る浪の音哉

風破旅夢 草枕いりふむまびてねおん夜の風も知らまぬ夢のまてまし
 秋 旅 露まかた草の枕ぞほはれあるぞら行く月もあひやどりして
 冬 旅 みちのくいげお道遠しまつ島の雪もるまでにかれる旅うき
 遠 旅 角田河わよりしまでのあつかしき鳥の名をだに聞つる物を
 折ふふまゝる 敷たへの枕うごかす浪は音もまをまてもの旅おもふ夜半哉
 かさし此岬おものしける時

田家煙 吹上此濱のまつばら打越てあひやのうさにもつ鳴さわたる
 里 煙 烟たつ田づらの里此賑ひの世のかまどおもひるありたり
 薄暮風 夕暮のさびしくもあるの年々に立そふ里此なぶまきまども
 玉 獨のまおむむるそらの夕風の花ふふくよりつれあひりけり
 玉 びび人の宿とも知らば墨ぞめの夕べの風のとほざらまし哉
 さやのさる御代の光あははざらば輝く玉もひやあひららん

石 大王此大宮ばしら敷たてしそのいしをゑのさまおまされり
 硯 藻汐草うたうるとしもあなれどもさほが硯此うみはてぬ哉
 扇 打てもすいしきも此の敷島のやまと扇のまおたなりたり
 寄風述懐 定あき習の風お似されども憂さのひらぬ世にこそ有るま
 古 戦 場 船のうちの昔がたりや聞つらんわれのままさる須磨の浦浪
 防 人 消かねしそ此人玉の八島がさ今もあみまにもええたりつゝ
 防 人 君がた先事しあらばと思ふまの花の今こそさくべのりけれ
 ある人の厄除のうさおひたるに

日本武尊 つきさてし心の柱ゆるがせバ鬼のうらゝふひまやあきらん
 守屋大連 白鳥此うげおそ見えねまつるぎのさやうに跡ハ残りける哉
 鎌 足 法此鐘聞えをからむ大御代のありとも君の知らずや有けん
 鎌 足 公 ありさく榮えたる哉さい波の大津の宮のふぢあみのはさ
 和氣清満卿贈位宣下ありける由茲承りて

菅 叟 相 二つあき道此をりを位山たのねまでおも此おしなるあ
 菅 叟 相 日の本の心をたねの梅の花あらくさあるあつあひつゝ

藤房卿 照る月此さやけき名こそ残りけれ空行く雲お影の見えねど
親房卿 さげつるふま此林おくらぶれば吉野の奥も端山ありたり
楠公の花見給へるうら

玉ぼこ此道の上おて實を結ぶおゝろのはおの君ぞうゑる
義家朝臣 わづさ弓やはゝの神乃こ心我手おとり得る君ぞかしあき
新田義貞 君が爲祈るまことの海神此うらひくまのうへお見えけり
鈴屋大人のゝに

朝日さほ高ねの櫻さやのあるみち此まをりの君ぞのこし
香川大人のゝたお

われはてし歌のあらま田君おくバ紀此河水流はうでひりまし
大黒のゝさ お此神のうちかためたる國土にいづらんだから限あらめや
三番叟此鳥帽子と鈴と流りきたる

舞をさ先にはひ納めて萬代もよろこびあれと猶やうたはん
壽星此のた 天つ水あふみや世人うつ蟬のいのちつぐといふ神を此かみ

車胤 文此うへの光とのこや思ひなん名さへみおたしまどの螢
朱買臣 今こそその山路のつま木末終お月のうつらも折らざらめやの
蝦蟇仙人 かくてふる世も安ければ谷々く此さわたる限道のありたり
李白 くむ酒のあられお浮ぶ舟おらば乗てをゆるむ君めさずとも
二祖 めおみえぬもの我身をまらむとて親お受たる肉いたちけん
猛虎一聲山月高

足曳の山もさくべき聲をきり月のかつらもいまうちるらむ
女ふらり時雨おぬれ行くゝた

さためあき心くらべの村時雨雲のをそおのこもはさらあん
小野小町 言の葉の匂ひ此うちにおほふ哉花おあがめしきみおかも影
大原女 大原の山乃つま木にとりそへて名さへ都おうる子ありけり
船中遊女 おび人の浪の枕をとるべおておはれはあきさうらの浮みる
月夜おもゝざらで鳴くか釣舟のつどふ港のううれがらすの
海士 中々に世の仇浪おうたまづむ人をおはれとおまやまららん
都へ登りける時友おちつどひて餞しける日雁此歸る流見て

思ひなく友もあきれや鴈がねの心やすくもたちて行くらむ
おなじ頃關廣國ダ南島へ渡るに

思ひやるやどの雲井の旅衣うたえふたゝん身こそつらなれ
旅衣さちも別れぬ程さぶらあはん日のまどまづいはれなる
都にありけるやど彌生の末つうた友達の國へ歸るに
とゞまらぬ花鶯にさそはれて君さへうへるはるれくれのさ
國にありけるやど江戸へ物しける人々にとみて贈りけるが中に

そへてやる心此駒の立ちへりあはむ日おこそ離るべらあれ
東路の富士のねおろしはうきれば思ひやる身の上お吹らん
君がゆく海邊山邊此あきのつきをれぬ秋あやどしてや見む

浦賀の津あ夷の舟ども見え來れる頃其まもり此役ふて江戸お難波お物しける人々後饒し
たる日
ふたつあき心のつるぎ朝夕ふとぐもまがくも君がさめこそ
ものゝふのとさし心のつるぎ太刀一度振らば御世の安ん

鹿兒島おはじめて大砲船のくり出られてを江戸の津あつかはさるゝにゆるかとのつう
さふてものしける人の歌こひなるお

並びきた國此御いつ茲大舟のやにわけて行く君おもある哉
渡久山親雲上ダ琉球あへるに
あらちねの親のまもり此あるが上お我も祝はん君の舟出茲
若君かくれ給ひける秋此十五夜お

なまたのまみちたる秋のそらあれば月の盛茲いふ人もあし
都の任あましやど七月ばうり母君の身まうり給ひしとし告々來ましお
ふる郷のいななる秋のたちぬらん思ひもかけぬ風の音づれ
たらちねの母のいまい此門出をば知らぬや罪の限あるらむ
おなじ頃景周ぬしのもより

藤衣さびおしてさるまび人乃秋のおもひをおもひあそやれ
たらちねの八重の汐路の遙おも歸らん日をや待わたりけん
かへし
藤衣旅のそらあてきたるこそとりうへされぬうらまこりれ
今こむといひてわられし偽乃罪茲こゝろおせめぬ日のあし
師のうしの一週忌の追善會茲東山あるまおのし此樓おて物せられし時懷舊のこゝろ茲
天北下いつこおゆかばさうざらん悲しきたみ昔がたり茲

一日だふとせれぬ君が上されば玄のぶともかた昔きりけり
又三回忌のまとのふ同じ所おつとひて寄花懐舊の心哉

さくら散る春の山邊にまどぬしてまばし昔をわきれたる哉
穂井田忠友が三回忌の追善會我同じ所おて物しける日秋懐舊哉

ひんみし此野邊の萩原ふみまて昔がたりおきつるらふ哉
君とわが佐保の河原に見し月此影こそ今もわきれざりけり
遠のらぬ君が昔をかたるまにいたくも月のふたおけるうか
北野ある松梅院觀山大徳の追悼お思往事といふおと哉

來しかた我々のばぬひまのかけれども涙の今宵落しつる哉
大のたの草葉も知らぬ白露の君我々のぶのうへおおそかけ
白尾國柱翁の三十三回忌お寄書懐舊の心哉

ひとりしてふと見る道のくま毎お昔此人此のな我こひつゝ
師の三十三回忌の追悼に暮春懐舊
春はゆく方にひられて歸りてぬ君と見しまに年を経おける
君をしもさそひていにしそのうみの春恨めしき夕の暮哉

松村景文が三十三回忌に寄書懐舊

うつし書に似たる我見れば遠近の野山も君がかよとこたり
母君の三十三回忌お

かた人をまたへばやめてこねたり涙や玉の行方あるらむ
富士谷御杖が三十三回忌に追年懐舊といふ事我よませたるに

年々の月と花とのまとのふわうからせうたふ君のうへのお
師の七十此賀に寄竹祝といふおと哉

天此下さらぶうかかた吳竹の千世の色こそさやうりけり
母君の七十此賀に寄葵祝

ふたりある子のもろは草諸ともに君の千歳お逢んとぞ思ふ
氣吹舎翁本卦がへり此やぎおとしてみづうら六十年我一つの敷お敷へつゝ玉此緒長く結
びどめさんおと語りて其歌を摺物おして贈りおこされしうべお此まも一言はきてんとて

一たびの此ちの八千たび百千たび繰るへまらん君の玉此緒
氷室長翁が七十此賀に
敷島の道のちまたにくりのへしうざり知らまぬ君の玉の緒

岩下某の庭に魚鳥の名をへる二の石ありていとめでたき故由此あるにつけて祝の歌求め
らるゝか さもこそい喜びとえぬ宿あらめいはをも動くけしきある哉
家うつししける人のもとにて

新室のはいりおたてる松此木此まつふいたらぬさちやあからん
寄 弓 祝 ものゝふの梓此弓のあるはまのひさきも今いよるづ世此聲
寄 神 祝 守るとも知らでや神の守らん願ふことあき君の世おれバ
かくばうり治まざる世此ねを言ひ心をせくや神もうくらん
寄 鏡 祝 さやのさる御世おもあるのを萬世の鏡と照らけ光あらまし

二編下卷

春 歌

ふる年お春たちける日よめる
まてといふにとまらぬ年もある物を嬉しく春此返りぬる哉
元日のあした雪のふりければ

諸人此たもとにかへる春の色いふるまら雪も埋みかねつゝ
東風暖入簾 九重の玉のまだれのひまとめて今や吹くらんはるのはつ風
おどろかま篠のすだれ此春風お玉の緒さへぞゆらぎ初たる
春色浮水 大空おかへると思ひし春の色のやぶても水の上お見ゆらん
まおも草もえ出る春おかりおけりよど此澤水打けぶりつゝ
早春 霞 雪さえぬ高嶺をこめて難波おたみ路よりたつはる霞お
久方の雲おはるかおくる春おみちびくもののかすみえけり
元日子日 ひ月たつ今日の子日の小松原ためしことある千世此影みゆ
社頭子日 千歳へんねがひの神おかけたれど猶たのまるゝ松の影お
賭 弓 大庭お射手のつかさどつどひける誰お心をわれひかまし
踏歌節會 ふる雪おかさしの見たいまがへども月此どけき雲の上哉
春色日新 朝おく霞おくもるかみ山いよゝ春のかけおみえつゝ
朝 霞 青柳のかけをたよりお打おびき山もとさらぬあさおすみ哉
若菜知時 たれおめて春とも知らぬ山さとの心お似ぬお若菜おりり
水邊若菜 ぞよし野の清き河原此初若菜つまんもをしき心地おすれ

舟とめてつまゝをしきり山しろのよどの堤此わのち入り
 山家梅 我山のあらしを春ふきほもの垣を此梅のふやひありり
 梅花所々 さぐ宿の梅おちむと鶯もこゝろいとちくちりやしつらん
 南ふもかざらぬ梅此花みんと入江おぎめぐる棚おし小ぶね
 梅間鶯 朝ちく鶯の音おさそはれて梅のおほひのあられそむらん
 梅のはちちりもやせんと思ふまでたのくきこゆる鶯此こゑ
 柳上鶯 山もとの川そひやちぎうぐひまの音をさへこめて霞む頃哉
 鶯有鶯聲 おの年もうぐひまの音を始めて嬉しきおと此敷をさかまし
 鶯聲和琴 琴とれば聲ぞあはせるうぐひまの妻や下樋お籠りたるらむ
 夕歸雁 長き日をたちたゆひて行く雁のこゝろ悲しき夕まぐれ哉
 ひと日だお都此春のをしなれや夕べを待ちて雁の行くらん
 春雨 世中にふるかひありてふるもの花まつ頃の雨おざりたる
 故郷春雨 故さとの軒此まぶの春雨いたがみみだよりかゝり初らん
 春月 世の人此うかれ心のかげるともかみひささるゝ春の夜此月
 おもふ人ありといさしに春の夜の月の都のちつかしきおち

春月 春の夜のつきありとも見えなくに人乃心の空おあるらん
 湊春月 橋立乃松の上とやくらまむあり興謝のみちと此春此夜此月
 春夜興 久方のつきの桂のはるがまみ袖おもかけてあそぶ夜半のあ
 海邊霞 ちよ此上乃かまむ朝けお見渡せば今もそらあり天のはし立
 住よしの松までかゝるちこの海乃霞の波いたちもへらせ
 風早のみやの浦おみいつの間お春のかまみと立かはりなむ
 里柳 久方乃ちある里の青柳乃かげもおろろかまむころるあ
 行路柳 旅人のまげの小笠お打おびく雨のゆくてのやちぎあるらん
 春駒 春の野の霞此ひまを行く駒の影の此どけきものおざりける
 霞たつはるの野原に見るときの駒の月毛もかぼるありり
 花始開 ちち得てもあやおもむげの句ふうとまばしうたがふ山櫻哉
 松間花 嵯峨乃山千世ふる松乃影ふかみいつまで花乃香の残るらん
 ゆそふらな松乃あらしおちりもせで花も操乃をゆる頃あ
 故郷花 故里のむしもまらぬ櫻ばあれたみかおあふふころ哉
 この春もわれ訪はざらばふるさと此老木の櫻いのお恨みん

柚花 卷向乃柚やまざくら咲しよりむねおもひくやまたづ乃音
 野亭花 我こそい野邊乃花もり百敷のおやもあはれとや見ん
 磯花 さらふまで雪間を見えし春日野乃野守が庵の花ふこもれり
 磯花 ぬら磯の岩あたりてちる浪も花とひとつおみゆるおる哉
 曙花 咲たむ磯山さくらわさつきの神やかざしに思ひのくらん
 曙花 陰ふねて明るをまてば咲く花乃木此間かつこそ現れおけれ
 大空もあやひあかりて春のよ乃あくる光のさくらなりなり
 山家曙花 咲さわたる花乃ひのりに明る夜もまめ乃うちあがる峯の庵哉
 月前花 大空乃月とはあといとはけけれど一つあやひお霞む夜半のあ
 あまりに月月の霞むとあもひし花乃梢此さはるなりけり
 花をさへ空のあやひあかりはて、宵々かひむやまの端の月
 島花 みやて人ほといはい小黒崎みつ此小島乃花をあたらん
 風前花 花乃うへを必ささらぬ物おしてこれ風も此どけのりけり
 おともせでなびくをこれ櫻花ま乃びにかとふ風も有なり
 花春友 此春も花をむし此友あしておとふばありあけれおける哉

瓶おさしたる櫻をきて

野お山あわくおれはてしたましひも此一枝あへりぬる哉
 花有遅速 ゆくら花おくれだちさかさらばいりあまじかき盛ならまし
 志賀山越 くれかゝる道のそらより志賀此山花乃ふいさに逢おたる哉
 どののらぬ志賀此山越でえのねてやどり定むる花の陰かな
 行路落花 旅人此そでおむつれて行く蝶の梢はあれしさくらありなり
 故郷董 まえれさく春あもあれど故郷のゆめりに句ふ袖もあへらま
 躑躅 春ふうた色此限此はじ花もゆばうりあもみえおるのあ
 山吹 をし此河さしのやまぶさ打あもみ心と波あをられつるうな
 春獸 大王のみ田またらへは春の日の世をばうしとも思ひざるらむ
 春鐘 春をさへさそひもゆく咲く花乃影あうらみし入相のあね
 三月盡 行く春乃あふの別あははじとて花の長くもとまらざりけむ
 夏歌
 残花少 風まもつたつたの神乃いおたにも今のいくら花う残らん
 薄暮卯花 日の今う暮わたるらん山もど此河をひうつぎ色まさり行く

野 卯花 う此花の月を去るへお打とる野河の暮ぞあはれなりける
 社頭卯花 う此花乃咲おし日より柳葉の去でもはえさく神やおもはん
 葵 葵ぐさ神乃さうげのそはざらば二葉に千世此色をまましや
 雨 中 橋 おやひ乃さちりし昨日も昔おて雨とさだる、軒のさちばさ
 故 郷 橋 橋のおやひおへる故さとこのむうしの夢にあらざりけり
 田家水鶏 我門の澤田の水鶏おれぬれば垣ねもかのがまめのうちあり
 月前水鶏 月すめバ水草ぐくれもあかりけり叩く水鶏の影もさえつゝ
 水鶏驚夢 夢さめて聞けば水鶏此聲おれど猶聞の戸をおたてこそ見れ
 新 竹 若竹此靡くあたり立よれば千世てふことはいはせともよし
 竹風夜涼 風ふけば窓おうちまで靡くこそうら若竹此去るしあひなれ
 蚊 遣 火 をしむべき月此夜おるを蚊遣火此煙おうちお過しつるあ
 初 子 規 卯月たつやがてもあさぬ時鳥ことしの誰もうらまざらまし
 子 規 一 聲 やとゝぎす夜深き空此一聲のかへりてさうぬ人あうりたり

子 規 稀 はとゝぎすことし此夏の入つて此聲のを聞てやまぬべき哉
 遠 郭 公 郭公雲おあさえしひと聲此名をういつまで身にいさむらむ
 月前時鳥 夕月此おやふあさねを時鳥はつう此はあどまてやあくらん
 泊 時 鳥 船出まつとつのとまじり此明がた乃浪の上遠く鳴やとゝぎす
 夕 早 苗 夕日さま山のたつきてとるそれお廣田此苗もかざりたり
 閑庭夏草 世茂いとふ心茂たねの八重葎いよゝまげくなれる宿のあ
 野外夏草 かり衣すそ野此原此夏草此みだれもいまのあざりまらま
 風 前 蓮 風ふけば玉此聲しておが宿のいけのはちまの露をおるゝ
 河 五 月 雨 久あたの月此かつらの川水もまむよ知らまぬさみだれの頃
 船中五月雨 ゆえだれの日かおを出てゆあむ日の浪路戀しき船の上あり
 田家夏月 蚊遣たたく田中の庵もみまたしれくまといからぬ夏此夜の月
 海 夏 月 まつらぶた限まらぬ浪の上あまじのた夜半の月を見し哉
 夏月透竹 ゆふだちの雲の行方を去たふまお月おそあへ沖つまら浪
 餘りおも今年此竹此長ければとたゝとる月葉をもうりにして

行路夕立 空おたつ塵をまづめて玉帯は大路残わたるゆふだち此雨
 夕立易過 神おそひ過る夕だち稻妻のひかりの間ぶふとまらざりたり
 名所夕立 富士此ねのふくさや空おまじるらん夕立寒しう花鳥がはら
 合 歡 木 よもすぐらねぶりくしねぶ此花晝さへ夢此面かげおして
 杜 蟬 秋ちのさけしき此杜のさく蟬の聲のまぶみの中にこそあれ
 夏 居 所 水きよたよがはの奥の夏をさへまとはおまたる所ありけり
 故 郷 夏 藤原此を井のまし水殊更おこひしきなつおありおけるお
 水 郷 夏 さと人おかり此こさまし葛蒲ぐさ猶こそおやへ淀此さは水
 社頭納涼 みたらし此浪のまらゆふわたつ羽の袖おけよと吹く嵐哉
 瀧下納涼 偽り残さしを此もり此下風此秋おのさどあたちほがふらん
 船中納涼 落たぎの瀧のまぶたの隙をなまわつさもりこぬ山此陰のさ
 六月 積 舟やかたはやどりはあて暑き日の影の波間に消はてになり
 偽り残さしを此森のかり立てみそがぬさたの名おあそ有りれ
 わがまそをき受るまるしう神垣乃みたらし河の音まさりゆく
 川乃せに流るゝ罪のまえねどもおとにきおゆる水の音かな

秋 歌

初 秋 風 おしの海乃浪路より立つ秋風をやびて待ちどるいた此松原
 海邊初秋 西北海此あま乃磯屋にきて見れば垣ねよりこそ秋の立りれ
 初 秋 雨 まつら舟帆かかさまごてふる雨にくる秋をゆる浪の上をか
 初 秋 露 わざにふく風を心の秋ぞとも知らでや露のむまびそめけん
 初 秋 虫 けしたのまむまびそむらん淺ぢふの露を悦ぶ虫乃ねぞする
 初 秋 月 物おもふつまとも知らぬ初秋の空おを月おとるべうりける
 七 夕 山の端にいる弓張の月これればはつ前に夏残はあれけるか
 棚ばさ此あふ夜みじかさおげきとり靡きそめけん天の川霧
 おまの川ふち瀬もあを心をかほはらぬやし此契あるらん
 叢 端 虫 淺ぢふ此露此まら玉ひくるとみだるゝ虫此聲をこそきけ
 夜 聞 虫 わが袖の露にさくらん心地して夜たゝ身にしむ虫此聲うさ
 深 夜 虫 様々おあくなる野邊此虫此ねのふけて後おぞ聞べありたる
 月 前 虫 松虫此聲さゝそめし夕べよりあさおありぬる月のかげをか

終日見菊 白菊の千世茂こめたる籬にもどまらぬもの日影ありたり
山田宰紀のとしく菊茂うゑて樂しむとて歌ひひけれ

夕 鹿 玄此ぶ山窓ふる道にうつ鹿も夕べいたへを音茂やかくらひ
としみ此はやき流やといむらん籬の菊茂まがらまふして

霧中 鹿 霧此内に妻よぶ男鹿聲まで隠れぬ物とまらせやあるらむ
我宿の垣根の真くを色づきぬいづれの山もみぢせざらん

紅葉 浅 長月此まぐれ待つ間此薄もみぢ夕日もいまだ染めてあして
まぐれ待つつこゝろもまえて山里の梢かつこそ色づきあぐれ

紅葉染露 山里の軒端此梢うつそめてまぐれまつまどあきいたのしき
たつた姫あきをかあしむ紅のあまだのつゆや山をそむらん

水邊紅葉 水の上ふたつ朝霧やそめつらん山のおしたのすそをみる哉
うた秋の此がれん方もあらねども猶柴の戸を出てあそ見れ

山家 秋 霜 長月の末野の原の露見ればなるばいまもにありあけるあり

ゆく秋のあたまにかゝるん白露此今朝初まもに成あたるあり

冬 歌

初冬 嵐 冬きぬとあらしぞまきぶ貴舟山まきの雫やうちまぐるらん

岡時 雨 あらねさび夕日此岡此村まぐれ松さへそむる心地あそすれ

落葉 大空のまぐれつくして神無月木此葉の雨此ふらぬ日ぞあき

海邊落葉 波あらしありそ此崎のもみぢ葉の染ぬさきより亂れ初らん

落葉混雨 中々に雨にまじりてふる時ぞ軒此木の葉のさびざりける

木 枯 久方此月此桂のかげばありはらひのこしこがらし此のせ

木 枯 木の葉皆ほらひつくし木枯のこゑ大空に此こりなるありな

枯野 秋はぎのもとのふる枝を吹く風の聲のまのれぬ宮城野此原

水鳥 池水のあり鳥めぐるをし鳥此たえぬ冬おもありあけるあり

水鳥驚筏 筏ふるま山河の瀬あうく鴨の立つかど見れば且かへりつゝ

樵路 霜 柴人の外あふまぬ足引此やま路のまもいつりきゆるらん

濱千鳥 雪はれてあしたまづけた大伴のまつの濱邊に千鳥あきあり

曉 千鳥 ふち出まつり江の川此明方の志やどきつげて千鳥ちく
 野 行 幸 春まゝで野邊の若菜も萌えぬべしなふ此とゆきの大御光お
 積 雪 荒玉のとし頃たえて見えざりし大雪ふれりゆさうのれでん
 閑 庭 雪 よの中此人めまちしも昔おてむうふばあり此庭此志らゆき
 島 雪 いづこまでふる雪あらん渡つこ此沖つ島絲も残らざりなり
 海 邊 雪 海士小舟をが家島もたどらん今朝ふる雪に面おはりして
 霧 中 雪 高砂此まつ此うは葉にふる雪我老の浪のとおもひけるるち
 旅 泊 雪 足おら此雪此八重山たどる間に越ても年のいさんとまらん
 關 路 雪 うねね乃を積ると思ひし夏草乃野じまお崎おふれるまら雪
 松 上 雪 ふる雪お上野此道のたえしよりとけてやぬらん須磨の關守
 田 家 雪 高砂此をのへの松此木枯おやどかりはれるけさのゆきおち
 都 雪 き乃ふるも蚊遣たさきん小山田此ふせ屋が上お積るまら雪
 此朝けはつ雪ふれり小車此さたおふこゑもいまひきおえむ
 大嘗祭行はれしふる長澤伴雄が家此會に都雪といふ事哉
 ふのさよに引るへまらん小車此おも見つべき今朝の雪哉

雪中眺望 雪つもる夕べにまれがのつら河つきのちるゆく流ちりけり
 白雪の中に流るゝみこし路のふひの河の見るおさやけし
 爐 火 うづこ火此うづもれおら春めくの雪間の梅の心あるらむ
 爐邊閑談 埋火の白くあるまで語る夜のまたのおもひも残らざりなり
 山家歳暮 我山此ゆづる葉折おくる人の年のをばり我つぐるありなり
 春 花散しも何うのいはんわはた山のまをそめたるみねの松原
 たつ春此光ぼりの白雪のうづこのねたる富士のまばやま
 立るべる春の光散さただてゝあけはあれ行く浪此うへるち
 わら玉乃年さつ今朝の心さへ身さへさ乃ふの物としもあし
 たが里も此どけのらめぞ我門の澤田の面おまづさはに鳴く
 山の端に匂ひしのみ我かど此柳がぐれに今朝のうゝりぬ
 野も山も春此光をまぐまゝにまらせはてゝも見ゆる頃おち
 うめ此花いまだまえねが鶯もまのゝ小笹此うちおなくあり
 鶯のさへつる野邊にたつ見れば霞もこゑのおやひありけり

さ厥のもえしせ人乃いひしより焼野此方おゆるぬ日もあし
 初わらびいまだ焼野の下萌をやり得たるこそ嬉しありけま
 春の日の鈴菜さく野にくれおけり雲雀の床に宿やあらまし
 かつあしき我どや妻の門柳今日もあまをのへだてけるあ
 春くれバのあらせのへるつばめあ人此心の頼まれぬ世に
 ぬるま行く水の心いたのまじどたのむの澤を雁のたつらん
 ふく風もねりこそわたれ九重のはる此大路の青やぎのりげ
 霞む夜の月夜とだおもおぼえねとさ、れん物の棋の板戸を
 はやきだにまでバ遅き桜花今年のことにかくれなるあ
 花のまだるまやあろびて見えねども嬉しき色のこがれける哉
 植たてゝあつ見あぶらに足引のやま乃櫻我いはぬ日ぞあき
 さいけ鳴く末野にいでて足曳乃我山さくら今日見つるかな
 中々にあらしもあと思ふまでまづまりはてし花の影のあ
 物皆のあるればさしもあらぬよにめりまぬ花のあるせもある哉
 も此皆のむのしあ劣る末の世に花の色あそかはらざりけれ

夏

世中にふるうひもあを身おしわれバ心の花お盡しはてゝん
 竹の子の上おかく露さるやともまだはつある夕月のりげ
 ふちの花あさきまおひの打たれて今年も夏あゝりける哉
 橋の露ちるうげを朝ふみてあやひおそでをぬらしつるあ
 足引の山やどゝま山おてもうた事あれや世にいでてあ
 たはやまく山旅いでも時鳥あうく、深きあさけかりけり
 まゆ此おと雲井にまゆる山此端此縁につく草此はらかな
 かくあぶらねさしと、めま菖蒲草いつも軒端の香お匂ふく
 手もままおさ苗とる子の時鳥あばかく聲あきそひあやあ
 紅のふりいでしよりとこあつにはるゝよ知らぬ五月雨の雨
 五月雨の今日までなりとむら竹のは山の風ぞつげ渡りける
 ともし火もうらで遊ばん夏の夜の螢の影のくましなけれバ
 今日も又我うたゝねの枕をばおどろかしけりゆふだち此雨
 夕立のいたらぬうさもある物を今日もふりきぬ山乃べの里
 童への遊びがたきとなりあけり今日も清水お袖ぬらしつゝ

秋

松蔭の岩もる清水くまてけり蟬の羽ころもまくり手おして
ひまもちく汲むあきそひてわく水此井筒あまる柳のげ哉
わが門の板井の清水汲む人の夏のまげくもあたまさるあ
船やうたつらある軒の燈火乃あもまらみて明ぬ此夜の
やまえ川つあきまてさる舟もあし今やまいみの盛あるらん
大君のおやまたらら此大はらひ受ざる神もあらじを思ふ
白露此むまべる草の秋のくるやびても道のまをりありなり
さつこの沖あつらある漁火乃影も見えて秋の來おり
秋風此おどづれをめし岡此への粟生ぶらへお村さめどふる
山もとの賤おどら屋此夕煙めたつあきにかりおけるあ
さびしとて聞きてられむ夕べうの月まつ宿の萩のうはあぜ
深た夜此こゝろ我知して萩の風怒おけしきもあく成おたり
かくばありてる月影のさやけさもたが爲あらぬ都ありけり
花ゆゑと心いたくつくせどもあまぶ此雨の月おこそふれ
心ありてさるとや月の思ふらん物思ふとてねぬ夜おれども

冬

我門の刈田のおもにゐるたづも月ふむ秋おありおけるあ
てる月の影をたへて蟬が屋の垣ねまであそ汐のみちけれ
月まめおもひを出る住吉乃とほさむらしのあら、松ぼら
おもひ出る昔もどあき老が世の秋こそ月のかあしありけれ
なく虫の聲のさありもおどろへて岡邊のあさち色付になり
白河乃小松が原乃はあす、さ茸とる子らぶそでをどぞみる
我山乃まを野此きぬた心せよ妻とふまののうちもおどろく
豊うある山田の初穂めはあへにいよ、神の世を守るらむ
朝ぎりのふる此山邊の長月のはじめよりこそ紅葉しおけれ
大の河もみお流る、秋よりや井手てふものいり初めけん
風ふけべのへるくさの葉中々にうらおもてあさ心あるらむ
白菊のはあのをげさる盃の千世たへしこ、ちこそすれ
定めあさまぐれの雨あさはれて降りくる霞まどろある哉
あさち原行くともええを行く水の水りて後を顯はれおける
池水おあまたの駕ぞつどひける放ち置しにいづれあるらむ

け夜嵐はたくき吹きそ蓬生の霜ふけぢりさねやのふまま茂
 わはれふものよふあらしう何ばかり筑紫の綿もいらぬ袂に
 冬の日にくしげおかけし鏡さへ氷にむらふおちおそまれ
 荒金の土にひそめるかへるこそうへりて下に春を知るらめ
 足引乃山田乃あぜをたてぬきに雪のまらぎぬかりてなる哉
 いるばり今宵の雪の積らんねぐらの鳥はねてに鳴く
 世にままば嬉しき跡も見るべきにふるひもなき庭の雪哉
 狩人の弓手のかたふ見ゆる哉かのおまたら乃峯のはつゆき
 昨日きて今日ゆくばり思やえてをしきり年乃別ありたり
 山ざとの月日のゆくもおもやえずされども年乃暮り有けり
 もえわたる草乃緑乃日おそへてふりくあり行く我おもひ哉
 春日野の雪まの小草いつばり結ぶ時ふりあらんとまらん
 逢坂の關乃此方のうも紅葉いのにこがるははじめあるらむ
 大路ゆく人目を多み思ふ子お家をも名をもとはで來ふたり
 面影のさあぐらさえせ成にけり雲井ふ見えしまゆせみ乃山

戀

匂ひだにふれんのかたき瀧乃上のあさ野此董思ひかけつゝ
 わたつ海乃沖あたふよふ白雲のうきても見ゆるひとの心う
 いさづらにいく夜またせて訪はざらんさても恐に頼む心の
 いつの世お昔とちして語らましえ乃ぶるやど乃心づくし茂
 いろにせん涙の袖につゝめどもおくれぬらん胸乃思ひを
 中々に物の思はじいける世にあはじと人乃いひもはきたり
 秋またであく虫あらば時をぬわが戀草にやどりうさまし
 花さるぬむお戀草乃悲しきつゆだに人乃知らぬありたり
 池水に共ぬ乃駕もねをぞ鳴くいゝにせよこの夜がまのまする
 闇をしも照さぬものゝわやあくによるの思ひのもえ勝りつゝ
 おやつのおちけても人を戀るおの篠乃簾もおくふりくして
 夜をのさねこぬ人戀るおみだゆる月おもうとく成にける哉
 待つ人も出てこぬ夜此月影のやまにいくらもまさらざりたり
 月見ても老とある世茂はく秋り戀おやつれし我身あるらん
 面影のさだるあらねば夢おさへうさめを人のまするえけり

逢ふ事茂いさとの海のかひもあし唯假初乃みるめのみして
 かくばりつらき心を吳竹乃あびさし後のまさをともが
 我戀のくも乃はなてをふく風乃あふ空ふしてやまぬべき哉
 おく山乃旗乃つま手を引く牛の息もやまぬ戀もするうき
 君故のあき名もさ乃み惜まねど終のへだてとあるが悲しさ
 まるとして神乃あはせし中あればつゆたがふべき疑もなし
 妹がりと我行く道もまえぬまで霜ぐもりせり月夜ともあく
 物をだにいはでぞ今朝の別れぬるまのぶあまりの心迷ひに
 別路乃袖のつゆともきえやらで乃あるい乃ちぞ今の悔しき
 おもやえをたてるうた名残ななくまに人の心の變り果あき
 み吉野のよし野此瀧の音よりもたあきの戀の浮名ありたり
 けひおさてさえん中こそ悲しけれ君が浮名此惜き此まの
 鳥の音も待たで別れしひもあく月にまらまし道の空うあ
 池水の底にのすはぬ我あひもひれふりしより顯はれおけり
 うつせみの人めもるてふ偽お厭ふまおどのあらはれおたり

雜

厭はるゝうき身をうしど恨むれどつひの報の誰がおふべき
 うれしきにあへるよもやと玉乃緒の絶ぬ祈を今のけまし
 どやざのる人の後あで我絶おけり唐土舟もつながるゝ世あ
 人心あだち此まゆみ末つひにたがひく方あよらんとすらむ
 都あておもふもゆのしみち此くの離乃まの松乃むらだち
 何をうも神にまひして萬代のゆるされぬらん住よしのまつ
 風のおともきこえぬよその峯のまつ睦しきまで見馴つる哉
 うおきあき山乃心此のよへやむうふ我さへ静けのるらむ
 菅原やふしみの里をゆく人此めあふつも乃の竹乃むらだち
 酒とひふひじ里になれて願はくはたけ乃林に世をば盡さん
 軒端よりおつる瀧つせ世の中此うきを離れし音のさやけさ
 隠れお此木立の月にさはれども障るまゝおて障らざりたり
 立此ゆるるふぶり此末此見ゆる哉松此あきたや鹽屋なるらん
 ふりのらぬ窓のあうく月雪此光にとめるも此おざりける
 今日も又夕日此隠しおかくれたり高根此雲お宿やのちまし

ひとり行く夕べの道お悲しき遠山の端のまゆるかりけり
 霜おれの尾花がまゑの山の端おまぼし此おれる夕日おげ哉
 馬此上のねぶりもさめつ小木曾河いはきりとやを水の響に
 都おてまらぬ手振をさまぐに見おれて來つる旅のそら哉
 うれしくも舟はておきと思ひしおあらぬ小島の磯間へたり
 心おき雨お舟出お惜まれていつまでとまるとまらざるらん
 おま小舟今いと歸る浪乃上にまぼしたとふま此れめの雲
 柴人乃うさふ聲こそ絶おけき谷のくえまちいまおへるらん
 世此中乃おまきこる身の中々に柴おふ人ぞうらやまればける
 よの中おとありかゝりと思ふおのさぼる心此ありおある哉
 おらまし此おりもあらまも今更に思ひやみおん我おらまくに
 おびらへん限お何おあぐさめん月と花とのあき世おりせば
 千早ふる神此ま前此榊葉おつねさくはおのゆふしでおして
 おとまら此うへ行く物とおもふよりふみこそ迷へ敷島の道
 敷島の道のたゝ路此嬉しき神の御代までおとふおりたり

神此代のおまおと残を敷島の道におまこそさやけおりたり

三編

春部

社頭立春 やはた山おきたつ鳩乃羽おとあもさつとのおえるし春此初風
 早春松 大御代乃春おしおれば常磐ある松おぞはやく色の見ゆるむ
 早春梅 うち出る浪おと見えて梅乃はお氷乃ひまにけぞうつれる
 早春柳 青柳乃いまだひらぬまゆ乃うちにおもり兼たる春の色哉
 今朝みればもゆともおしに我門乃一もと柳はるめさおなり
 早春風 ふるとし此ちりも残らぬ玉ぼお乃大路をわたるはる此初風
 早春鶯 雪さえぬ我山おげおさおゆおり春おさづぬるうぐひまの聲
 ふる雪おうづもれおびらさく梅乃おをひをひらく鶯此おゑ
 霞中子日 君をいはふ初子の野邊乃春霞おらぬ袖もあらじと思ふ
 子日友 子日まゐる小松お原お見おせば嬉しや千世の友乃おあして

社頭子日 たぶ爲乃子日あらねバ神垣乃松もひくみぞまじせたりたる
 海邊子日 ね乃ひまゑる濱の松原よそに見てあま少女らの磯菜つむきり
 白馬節會 雲此上ふ今日引乃ぼる青馬の千世のあふむ音のさや々さ
 家梅始開 我やどのうめ此林乃末とひてけさはつ花我見いでつるのち
 水邊梅 玉島乃七瀬あがるはる風ふ河のみどはさうめが香ぞまゑる
 故郷梅 老はて、ひとり残まゑるふる里乃野中のうれも今やさくらん
 紅梅 あさ日影えごにこもりてくれあゐの色おや出し梅乃はつ花
 春水澄梅 もえわたるそこ此水艸もあらはまて煙あゑる、白河乃みづ
 田家柳 うち渡を田中此さき青柳乃けぶり此うちに成あたるのち
 名所鶯 わの菜つむたよりにさゝぬ春もあしかまぶの野への鶯の聲
 山家鶯 よの中此花おうつらぬ心をばあふるお似たり谷乃うぐひま
 遠聞鶯 さく花乃のげ深々れば山びお乃ひさも遠しうぐひま乃聲
 鶯呼客 梅乃花匂ふあたりにあく時へ來てふに似たりうぐひす此聲
 野若草 あげるふの思ひ亂れてたつ野邊のうら懐のしき小草のまして
 二月此はむめ北山にて

遠山霞 都み霞とのまやあむむらんふいさにくもる岩くらのやま
 暮山霞 大空あさびく霞の山此端のとやさあふとりあらはれおけり
 松上霞 月ぼり空におほひて山松此のげだに見えぬ夕がまみのち
 海上霞 たえぐにふく春風のおきにしてあまみこめたる峯此松原
 鳥霞 いさり火乃影まらみ行く浪乃上にあらはれむたる春霞のち
 春月朧々 是る霞たさびく時のわたの原はあれてたてる島あがりたり
 社頭春月 たけぬればさきおに影の匂ふあ霞おたえし山此端のつき
 故郷春月 ぬさとちる花のさやりにまゆるうち神路此やま此朧夜此月
 歸鴈 あこがる、こゝろの神とあそぶらん朧月夜の住とし此はま
 海上歸雁 ふちせあき霞の水尾の月まても飛鳥の河のさびしありたり
 霞中歸鴈 小山田此かやが軒端おつらありてつ雁おねの絶ぬおる哉
 雲雀 鴈此行く春おしあれば花さるぬ常世の國もあつらひしきあ
 大空お花乃おやひやまちぬらん野山はあまてあく雲雀のち

雉 さいまきく聲ぞ悲しき何しるも去年の狩場に我の來ぬらむ
 旅宿春雨 妹とぬぬ夜半だおぼるを水ぐさの岡此やゐたに春雨ぞ降る
 海邊春望 うら人此朝夕あけいとあみも春にあそぶと見ゆる頃うさ
 島春曙 ふさつあき都乃つとに眺めかかんみつ乃小島乃春乃明ぼの
 霞中瀧 天の河のまき此水脈をつたひきて落るに似たり那智の大瀧
 早 巖 ひと雨残待ちてと思ひし初巖くやくしく人あをられつるうさ
 雨中待花 此頃乃あぐめ乃うち此面影のゆあむら花にあらんとすらむ
 禁中花 九重乃あやうち山にさきしとり櫻のくもにまひひそめらん
 故郷花 さい浪乃志賀のはまべを今日來まば昔忘まぬ花乃香ぞする
 湖邊花 櫻花あむら乃山にさたしより志賀乃濱べにさぬ日ぞあき
 社頭花 朝がまきもりの嵐お消はてゝ花乃のあまむむきたらし此まづ
 深山花 よ此中此春をはかれて山さくらまきまきまきまでまゆる色哉
 遠山花 春霞たつ田乃れく此葛城乃みね此さくらも世あいのくれを
 雨中花 獨ふる我つまのあがめより今年もやど此花のちるらむ

松間花 心のらうつろふ色を見えじとや花のあむめ此うちお咲らん
 高砂乃を此へ此櫻さたしよりあもはぬ松もあらはれおけり
 關路花 ひつ河のはし打渡るま此れ免おこはた乃關乃花此香ぞまき
 花下忘歸 鶯も糸ぐらさだむる聲すかり家路あもはんはあ乃のげかひ
 行路花 花咲くばあらしき道もあむらり都をどめも岩根ふみつゝ
 山たのみ雲う花のうたひも道此一木にひらけつるうさ
 花有喜色 日此本乃春あ乃まふうれしさ此色あそあまれ山さくら花
 さはくし世の移まども春毎乃花乃あまひを變らざりける
 折ふれたる あ乃春の雨も嵐も此どあて花お物あもふふしあむらり
 鶯の聲にこたふる山びあのあむらりあかむはあむらりあして
 ぬさどちる花にまじりて匂ふのあ奈良此さむけ乃鶯のこえ
 船あかば松乃ひまより打出るはあかの波こそはてあむらりま
 かもふ事なき山里と思ひしあうつろふ花あはるさめぞ降る
 櫻花ちるかだにも見るべきに糸たくも月此霞む夜半うさ
 風前落花 風ふけばちらぬのげさへ中空あまだれて見ゆる山さくら哉

水邊落花 み吉野のたぎつ河内あちる花のいく瀬流るゝ水泡あるらむ
 蛙 吉野川流るゝ花はゆくへまでおもへば長き日かまありけり
 我らど乃澤田は蛙あきそめて雨まつくれぞほはれありなる
 雨ふればたいよふ池乃うた草の上になさてもあくるはづ哉
 杜 若 芹摘みし袖もふたゝび見るばうりゆのりにあふ杜若うさ
 籬 山 吹 やまぶたは籬もたまにさく時の一重も八重は花あざりける
 名所山吹 吉野河岩お浪にうちあびきいまだみだれぬやまぶたは花
 波あらで誰の心をらんみ吉野はたぎつ岩根の山ぶきのはあ
 藤 行く春は霞の袖をむらさきにそめてぞあへまふちあみは花
 つばめとぶ軒は朝風ふくあべにまだれとゆらぐ藤浪のはあ
 水邊 藤 あられ行く春をあへまどみるばうりあびく岸の藤浪の花
 名所 藤 朝づまはれた山ざしに咲あたり袖はゆめり此ふち浪のはな
 暮春 暮花 春の行く雲井をどはしいのならん山あ残る花あありなり
 河 暮 春 うち河乃山吹の瀬あよどみける春もいまいと流まゆくらん

夏 部

首 夏 風 朝あゝ青葉がうへ吹く風の音するとりも涼しかりなり
 更 衣 ぬぎあへて花ぞめあらぬ衣手をなやふく風のあつあしき哉
 花ぞめれたもともいはは月雪のいろにあやへる衣きつれば
 名所 卯花 時鳥さのんたよりにうは花の浪をけくらげまらかはのさど
 谷 卯花 卯花の雪ふきあはば谷かぜのふる巢の鳥やおどろかまらん
 橘 遠 薫 おろつあなま乃ぶ昔もはるけきにいづあともあくあふ橘
 立花は遠きあ残り遠き世はかせおもふるゝ心地あをまれ
 待 時 鳥 あろくゝにきゝつと人の心はぬまは頼もてもまつ時鳥のあ
 山のとく出けんも乃を時鳥いづあはそらあ音をまはぶらん
 初 時 鳥 ぶたさびと思はぬまでお杜宇初音さやのにきゝし夜半うさ
 故郷 時鳥 古里に歸りあひていやとゞきま二人ねあかく外あありけり
 名所子規 ま乃びねの頃とりきゝつ時鳥貴舟のねく此まをまはむらぶち
 いづああやどりとるらんあはづ野は松原づたひあく時鳥

馬上時鳥 かとゞぎにさく方まもる情りにまばし亂るゝおま此足さ
 與女聞時鳥 ひつゝありあくるもまらぬ手枕おまたでもきゝし時鳥のさ
 船中時鳥 ちみは舟山さたちちの成にたり枕のうへにさくかとゞぎを
 時鳥何方 杜宇いつあともあき一聲いたぶやまびあもあたへぬらむ
 朝時鳥 雨晴れしほした乃そらの杜宇ねもひあき音の今ぞあくらむ
 菖蒲 軒あふく匂ひもいまだ消ぬまにふたゝび萌しわやめ草のあ
 競馬 神此ひくかたやさきだつくらべ馬をそふ心の一つあれども
 藥玉 菅蒲草ひくや五月此玉のつら長ささめじのいつまともあし
 故郷水鶏 中々にまよとはれて故郷此小河此くひあ音をばあくらむ
 ありしにもあらぬさほさる草の戸の叩く水鶏もあやしと思はん
 田家水鶏 あふち散る田中此里の雨あもりひるも水鶏の聲ばかりして
 故郷五月雨 岩の根に残るむらしも水がくれて瀧の都にさみだれぞふる
 五月雨晴 さまたれの晴れあけらしあ西の海乃浪あ入日此影を曇らぬ
 雨後夏山 雨のうちを生り出あけん心地して晴るゝ高根の珍らしき哉
 さまたれの日敷を出しうれしさいああじ心のやまの端の月

水邊夏月 水よりも流し行く夜乃早けれが井せぎあだおも月ハ淀ま
 さまたれ乃雨の濁りもさりはてゝ月こそやどれ白河此みづ
 夏之夜のかまみも霧も隔て絲を遠くあがるゝ月夜あそ見れ
 住吉乃松よく風此聲此うちにまらみはてたる波の上此つき
 あまやまきやあゝ限もあがりけり難波の浦此夏の夜の月
 鵜川 此あ身をうとも思はでつかはるゝ夜河此鳥の哀世此あう
 夕顔 蚊遣火のけぶり此上にさきあけりまづあかき絲の夕顔の花
 水邊蚊遣 河あみ此上あ流まで行くこれに我蚊遣火のけぶりともあし
 隣家蚊遣 我宿此蚊さへあびきて嬉しき隣あたつるけぶりあがりあ
 涼風入簾 岩ばしる水乃音あがら山風のをま乃まどなる夕あらしあ
 あら絲さた夕日の影あもりあはる風あつかしきを夜の内哉
 湖夏 ちかみ此まそぞ待つ間の舟うけて瀬田のまよりに螢狩せん
 瀧下 螢 打まめる影もあひてたきつせ乃まぶきのうちにとぶ螢哉
 夕立 水くまり乃神の恵り夕まぶちのたましくあゝる時ぞまらるゝ
 山夕立 ちかみ人ありとあしにいあま山々も眺めつ夕だちの雨

泊 月 唐どまり名さへうきねの秋の月夜たゞ都此ゆめゆるさ
 河 月 いやさきのさだのこぶりに舟うけて都さひしき月をさる哉
 松 間 月 二夜とも月のをらぬ山此端の一本松のをしくもあるか
 鏡 山 中 月 鏡山まとのぼる月の影をえてまつおせきとしほはつ野の原
 雲霧も今宵此月此秋をへてみちたる名おのさはらざりたり
 人皆の心此うちにはがき來し月此のいよぬおとひこそまめ
 國といふ國のもあるのこやこみて見し世こひしき月の影哉
 九月十三夜 あらざりし最中此後の月おれば長月の夜のあざしともあし
 鹿 聲 近 枕 つまならぬこが手枕をとふ鹿のいにまよへる心あるらむ
 鹿 聲 何 方 鹿の聲そらに枕おきおゆあり誘ふあらしやまどろあるらん
 水 郷 搦 衣 河をり此中にもりてから衣打のははかり宇治のさとびと
 我よはひたのきに此なるちのら興ふおそ得たれ白菊の花
 露さらぬ酒をば千世乃命めてかきまばり此まらざり乃花
 重 陽 宴

初 紅 葉 限なく染出ん山のあらめどもはやきにまざる陰やあきらん
 紅 葉 淺 見るべくいまだ染わへぬもみぢ葉を霧おめたりと思ひける哉
 松 間 紅 葉 を鹿おく尾上乃紅葉我やど此松の木此間にあらはれおけり
 暮 山 紅 葉 夕霧の絶間ありともみえおくに山此紅葉のかくれざるらむ
 秋 眺 望 山此をる水の行方もさやあめてあめぬ秋此物おざりける
 暮 秋 虫 長月此在明此月の影のうちに残るはあきさむし此こゑるか

冬 部

十月更衣 白菊の契のよしやのまぬとも今日より千世の松うさねせん
 初 冬 朝 あき霧此名残おぼらく朝おどの日がけにおやふ神無月のさ
 田 家 初 冬 小山田のいさむらぶくれ鳴くたづの聲も春めくかきさ月哉
 田 家 時 雨 さを鹿におどつまのはる村時雨山田の庵にさうぬ夜もあし
 朝 時 雨 出る日の影までそむる心地してま糸にはれゆく村時雨のさ
 遠 山 時 雨 けさも又雲こそうくれのつらき乃山の時雨の宿りあるらん
 殘 雁 故郷を別れ衆たるやまらひにさ雁がねのれくれ來にらむ

深夜木枯 在明の月のこなりやかさぬらん遠山まつ此おぼらしのうぜ
 閑居木枯 かくれぬ此落葉がうへみ残りけり空に聞えしおぼらし此風
 山家落葉 去の此音も誘ひはてたる木枯にかさねの落葉さわぐころ哉
 曉落葉 鳥の音にかき出てゆ々山まきの岩田のを野に杵ちるあり
 社頭落葉 きたらしの底おまづきて静あるこ乃葉も見ゆる神南備の社
 風前落葉 風の上になうたて流るゝもこ葉も此頃たえぬ神あびのさど
 故郷寒艸 いふしへの礎あまたあらはれて冬枯すおさくさははらあり
 寒樹 ありくゝに寒き嵐の聲をありふゆがれまらぬ峯のまつばら
 冬月 玉あられちり来るよりも寒き哉ねやの板間のふゆ此夜の月
 寒流帶月 霜さゆる梢をのけてよしの川あかりのさ糸し月のあげあり
 網代 衣手のたなるまおろし吹く待ちてもるゝとまゆる網代人哉
 とるひをの同じあじろありゝるらん田上山の木おらしの風
 水鳥 池のおもに見るよりさむし手枕の上おはねさる夜半の水鳥
 河千鳥 霜さゆる佐保の河邊を朝行けバ千鳥なく瀬の多くもある哉
 遠千鳥 我門の小河此水やかまぬらんとなく此まきくさ夜千鳥あり

寒夜千鳥 聞くからに夜の寒ければ千鳥なく聲より霜此降かどぞ思ふ
 禁中雪 天つ日乃外おれたれ跡つけん雲の庭おふれるまらゆき
 湖邊雪 あびされる舟も残さで大王のおも乃ゝ濱あふれるまらゆき
 み雪ふる志賀のはまべをけさ見れば浪間にありぬ唐崎此松
 唐崎の松ありゝまる白雪を八十のまきと此まきのとぞ見し
 あじろもる衣手のけてふりあけり田上山のけさのまらゆき
 水邊雪 みる雪ふる六田のよどの柳はら春のみどりもあれういふべき
 遠山雪 大空のまどりに消し山の端の今朝こそ雪あはらはれあはれ
 みこし路の空あらくくに白山の高根はるかに見ゆるけさ哉
 柚雪 宮木ともあらん木立のふる雪此中にもあるしをのそま山
 行路雪 鳥のゆく雲路までこそたえおけれ野も山もつもる白雪
 橋上雪 大橋此上さやのあるまら雪あおどつけあねてたつ人やたれ
 鷹狩 大君の萬代あれば蘆鶴もま手にまかせん今日あやのあらぬ
 連日鷹狩 今日もまた大御けしさをうのゝへバ我狩衣ぬがれざりなり

神樂 はふり子が論ふ柳葉おれもまたいくら此霜の重ね来つらん
 新骨祭 上もあさき袖お霜をうけあがらたがふめあれば神祭りませ
 神明節會 神あがら神まつりませ此頃の夜おることおも月にてるらん
 豊明節會 天おまは神もあらべやあははらん豊のありり此萬代此こそ
 爐火 昨日今日たきものあらぬ梅の香もつづく句ふ埋火のもど
 早梅 かのづのら年のかさりと成おけり葎の門のうめ此はつはあ
 社頭早梅 ちりたりとふく笛あやし昨日々ふ咲て春まつ梅乃まやるに
 年内立春 人皆のをしめば年のくれおねてさああら春と立あへるらん
 歳暮夢 一とせ乃夢此うきはしわたる間長しどのとも思ひたる哉
 除夜 二がをしむ年乃行方もとゆばあり大路さやけき燈火のうめ

戀部

あふしかも思ひそめ河打つけあ心づくし乃とちとぞあらせて
 中がき乃花ふたはるゝ蝶見ても春来る人此あゝるともがあ
 玉章もかけぬ便り残たまさるに聞て雁のねあそあうるれ

詠 戀 そむくべき心も知らぬ白眞弓人此手もちてひくおはるなさ
 祈 戀 定めあき風に傳へし言の葉のほらぬ方おもちりやまつらむ
 通書 戀 祈るより外おのそべもあさきものを神さへひうせ成おける哉
 近 戀 かのくゝに流まおねたる水莖に深きあゝる見ゆるん物を
 遠 戀 中々にはるけきも此の芦垣乃へてばあり此あふさる此關
 顯 戀 一め見しかも影までをへてあは百重乃山も恨とさらし
 涙 戀 あがるもあろくうれし袖のつゆ誠旅人乃涙んど思へば
 言 戀 大方此人めこそあれ袖此つゆ君がた焚あいつゝむべしや
 偽 戀 神おさへあを誠をいひおねてなふまで物残おもひける哉
 老 戀 偽りの中にまさと乃まじらせばあへりて物の思はさらし
 逢 戀 戀ゆえに我身のせしむわそれけり迷や老のい乃ちあるらん
 月前逢 戀 年月流うられしまゝ此たまあれや逢ふ夜も夢の心地乃まざる
 後 戀 たまさるに玉手まく夜乃管むしる月の影さへ重ねけるのあ
 絶 戀 夜を深まらので別まじ鳥おね乃あやし今朝の身おぞまける
 後逢戀 ゆらに又あふせにあへるあぶ波乃定めぬ中や夢のうきはし

逢不遇戀 鳥の音淡たぐにつけても恐ぶ哉一さびあえしあふさか此關
 顯戀 恐ばれん道にしあらねば中々に顯れておそろしるやまけれ
 顯戀 今更にとりあへされぬうき名をば赤に、厭ひて變り初らん
 變約戀 人めあも雨あもとををふせつゝ來ぬよも限あるべき物を
 名立戀 久方此天此まお井ふまゝとむたをまり果ん浮名おらめや
 恨戀 中垣のへだてあきと葛の葉のうら吹あへは風ハ立ちたり
 披書恨戀 くら此葉あはらぬ言葉もひるあへり秋風たちぬ玉章の上あ
 春曉戀 妹とねし我とお島のゆけぶさハ涙よりこそまみそめけれ
 夏戀 かつかしきはあ立花の匂ひゆゑ昔あもあらぬ人を戀ひつゝ
 夕戀 あらはるゝ夕べの星にあらそひて敷そふものハ思ありたり
 寄山戀 かもひ草葉末乃露も墨染乃ゆふべはとさとおきをはりつゝ
 今日も又あふ先くゝて墨染此夕べあかりぬはぬ子ゆゑに
 いのちれハ塵ともぐちぬ戀草此つもりくゝて山とありたり
 大海の中あわりとほふそめいろの山のうきたる戀もまる哉

寄河戀 かく山乃楨此また露かち積り河とまきざるあひもまるあ
 水もあき我中河乃いのちれバおとあきあえて名ハ流れりん
 あやしくもかれあたる哉淵も瀬もあしとたの先し中河の水
 寄井戀 筒井づつあつたもとにつま初し戀々さ實あも成あける哉
 寄水戀 あらねぬ乃土の下樋をゆく水乃まらまぬ中となもひし物哉
 寄木戀 我戀ハ大海原のあま木のたゆまひあむらくちぬべきあ
 いのちらむむじろ木打て涙河君をとりに來んひをばままし
 寄翠戀 つまもあき心此緒おと打とけて我まつ風あはつあかよはん
 寄玉戀 包もつまの千尋の底あありといふ玉さるに見る君を戀しき
 君あふる心此やまを照まべき玉のいづあにかくれたるらん
 寄筆戀 思はねば筆の命もたゆばありうきやる文もかひあありたり
 寄燈戀 ともし火も君の光あはぬ夜ハ照らま方此をわりあはる
 寄劍戀 二つあき心乃太刀もむねの火あ焼くつされて頼ま此身や
 も乃ふ此劍此霜のとけぬともつらきハ人の中心ありたり
 寄橋戀 あらた先ていで作らむあら玉乃とし月さえし中河のはし

いつまでも人の心此處どなまのうへおのけんなか川の橋
 人心もまゆく浪おとるかぢもまらぬ小舟とされるま身う
 寄舟 戀 千世のけて結びし竹井中垣のまきまうらゝ風もこそわれ
 寄竹 戀 山石の衣一さび染しとらうつる世知らぬこひもまらるる
 寄衣 戀 面影も匂ふの上乃うつり香おほくたび我身さえのへるらむ
 寄香 戀 つきもあき人乃蒔たる種あまや我戀ぐさのかまんともせぬ
 寄草 戀 そあひあくおもふ心をいへどいつまでも人の耳あしの池
 寄池 戀 住よしのまとしろ小田お植ぬとも我戀草此實おからめやの
 寄田 戀 河とのま流るゝあまだとし経ての枕もちよの昔やむまらん
 寄苦 戀 願はくはものいふ鳥にははせても人乃心我とくよしもあ
 寄鳥 戀 野へ毎にぬ我あく出もまが如く片戀ゆゑのあうじとぞ思ふ
 寄虫 戀 人心あさはの野ら此花まゝさるたもさぶめを打あびきつゝ
 寄海 戀 めみ見えぬ心の人あやどり木乃うつるかたあく成にける哉
 寄宿木 戀 年をへてあらの戀路の奥にしも名取の里のあるまあやし
 寄里 戀 虎の尾あふとてわたるに似たれども引るへされぬ戀此道哉
 寄獸 戀

雑部

はじめあくをはりもあらぬ大空のもまの心の誰か知るらん
 万代我ひらき初ゑる岩屋戸の大まひあり我あふがさらめや
 日 空 はんがし此大海原あうらび出てあいやく玉の天つ日のかげ
 星 大空のたこの極まに位してうごかぬはし此かげのさやま
 山 思ふ事をた世おればや駿河ある富士の烟もまゝさるりや
 大空あたるびく雲我根さしおてなれりど見ゆる富士の柴山
 嶺 大空の中此塵我はあれて大空おひとりぞふてふむじ此まは山
 松 朝あくさし昇る日の影をうけてとはにはるめく峯の松原
 名所 松 月と日との影あかれて峯の松はあき世をばよそあそふれ
 水 邊 松 うつせま此世のあざ波の夢あだにまらでやあぬる手枕の松
 薄暮 松 大井川絶えぬ流まの龜やま此まつも久しどおもふべらあり
 松 上 松 山寺の入相あらぬ松うぜのこゑもゆふべ我つぐるありあり
 松 上 松 松おえの土おつくまで老あけり昔のみどりも幾世へぬらん

故郷草 故郷の悲しさものゝほりし世我忘まをある草乃みあして
 故郷橋 来て見まが異まであそくづまれをふるさとの横板橋
 故郷水 定めなき名あこそたてまほまの川昔我此に水乃まらみ
 山中瀧 いつより名ふのあがれし大原の小野の奥ある音あしの瀧
 河水流清 我國の河さよらぬ郷もあし神此あゝる我みあるみあして
 窓 海山もいまで残さぬ我まぞ我ほさしどのまもあもひたる哉
 旅宿夢 心ありのぬ日もあき故郷をへだてはてふる夢のうきはし
 旅里 夢あのみ草の枕のひまぶかなひあのかる路も郷あやくして
 曉 旅 夢あだお忘れられたき故郷を更あま乃ぶのさとお来あたり
 海邊旅 鳥がねに起て来つまど小木曾山まだ松の火のけたれさうけり
 磯ぶりは波さへあけつよまがら嵐我むまぶ草此まくらに
 月も日もあうる、道あ嬉しきはあれぬ旅の友あさうける
 数あらぬ硯此海もあどく、にひるへば玉此ある世あうたり
 さやあある御代の光を恵みてとはにああねの花のさくらむ

鏡 我國お咲あまりたるあおね花えとしも今あさけとぞさく
 影のまうあゝるもうつる心地してむる鏡のはづかしき哉
 つくりけん神乃心も見ゆばうりさもさやかあるまは鏡あ
 大君の國をまもり此ものゝふの胃のはしなくもる世もあし
 二あもの胃のまいつはるあも打あふる、時あもある哉
 来し方いねさめく、に恐ばれてはよく、夢の心地こそまれ
 思ひ出もあらばあそほを夢よりまはうあうりけるわが昔哉
 古戰場 古戦場 住此江の清き渚のものあして誰さあざらんあしづのこを
 海邊鶴 住此江の清き渚のものあして誰さあざらんあしづのこを
 せみのえの廣き渚あまむつ此千年の神もあそへぬらむ
 あまはあた短き芦もあしたづの千代の羽風あ打あびきつ、
 阿波の海のあるとの沖に聞ゆあり波あまぎれぬ芦あづ此聲
 わたの原朝まつまをにあしづ此翅をひいで鳴わたるをゆ
 沖つ洲あ群あるあづの渡つこの神の爲まで千世よばふらむ
 源氏花の宴 面うたひ千世もはあれし細殿の月ああるに打かまめども

紙舞のうたに 三千年のもゝ乃さのづき重ぬとも花の姿のやのれさらまし
静 女 よし此山花のたもと乃のへるまの峯此嵐もふさふさゆみつゝ
大原 女 初もそぢとやあ人おと折そへし心のゆるもゆかしのらまや
牧童のひるねしたる

おもひなき賤の童がうまいおのこてふの夢も通はざるらむ
事代主神のうた
見る人も同じ心おさるばるりあめると顔ぞ世のたのらさる

實 舟 君が代によもぎの島のまつぎ舟見あるゝまで成おたる哉
三 輪 山 千世をめてまはらむ神のこ心乃あるしとありぬ三輪の杉村
通 天 橋 たきはさ此紅葉の橋のまら糸とも渡せのたまも中空おして
竹 の 子 雪の内にかりし昔の根さしより親おまされる竹の生ふらん
竹の自書讀に 竹は子のまだうぶ衣もぬがねども千世の生先まるとも有哉
此君のあやさ心おさらのせは世お頼もしきふしやあららん
吹く風おあびさくくであらそはぬ心を竹のみさをあるらむ
ゆふ露おまばしおくれてくま竹の葉末お此なる月此のげ哉

大空のみどりおのよふくま竹の心までおそむさしおりなれ
降る雪おうづもれおら起き返りまひて操をたつる竹うさ
楽に歌うきてと人のおひたるに
まをりしてふと見る道のやがて我心の奥にのよふかりけり

千草ささ亂れたるうた
あだおりと露やのへりて思ふらむ咲く花ごとらうつる心哉
月草に登のまぶらたる
秋の色お心うつして夏むしもねお鳴ぬへさけしきあるのさ
狸の腹つらみうつとある

樂しきも腹おもちたるやとぞとえてけも乃も鼓打つ世となり
猿 の う た 思はざる見ざるさのさるいはざるもかかはらざるおまをらざるらん
和氣清満卿 萬代おくちぬ功を天つちれみちれもあらにたてしきみはも
まぢれ上おたてしさいさ波の上もあき功の君がいたさ哉となり

義家朝臣 末の世おゆるぶ弓つる哉思ふおも君が昔哉かけぬ日おさし
佐藤忠信 み吉野此山此白雪ふみちらしをたけびしなん跡のさやけさ

大塔宮 草も木も打さびくべき君の手おまるせぬ風の恨めしの世や
 正行朝臣 たらちねの親の心乃底ひ残べくみてわらまじさくら井の里
 二葉より匂ひたる名の楠のくちて此ちこそ立ちまさりけれ
 村上義光 ひいさふもたれはらわさをさゝざらむ吉野の奥の山彦乃聲
 豊太閤 大空ふるりし龍のまゑ終ふ四方乃海さへ此まんどぞせし
 千早振神のみいつ残末の代おうりつぎたるの君おあそわれ
 君まさば四方の夷らはるのふも聞きあゝきておらまし物を
 西行法師 世を捨てし上の何をのまてざらんまもる實の外ふこそあま
 夕ふりこそ行方もまらね言の葉乃匂ひの消ぬ富士のまば山
 陶淵明 緒もまげぬ手馴の小琴世の中にひるまぬのみや調あるらむ
 伯夷叔齊 山ふかく折しわらびの萬代のみち此ま残りど成ふたるのあ
 といめ得ぬ駒のほろきに玉がこの道のちりども成ふたる哉
 韓信 久方の雲井おけるほしたつも蘆此また葉をくいる時あり
 張良 沓放しも手おどりてこそ萬代ふふむべき道の跡のどめなれ
 眼お見えぬ心の中此一巻のうたへぬさきにうけやしつらん

王昭君 道をむらさゆた加はる四此緒の聲知る人もあらずこそほらめ
 ともまれば人をむ世流も恨む哉誰ゆるあらぬ身を忘れつゝ
 李夫人 さらぬたお消る世もあき面影を何たてそへて身残おがしけん
 壽星 此まのげほふげは嬉し打つけに玉の緒ゆるらぐ心地のまして
 ほる人此もたる壽星石比讚に
 白藏主 さまの緒のあぶさ賣流たへむとみあみ乃星や天降りらん
 やびてそれうら乃心のあらはれつれもてばうり此墨染此袖
 小松乃もとに鶴たてり
 あしたつ此羽風をうけて姫小松今より千世の聲やたつらん
 初春の小松の原お降る雪のひれぬるたつ此ほばさあしけり
 岩お波のかゝまる
 わたつこの岩をにさける波の花あぶあひちまど色の常ある
 豊原の圖とて書きたるお
 四方乃海ふるちはおれても立おけり豊原のみつ此まら波
 蟹此うた 亂れ蘆の世こゝる人あくらぶまば蟹の横おも走らざりたり

山川北津ふ夷の舟ども見え來たる頃

君のため心づくし此國さればあたし國ふねわたのきほども
草も木もまもる皇國乃あら磯にかゝるもあはれ沖つゑら浪
浦賀の役も出立ける人此歌こひたれば

我國のほるぞまほくかやのん時來あたりと祝ひ立べし
山口利雄のさび立しけるせんしける日春別といふ事を

君茂しもいざといふらむ心地して立つ鷹がねのねさくも有る哉
町田某の都も物まきびも出立ける茂悦びて

いそのらみふる野の櫻手折來て君あさげん時をあとまで
宜野灣親方が琉球も歸るせんしける日花下惜別といふ事茂

あかで行く君を思へば中々にちらぬもつらき山ざくらかな
都の西福田寺のあたり千種殿の御あり所ありそまに古井のありけるを近頃ほりかへし
給へるそれやがてかの俊恵法師が月さへままぞと詠みし舊跡あつといひ傳ふるにつけて
歌よみ給ひ人々にもよませ給ふによみて奉れる

ふたさびもくまれん世をば故里の板井の清水下にまちけん

友どちつとひて酒のみつかみごと此上を語りける時

眼に見えぬ花の盃手にとりてうらへばあはぬ節ありけり

述

懷

こび人乃のしら此雪の年茂へて身此うきおと此積る也たり

あつ／＼にうきを常ある我身をそ心うおるを時ありけれ
願はくは今百年をあがらへて移り行く世のさぬもきてしお
身あからぬ願ひさてもありぬべし人乃沈むを見るが悲しさ
中々にさやけき御代あはさらば深き願もあらさらまし茂
世中此願ひはやくきてあけりさてもつきぬの思ひありたり
うつ蟬も我世の末思ふも頼むばあり此ふしありけり
寄舟 述懷 いろあらん舟ありてか世中此うきせ茂早く渡りはてまし
寄道 述懷 眼の前も見ゆる大路をともまれれば雲井遙かむひあしつへ
近衛殿乃御うら此君も仕へけるとさ左府公乃二十五回忌の御追福も懷舊の歌よてまつる
へさ由を承りて

君え乃ぶ致あいる身此のしあさ茂思ふ涙もひとつあぞ散る

天保十三年比冬ありけん暫らく國お歸りて又此年乃四月ばあり此不りまうで來たるに芝
山殿近頃かくまさせ給へる由胸はぶれて承るに此殿より下されし御文や何や税所篤之が
許より傳へおさせたりこの早くおのむ在國の安否をとはせ給へるありしを又も此不り來
ん日の程なき哉思ひはありてかれおもどにいとめ置さしありけり

思ひうけぬ君の玉ものうけもあへせ袖おつるの泪也なり
同じ頃師の翁の亡きおとを訪ふ更にうけいとも覺えず

君まさで荒たる宿我來て見まははれあさう此花ばくりなり
呼ばへどもおけども今いひもあし只山びおる答乃として
假初乃言の葉草もいま更おおもへばみち此ま我りありけり
十七回忌の追悼お春懷舊といふことを

月あらぬ影も雲井おのまむありかつらの園此はるの夕ぐさ
同じ年母君の十七回忌に

いつまでう回る月日我形見ふて行方もまらぬ影をおふらむ
友ごちの一周忌お

ともお見し花も盛お成おけりおの世のはる我まらばまや君

あさ人乃たより待ちえし心地して西よりあよふ秋乃初おせ
參河守新納楚久翁此二百回忌お寄弓懷舊の心哉

我まらぶ君が真弓此あるはづのひいたの家の風おらおせり
賀茂河さらへありける頃

さらになささらへ清めて萬代をたへそふらん賀茂河の水
はるさ給はりける春のはじめに

我君此まのげらしこむ涙よりあまみそめたるはるの空うさ
いたづらにくちぬと思ひし古柳さらお時めく春の來おけり
大嘗會の伴造おて仕へまつりし正殿允常志ぬし其頃名我纒と改めて祝ひ此歌乞はれしお

さちれおき身の寶舟大君のめぐみふか江おつあをどめてよ
着 袴 うひばかおよそふ姿おやた太刀の利心やぶて願はれおたり
婚 禮 天地ともおひらけて妹背山さのゆく道のあざりあさるお
神職本田加賀の越階宣下ありける悦びに

此不るごにのさき位の山おれお神おひおれて君のこえけん
大脇某の八十比賀に

新納空翠翁の八十此賀に
千世乃坂おえんはしとや成ぬらん昔此なりし富士此まば山

世治文事興
うたを経てよむらぬ君の玉の緒の萬世をさへ結びとむらん

寄書祝
君の代の弓矢とるらん武士も文乃はやしにのくれてや住む
治まる御代の恵の福まりあひあぶあるふとの花もさきつゝ
もろこし此文の林お咲く花の實あるあさひ君の代あして
今の世お書見ぬ人もあありけりまみの此がまん道やあらしむ
世をいとふ人のまむらん奥山も君のまのげ乃外あらしめやの

寄山祝
高千穂乃高野の奥の荒そ山あらしむえし御代あもある哉
幾そよびあはあおしてもまをへる水や皇國此姿あらしむ
萬代を君あひあまんうれしさに動ぬ岩もあらしむと思ふ
さそひ來る夷あふぬ神風のさやなき國のまるしからせや
潮あ見此こりて生りけん國舟も貢さしとさそふ御代あ
君の代をうたはぬ間あもくむ酒の恵の露此あまらせや
野お山あかくらむ露を我君のめぐまあけて誰あ見さらん

寄水祝
萬代を君あひあまんうれしさに動ぬ岩もあらしむと思ふ
さそひ來る夷あふぬ神風のさやなき國のまるしからせや
潮あ見此こりて生りけん國舟も貢さしとさそふ御代あ
君の代をうたはぬ間あもくむ酒の恵の露此あまらせや
野お山あかくらむ露を我君のめぐまあけて誰あ見さらん

寄石祝
萬代を君あひあまんうれしさに動ぬ岩もあらしむと思ふ
さそひ來る夷あふぬ神風のさやなき國のまるしからせや
潮あ見此こりて生りけん國舟も貢さしとさそふ御代あ
君の代をうたはぬ間あもくむ酒の恵の露此あまらせや
野お山あかくらむ露を我君のめぐまあけて誰あ見さらん

寄舟祝
萬代を君あひあまんうれしさに動ぬ岩もあらしむと思ふ
さそひ來る夷あふぬ神風のさやなき國のまるしからせや
潮あ見此こりて生りけん國舟も貢さしとさそふ御代あ
君の代をうたはぬ間あもくむ酒の恵の露此あまらせや
野お山あかくらむ露を我君のめぐまあけて誰あ見さらん

寄酒祝
萬代を君あひあまんうれしさに動ぬ岩もあらしむと思ふ
さそひ來る夷あふぬ神風のさやなき國のまるしからせや
潮あ見此こりて生りけん國舟も貢さしとさそふ御代あ
君の代をうたはぬ間あもくむ酒の恵の露此あまらせや
野お山あかくらむ露を我君のめぐまあけて誰あ見さらん

寄露祝
萬代を君あひあまんうれしさに動ぬ岩もあらしむと思ふ
さそひ來る夷あふぬ神風のさやなき國のまるしからせや
潮あ見此こりて生りけん國舟も貢さしとさそふ御代あ
君の代をうたはぬ間あもくむ酒の恵の露此あまらせや
野お山あかくらむ露を我君のめぐまあけて誰あ見さらん

寄橋祝
あくばうりやまくも渡る君の代にたれ何事哉さしやきの橋
君の代いたうさいやしき暇ありて櫻かささぬ春あありけり
櫻花ちらびいのあのかもひより外にかもひ此あき世となり
君が代のかもふ事皆たち花乃實ああるあおとなるが嬉しさ
年々にみづえさしそふ夏山此陰にもたぐふさみか御代のあ
萬代を君あと寄せる秋の田の稻葉此あみ此あとのさやなき
世中此千々此賣の秋の田此いさ葉のあみのまをるあありたり
たなつものまつき終りて神無月此どけき時と春もさぬらん
冬あもりも乃まづあある時ああをほくくあもへ君の恵の
大心野とり山とり廣たればとはにあと葉のはあひ咲きつゝ
あもふどち月と花との影あまてあそぶ道さへ廣き御代のあ
波たぬ世ああひてあをまられれ海とりあうさ君の恵の

夏祝
あくばうりやまくも渡る君の代にたれ何事哉さしやきの橋
君の代いたうさいやしき暇ありて櫻かささぬ春あありけり
櫻花ちらびいのあのかもひより外にかもひ此あき世となり
君が代のかもふ事皆たち花乃實ああるあおとなるが嬉しさ
年々にみづえさしそふ夏山此陰にもたぐふさみか御代のあ
萬代を君あと寄せる秋の田の稻葉此あみ此あとのさやなき
世中此千々此賣の秋の田此いさ葉のあみのまをるあありたり
たなつものまつき終りて神無月此どけき時と春もさぬらん
冬あもりも乃まづあある時ああをほくくあもへ君の恵の
大心野とり山とり廣たればとはにあと葉のはあひ咲きつゝ
あもふどち月と花との影あまてあそぶ道さへ廣き御代のあ
波たぬ世ああひてあをまられれ海とりあうさ君の恵の

秋祝
あくばうりやまくも渡る君の代にたれ何事哉さしやきの橋
君の代いたうさいやしき暇ありて櫻かささぬ春あありけり
櫻花ちらびいのあのかもひより外にかもひ此あき世となり
君が代のかもふ事皆たち花乃實ああるあおとなるが嬉しさ
年々にみづえさしそふ夏山此陰にもたぐふさみか御代のあ
萬代を君あと寄せる秋の田の稻葉此あみ此あとのさやなき
世中此千々此賣の秋の田此いさ葉のあみのまをるあありたり
たなつものまつき終りて神無月此どけき時と春もさぬらん
冬あもりも乃まづあある時ああをほくくあもへ君の恵の
大心野とり山とり廣たればとはにあと葉のはあひ咲きつゝ
あもふどち月と花との影あまてあそぶ道さへ廣き御代のあ
波たぬ世ああひてあをまられれ海とりあうさ君の恵の

冬祝
あくばうりやまくも渡る君の代にたれ何事哉さしやきの橋
君の代いたうさいやしき暇ありて櫻かささぬ春あありけり
櫻花ちらびいのあのかもひより外にかもひ此あき世となり
君が代のかもふ事皆たち花乃實ああるあおとなるが嬉しさ
年々にみづえさしそふ夏山此陰にもたぐふさみか御代のあ
萬代を君あと寄せる秋の田の稻葉此あみ此あとのさやなき
世中此千々此賣の秋の田此いさ葉のあみのまをるあありたり
たなつものまつき終りて神無月此どけき時と春もさぬらん
冬あもりも乃まづあある時ああをほくくあもへ君の恵の
大心野とり山とり廣たればとはにあと葉のはあひ咲きつゝ
あもふどち月と花との影あまてあそぶ道さへ廣き御代のあ
波たぬ世ああひてあをまられれ海とりあうさ君の恵の

寄道祝
あくばうりやまくも渡る君の代にたれ何事哉さしやきの橋
君の代いたうさいやしき暇ありて櫻かささぬ春あありけり
櫻花ちらびいのあのかもひより外にかもひ此あき世となり
君が代のかもふ事皆たち花乃實ああるあおとなるが嬉しさ
年々にみづえさしそふ夏山此陰にもたぐふさみか御代のあ
萬代を君あと寄せる秋の田の稻葉此あみ此あとのさやなき
世中此千々此賣の秋の田此いさ葉のあみのまをるあありたり
たなつものまつき終りて神無月此どけき時と春もさぬらん
冬あもりも乃まづあある時ああをほくくあもへ君の恵の
大心野とり山とり廣たればとはにあと葉のはあひ咲きつゝ
あもふどち月と花との影あまてあそぶ道さへ廣き御代のあ
波たぬ世ああひてあをまられれ海とりあうさ君の恵の

幸逢太平代
あくばうりやまくも渡る君の代にたれ何事哉さしやきの橋
君の代いたうさいやしき暇ありて櫻かささぬ春あありけり
櫻花ちらびいのあのかもひより外にかもひ此あき世となり
君が代のかもふ事皆たち花乃實ああるあおとなるが嬉しさ
年々にみづえさしそふ夏山此陰にもたぐふさみか御代のあ
萬代を君あと寄せる秋の田の稻葉此あみ此あとのさやなき
世中此千々此賣の秋の田此いさ葉のあみのまをるあありたり
たなつものまつき終りて神無月此どけき時と春もさぬらん
冬あもりも乃まづあある時ああをほくくあもへ君の恵の
大心野とり山とり廣たればとはにあと葉のはあひ咲きつゝ
あもふどち月と花との影あまてあそぶ道さへ廣き御代のあ
波たぬ世ああひてあをまられれ海とりあうさ君の恵の

春
あは御代の人あ心あ立あへる春ああまみのいろにいづらむ
大きみのまのげとりたつはる風をまの門まづ此上に見る哉

くみほげし今朝の若水おれぞこの老を死おせの薬あるらん
 我世さへ改たまるらむ心地して嬉しくあへるなごの春かな
 あつきのゆふつけ鳥の羽ふきにやがて聞ゆる春は初風
 打赤びくまゆくめ繩乃春風に誰が玉の緒もゆらぎそむら
 朝のまみ匂ふはよの山松おまはぬ千代の春を見えける
 立ちへる春をうらべてわたの原満ち来る沙は音どのどけき
 さちかへる春の沙を打たぶり音せぬ波のよせかへる見ゆ
 いづままで霞をひきて見たるらむまつら此海の春のはつ風
 紀の河の霞と浮きておぼるめり吉野の嶽の去年はまらゆき
 萬代のまどりほらたお成おなり龜のを山乃まねのまつばら
 とよ國のたぐは長濱はるくともまむ朝けにたつ鳴き渡る
 高千穂のまねのまら雪のつ消てたつおねとやく霞むらさ哉
 たつおねの聞ゆる空にさちにけり豊あし原は春のはつおせ
 雪消えぬ我山さやうぐひその聲おささだつ春あがりなり
 山をいので人よりさたお世中此春はまめたるうぐひその聲

大空に立つらぬ春はうぐひその告おくれたる年あがりけり
 春來ぬと鶯鳴きて告げつらむ片やまうげのうめ咲きになり
 みちだおもいまだひらけぬ山里の雪のうちおも匂ふ梅の香
 里ごとお梅さく頃此春風の香おはまてや吹ききたるらむ
 鴨川はつゝみ乃柳もえにたり水のけぶり此あさみどりある
 わさあしとどりとるひ行く佐保河乃水の烟のやあさみどり
 六田河まだ春寒き水の上おあびくるまみいやあさみどりけり
 白雪此所得たりし岩くら此野もわらくさのはらとありおさ
 春の色にうつるはよりや山松此まざおたぶふ心なるらん
 田子此浦ののまを此上おあらはれて雪も春めく富士の柴山
 水の江に鯛つるあまのまを衣おきみおかれて見ゆる頃おさ
 たち花のをどの霞の高千穂此ひさをとりこそ打赤びきりれ
 わたつと此おさしの花と咲出る波もおぼるおらむむ春のあ
 山もど此霞お残るはるの夜をまらでや月のまらまはてらん
 山おぼの朧月夜うぐひその聲におくれてあくるあがりなり

よのあう此花の匂ひを大空あなせめてまゆる月のあげあ
浪のねともねぼろあかりてみかと江の柳あ霞む春の夜此月
春霞たちにし日よりこし此海乃浪あつらありあへる雁あね
聲を帆あおぼてゆく雁舟あらば梶うくしてもどめまし物哉
大空あほあおれあぶらかへるらん隼月夜のはるのかりがね
ま此まだれまのむともせぬ我宿茨鷲かしなるつばくらめ哉
明暮るゝ物とも空の見えぬ迄あそきいはるの日影なりけり
ことの葉のあげをめぐりて三千とせの春あ流るゝはあの盃
妻戀ふるあした乃きい片岡乃尾あし遙あ鳴きかはしつゝ
松の火乃影あてまれば我宿の花のはやしもねくふうくして
大井河底あ移るゝ花此色も見えこそ、またれ夜のあなぬらし
櫻あり山口たどるやとまでゆくまむ家路もおもひしも此哉
はあられし雲の遙あわけまてゝ今あそ花乃もどに來あなれ
花陰のあかじむしろと見るばうり霞あきたる浪のうへがあ
わたつきの宮のうちまで薫るらん波あうつろふ山さくら花

夏

古寺の軒端のさくらさきあけりこけの袂もはるやまゐるらん
なら此葉の名あふ宮のあも影も匂ひあさある八重櫻あ
今のまた花此雪間あ成あけりあた野のみ野此春のわあくさ
大井川流るゝ花哉何かせんこまゑあけんまあらみあがな
吉野河はや瀬をくだま筏士の袖も乃あさざちるさくらあ
ああおまし櫻此のちに咲出てさあつあしたつまあしの花
いくばくも此あらぬ春哉あ惜しみてなくも老あゑあして
いろくづの遊ぶまきはあ影まえて楓のあ葉打あびさつゝ
やとゝぎは水底さへに鳴ぬべく杜のわあ葉の影ぞうつれる
打あびく櫻のあ葉影見えて風あそわされまらかはのみづ
あああへる山邊あ我まめやとゝぎはさへあとづまあなり
うち羽あさ鴨こそああねあつゝ川青葉のかあ袂あむしも
あの花の月此光あまゆるうあむあしき谷のあゝるまあたの
山あとの河そいうつぎ咲あけあ行あふ榎あゝるまらあみ
まやあ人あはぬばかりや山里のうといふはあ乃心あるらむ

春とゞぎに鳴て行くある山もどの卯の花垣を誰のまがはん
 我山の少なく取らぬやとゞぎに聲はさうりの世人さくらむ
 時鳥聲はさうりのさみだれの空ふりゆくものあざりたる
 郭公まつといふしにたぐ宿の聲も惜しまぬも乃あざりける
 我やどにかまんだでこそたからめ假も訪はぬ時鳥のあ
 とる苗も今の千町の末あらん田うた遠くもあひあなるかな
 さみだれの晴間くをまが世ふて盛ひさしきあぢさゐの花
 光あき我谷の戸のさみだれの日敷もまらぬものあざりける
 雲だおも今朝の残さぬ谷風も猶さみだるゝまきのまたつゆ
 五月山夕こえ來ればともしさをさつぬごとくに逢あける哉
 もとより此老の寢覺我をやくも叩く水鶏あひあちつる哉
 ぬさめせし我かとあひや聞つらん夜深き窓をとふ水鶏のあ
 照る月の夜頃まちても晴あたりつらしと思ひし五月雨の雨
 雨はまて更あさやなき山水も秋乃あげまむあつ夜のつき
 影見えし富士の高絲の雪さえて月あそらうべ田子のうら浪

秋

明やすき夜半だあある旅遣水乃細きあぢれにやどる月うあ
 餘りおも今年竹の長々れば夜たゞまる月葉ともりあして
 はちま葉の上よりうへに白露はこがれてかゝる音の涼しさ
 まばくもあなるゝ露の蓮葉の浮葉あのみたまりたる哉
 あらゝにあけりしきあ蚊遣火の烟ぐくれ此夕ぐやの花
 あさひあき玉とさゝぐる氷こそ大山つきのまつさあるらめ
 くれ竹のは山のあはづ聲たてゝたしたのまふる夕立のあ光
 待つ人もあらしと思ふわさつきののはあれ小島も夕立をする
 ゆく水も移るをそれバ我そでのうへる影さへ涼しかりけり
 秋風やあのが羽袖あたちぬらん昨日も似ぬせみの聲のあ
 露もまだあさあへぬまも立あけり涼しきまでの秋は初あせ
 久方の星あひの空も立つ秋の風も物もあふ瀬まとしもなし
 流まても同じあふあやあへるらむあふ瀬のはらぬ天の河水
 大空の風もぬるまのあるべきに夜ふさあゆる萩の音のあ
 朝あくゝあさある露も萩の葉の音のさえ行く物にさりたる

吹く風も露ふまゆりてみゆばかりあびたふしなる秋萩の花
 花まゝま招きやまたる朝の間を心まづりおこくる野邊の
 秋の野あさてりとおもへば女郎花あさのまぶさ花は心の
 人のまひおと秋やさしと女郎花尾花が袖をさのきてぞ立つ
 わたらしき朝顔まむとあささくはらはぬ塵も拂ふ頃あな
 白露あうづもれあざら鳴く虫は露てる月あまをこ見たるらむ
 秋の夜の思ひくらべの虫は音のあき明したる露や知るらむ
 ふたぬれむむひの岡の虫のねもまぶさの内に成あなる哉
 あやろぎの鳴く聲やまて村雨のふる日さびしき岡のべは里
 山城のよどの堤を朝行けばかゝ野はま野あうづら鳴くあり
 誰が里にあほらむ雁のあらねともやの聞く聲はあつしき哉
 常世へあおとしまぶちし雁のねも水穂の秋を今や訪ふらむ
 夕べく我山もとにたつきりの末あぞあひく天のかりがね
 月をまづゆふへの空の雲まよいまづあらはれし雁の一つら
 秋は夜の月あ横さるむら雲のほらある雁のつばさありたり

あふ坂の山さしはなる影よりもまふれていつる望月のあは
 望月の名あふあまのさやある影も雲井あ今のまゆらむ
 つゝむらむ尾花が袖のまら露もあらはれあなり山の端の月
 桂川流るゝ霧のゆくへさでみえこそとされあきの夜のつき
 ろけはしの上行く程の小木曾山ともあふ月も物まおくして
 月をかひてあへる柴人岩くえは道ともいはずうゝあ聲さる
 汐時ああるをのどまりあき出む月はまふねも今どうあふる
 はしごての松のつらの心地して月あありぬるよさの海原
 やつまざる尾花が袖をさふ月の影もまゆりて夜を更あなる
 此頃の河霧さむさものゝふは八十うち人やころもうつらむ
 いまだ夜をうちもるさ糸ぬら衣あへりて聲は夜寒さる哉
 宿おどにくめどもあまる菊の露山路の千世のふる事おして
 菊の花はじめてあさだかふをこそ我あむ千世の山口あせめ
 あかりともまあどの霜のまえぬうあ月をいさく白菊の花
 峯をあえ谷をわたりて長さ夜を妻とひあのを鹿の音をさる

冬

世中のうたをわつめし心地してあぐめふたへぬ秋は夕べや
 たちまじる松ふ習はで年々にそむる紅葉もまざりあそびや
 長月のまゑのまつ山一むらの雲おそおゆれまぐれそむらむ
 昨日々ふまぐる、空も此どのおふて霞むお似たり山は端の月
 我山の常ある雲の深ければまぐるともあくらうちまぐれつゝ
 あまぬとて雀さへづるむら竹の末葉さやうに霜見えおけり
 野邊まればあびく草葉もあうりたり嵐やけさの霜と置けむ
 やつまたるくものまがき残るばかり結び初る池の薄氷
 あしの葉も動ぬぬさのあつ氷嵐をさへやむまびとめけむ
 むら鳥の梢はある、心地して在明のつきあちる木の葉のあ
 朝あゝ時雨もふらぬ庭の面に濡し木葉のちらぬ日ぞあき
 あさあゝ霜あそ秋をへびてなれさうりあざらの白菊は花
 菊は花いよゝ千世の色見えて霜のさうりにあひあたる哉
 山陰のいは根ぐくれに残りけり霜おまらまぬ白ぎくのはな
 あし火さくあまが垣ねの菊は花いつまで霜のおき残まらむ

冬のれの垣ねの尾花まねくだあ寒きゆふべを月のとふらむ
 大井河かはつきゝつる山うかの入江さむくもあく千鳥のあ
 霜あぬ浦の洲崎あ鳴く千鳥身にしむ物うまれさびあして
 さ夜千鳥まばあく聲の悲しさは名もあた鳥の名をぞ問たる
 あには舟とまもる月の影さむまねぬ夜の友の千鳥あうり
 照る月の霜いつばさにあけあざら蘆へはあれて行く千鳥哉
 霜さゆる川洲の千鳥打解けてねぬ夜敷多あかりやしつらむ
 海へより田はあふよふ水鳥の聲がやどにたえぬ頃あな
 霜のうへにとけてねぶれる鴛鳥の夢の遊も此どけあるらむ
 池水あおとしまゑさるひとつ石をしのやどりと成あたる哉
 あしびきの山のま雪のまつ程此日敷よりまつたもる也けり
 来む人のあもひたえたる山里の心うおかすけさのゆきのあ
 雪のうちあまをまぬ松を誰のいふまゑと綻べる梅もある世あ
 かなを狩はてぬあひびいれどかあて暮る、空より吹く嵐哉
 わがやど乃垣根の道を鷹人の群れて渡らぬ日もあうりけり

うづと火のかをりや下ふさそふらむ花待つ心ささし初たる
くまて行く年を何せむ來む春の道をばよたて雪のふらあむ
あやふくに流るゝ年のはや瀬川のへらぬ老の波を寄せつゝ
春ふしも立のへるらむ年波のよまざるさびき茂さく今宵うさ
思ふ事あくて過ふし年あればいよくをしき今日のくれ哉
此どのあもわふり來あたるどし波の未みぞとゆる君の萬代
若のりし時はじめて富小路殿あまのりけるあよみて奉りける長歌

玉敷の平の宮の萬代の大宮所人々さの更ふもいはせ物皆も
所得て々々さののさのふる野の道あふりはてし櫻の枝も大
御代の春ふさける茂思ある我身あしあまの手折るべきたつ
さもまらまのくつてのま世をしつくとさの夢よりもいははのさ
にもあひぬべも心ふりあふし一枝さの手をらん道あ入さ
む柔もどむと雲の上の遙々さやと茂はるくど此布りまる
來てうちほけお言とひまつることこののしあさ
同じ頃敵火山あは布りて

榎原北大宮所あはましくわまあけるのさあはましくわとも
あさのさ跡のしもあしといへとも大君のあとのまましく松
の葉の榮え給ひて玉敷のたひらの宮あ宮とある定め給へ
ふりし世の大宮とある跡あしと今の歎りじ其跡どころ

東郷某の家ある松樹の故よしをさして

千早振神のはじめしはし弓の其神とさ茂神國ののしあさわ
ざともものふの業にのまあり其道北奥のを極め其道の家を
もたてつ其家の久しくなりぬさればこそ松もふりけれ其松
のくちたるそればうつ木の木むあしゆれどもむあしくいあ
らぬ契りとその中ゆ生ひ出あける小松あそあやしむりなれ
後らへるそれを思へば其家あ吹つさへさる家の風いま行
末も其松の生ひ繼ぐおとつさくふふさや傳へむ其松の
さのゆくおといやましふたちやまさらんその家の風
鶴の詞 うちばしをいはんや翅茂いはむや首も足も踏あつきて長く
豊のにたらひあふらひて着さる毛衣の色あやもこちたあら

を清らるゝあたちなる姿も、あけらふさまも此とや、あふあふと
あふいとけ高くて、鳥のしもさはある中に、ひとり君の千年の
例あひのま歌にうたはれ、うゑに寫され、祝はれめでらまめで
ふた鳥此尊き鳥此名あつ鳥の、これのたづといふ鳥。

式島の道といふ事の早く先哲の考ありてきはめてさる事あらめと猶試まひ入る一言

敷島の道といふ名の、中昔より聞え来て、後あいたゞ道とも
いひ習へり。まの打まのせて道としも唱へむ、君親に仕ふる
より始めて、大み政の上あどあそあらめ、あのがまし見る物さ
く物あつつけつ、うめあ出るそゝる言あひ、いのでまのことこ
どしくのと、思ひもどるゝあつけてつらゝ、其よしあ思ひ
たどるあ、このあからずまのいふべきいはれあむありける。さ
るの神あがら治め給ふ大御國といへども、文てふ道の開くる
に随ひて、やうゝに人心さかしくなりもて来て、たもての義
理てふものをむねとし、よろづ用意がちに偽あどの多かめれ
ば、紀朝臣もあしあきあやん時あありなむら、今の世中、色あは

き人の心花あなりあけるよりまのゝ、あどあげつらひ給ひ
しやうあて、いよゝくごちての代あひ、人と交らふ道もたま
あへるどちこそあま、大方のうはへのまゝしものまあて、あど
頼まかくかりぬるを、猶上つ代の道此誠の、まのあむあ歌あ残
まて、その世の常のことありにあゝはらま、耻あしき思のくま
あも歌あ出でつゝ、心をやる道あしあまば、そをやあて我式島
の道としも唱へ來つること、あまじうよしありて覺ゆ。されば
あの朝臣、古今集を選びて、ふゝあびその道ああし給へるの
まばらく歌てふものゝ、上ああそあま、神此ま國のあやに奇し
き道の誠あうまく味あ、深く悟まて、まされたのうづら永く傳へ、
青柳のあどあえぬいさあを、残し給へるあまけり、されば事此
心をも得あらむ人の、大空の月を見るあおとく、古へを仰ぎて
我道あ樂しまさらめや。

四編

春部

社頭立春 住吉乃神此ともし火をむかりみつの濱邊に春やもつらむ
 早春梅 梅が香の今幾日隔りて春風の誘ふばかりあらんとすらむ
 根せり摘む袖こそ匂へよつちあく竹田のはら此梅乃はつ花
 早春鶯 山遠さみさとの春もうぐひす此聲よりたぬ年あかりけり
 鶯告春 うぐひすお驚のされぬ里もあし春ともわり雪の降れし
 柳間黄鳥路 九重の大路乃柳うぐひすのまやあどまぬはるあかりけり
 若菜知時 君のためつまるゝ物とありしより若菜の時流急なるらむ
 山家若菜 雪さえぬ山まゝ水乃はつ若菜けぶるとなしにもえおける哉
 山家若草 柴の戸おこもる心もわる草此まどりにうつる春の來おたり
 かつもえてまど春めぬ若草のあさねに見ゆる岩倉のさど
 山家早春 都までいつの句はむ我山のうめ乃はやしのはるのはつらせ
 早春雨 山里此のさねの小ぐさもえそめて小雨ふる日流誰と語らむ
 雪中子日 小松ばら枝うちふさふさふる雪ふ千代へむ乃ちの姿をぞまら

雨中子日 雨ふれば人残バひきて我宿お小松もえらぬね此日をぞまら
 早春松 朝のまみさあびく見れば粟田山やめても松乃おをひえけり
 名所梅 とわづま此たよりあきくぞなつものしき木幡の里の梅乃初花
 難波江の梅の香とめてあぐ舟の霞のひくにはあをへらあま
 山家梅 鶯乃ふる巢おとなる我以やの初音まつ間も此どけりけり
 野外梅 梅の香お夜たゞとはまて故郷の野中此庵おいをねおねつも
 梅香入簾 空さたもあらそひおねて梅の香お所をゆづるをま此うち哉
 曉鶯 あうつさ此枕の山のうぐひすの寐物おさりをまる心地して
 あつちやらぬ霞乃なくお開ゆなり夢ばのりあるうぐひすの聲
 朝鶯 鶯此ねぐらの花乃上おればおかしてや今朝もなぐらむ
 山家鶯 谷の戸流いでしうぐひす我宿の垣根はあまぬきのふらふ哉
 霞中鶯 霞ひお世の花ふうつらむ鶯此聲惜しまるゝやま此おくのあ
 我やどもおあむのまみのうちおれどよをお聞ゆる鶯此こゑ
 青柳風静 ふく風も霞となりてかみ河のやあどえぶにかゝりける哉
 霞中柳 やまもとのあすまにまじる柳原風のまおたも見えぬ頃あ

水郷柳 青柳乃もえ初しよりむつど河うをみ此よと成おけるるあ
 うちなびく柳乃外あおげもあしをみおあもる三島江の里
 月前柳 青柳の陰ふむ道のまぶさよりおあるおありぬはる此夜此月
 あつあしき月夜なりたり遠近あかむ柳のうげも見えつゝ
 青柳乃なびきまづまるのげ見えてよひく霞む山の端此月
 草漸青 やあぎのまひし河邊此若草のみどりおあびく心あ
 江上霞 大くら此入江のすき果あたりれくまじ鴈のさつ空やなき
 此どかなる霞乃波になれく入江の巢鳥さゝむともせま
 護深山色 さいあみ此比良の遠山雪あがらうきみどりにも霞むたさ哉
 浦霞 住よし此松乃ひいたも絶ぬらん霞あかりぬあどのうらあま
 湖晚霞 ゆふづく日あがら此山あいらしより霞とありぬ志賀此浦波
 里霞 ひとむら此霞がくれお成しよりいよくゆるし花あきの里
 杜間霞 天の河なごさのもり此春がまを昔をうけてまれの見ざらむ
 うちあぶり杜乃のままと成ぬらむさらし川乃水乃えら波
 田家霞 たち残る鴈ぶみえま霞む日乃ゆふべさびしき小山田此里

江上春曙 ぼくる夜もまばしたゆさふらげまえて柳に霞む三島江の里
 都春月 ゆくはるる都乃うちおまめつらん臘月夜のうれどころ哉
 海邊春月 さし登る生駒が嶽の月待ちていよくあまむまつ乃浦あみ
 夕春月 中空あかまめる月をまらましてゆふべの山波あがめつる哉
 暮れぬ間の霞あきえし山松此あげこそあやへ月やゆづらむ
 餘寒月 さえあへる雪げ乃そらもれある夜此句のきえぬ月此影あ
 曉歸鴈 花お寐てまどろまねし明あたの枕乃うへをあへる鴈あね
 海邊歸鴈 見さ此はら遙あまふらひもあし鳴き隠れ行く天つ鴈あね
 たつ鴈此ゆくへまへへ何あらぬ離小島もあつあしきうあ
 野雲雀 いづこまでおのまめ野と思ふらむ雲あ消て鳴く雲雀哉
 山花未開 嵐山まぶ花さあぬさよりのま花のふもけふも聞えけるるあ
 陽明殿ふて花乃宴たまはりたる日
 このとのまと櫻あやあはまらむくる春毎あゆらぐ玉の緒
 此殿乃玉此みはし此花あ酔ひねぶるの蝶此夢あやあるらむ
 嵐山お物して 棹とらでなぶるゝ舟此まづかあも暮れ行く花乃色波見る哉

かき日雨ふなりぬ

雨をしるさそふ蛙此聲さけハ花ハ今日こそさのりありけれ
あめあなる空とまるく一夜寐て目りあく見つる山櫻のな
春雨のふる日しもこたまりなれこぼれて見ゆる花乃情の
はるさめ此はるまつとて花もりお伏屋お宿を借てなる哉
花乃盛お雪の降たれば

故郷花

よそへても見つる櫻の花のうへに誠此雪のかゝりけるあ
いく千たび咲はりけむいそのあみふるさ都此山さくら花
古さとのむろしを忍ぶかげもあし今の若木乃花のまほして

松間花

山松乃ほらしれうちお咲く花も盛のほりてちる世ありけり
としくおあれさへ老を忘るらむ花とあらびの岡のべ乃松

野花

さいまきく野中此櫻来てままかまむ梢をはてあのりける
花れ上おあはあれゆき春此夜を惜まがやあも残る月うあ

雨中花

櫻狩さぶめれさつる此おる乃そらの雨おあありあけるあ
あは山おまみはてたる春さめい花れ上よりはまあなる哉

雨後花

船中花
社頭花

國といふ國乃さくら大舟の上お見で行く旅あもあなるあ
ちはやふる神路の山乃櫻花あれやふりせぬ千代のみてぐら
初うまの日よまさぶめていかり坂ふたさびのぼる花盛かな
さは姫乃やまと錦とれりいでて手むくるぬさの櫻なりけり
此りつまでほまも遊ばむ神山のうま塲のさくら今さのり
嵐山おて心さく花折る人乃多たを見て

毎年花有約

山櫻あらぬあらしあさそはれて枝さへほごに成あなるあ
さだ先たかく花乃ところの年毎に契らぬ友もあくれさまら

花下言志

うつせまのまが世のあざり見るべきい嵐此山乃櫻ありけり
みあるまのまあと乃雲のまら糸とも花あぞあゝる瀧つ白波

瀧下花

あまらあもどふべき花乃陰あはみうのれわづらふ我心のあ
折あふれたる

春江花月夜

ねは井川いり江此さしに舟と先て花乃浪間此月を見しあ
花をいでて花あくるみ吉野乃吉野のあく此月をまし哉

花間月

嵐山此花見お物して歸りたる道おて
花あゝる歸るさの野此朧夜のかあぬるよま樂しうりけり

夕落花 蛙さく田中此さとの記不る夜お立れくまたる鴈もありけり
 中々にちりもつくさばやま櫻暮をのざりに見てましも此哉
 根ふのへる花の景色をつくく、と見る夕べも成おける哉
 月前落花 お不つう赤臙月夜おちる花此行方の風もまらせやあるらむ
 行路菫 をどめらが裾ひく道のまこれ草ねたくも色此ゆゑりなる哉
 苗代蛙 玄光ひきていはふ門田の苗代お夜さいはづの歌ぞ聞ゆる
 蝶 花此上おたはる、蝶のあくがれし誰の魂のなれるなるらむ
 これのまどもなひて山里の藤見お物しなる時
 行く春哉まふうざり此袖の上あうちなびくなり藤波の花

夏部

尋残花 けふも猶雲の色こそおやひなれおもひたゆべき花の蔭の
 朝更衣 花ぞめ此袖此別のさぬく、此あしお似る物にざりなる
 待時鳥 ちざりふさてまつといなしに時鳥遅しと此とも恨みつる哉
 尋時鳥 やどいざり尋ね暮してう此花の月ふむ道になりになるかな

初時鳥 まつ人もいまだ聞えぬ此頃のそらにあきつるやどいざり哉
 曉子規 ぬばたま此夢路をいでて時鳥有明此つきのうげおあかきり
 雨中時鳥 あつさ此夢路の末のやどいざす月やうつ、此聲の聞々む
 さみだれの雨おあもりて子規またしきねをもさしてける哉
 空たのくれもひあがれど子規なくぬ雨のうちおこそふれ
 さみだれの雨をまのきて杜鵑よりあさねをも鳴てなるかな
 梅雨此晴れぬ日頃のほどいざ聞くより外此慰さめをなき
 たちばな此花ふりくさば五月雨おみだれてもなく子規のあ
 夏神樂はてたる杜の陰おきて初音たむしやどいざりかな
 杜時鳥 あくたびにとあるをへて時鳥いつまでまのぶ心あるらむ
 時鳥何方 わや死ひくたとまにさ、つ山城のとどのむたりあなく時鳥
 名所子規 聲さえぬ鏡乃山此やどいざまやつれしかのが影やまゆらむ
 市郭公 去ささつむ曉おたの露をへてあくやあたお乃山やどいざま
 立花乃らゑ木もあらば子規いちおたちてもまましものを

郭公はつねうるまの市さらばあさひもとほはでかはまし物哉
 わやめうるいち乃ちまふの杜宇たよりもまべき所なりたり
 橘 薫 袖 以のちれバ昔もまらぬ己の袖を花たち花の香のまふらむ
 故 郷 橘 さちばきの香あさをはれて故郷此われし垣根を尋ねつる哉
 雨 後 橘 昔おもふ草の以り此雨晴れて以よく薫る乃きのたち花
 さみざれ乃雨此はれ間をふく風のはき橘のおやひありたり
 晴れておそおはひのまさされ此頃の雨おあばれし庭のたち花
 たちばあ乃にはひ夜ふうた手枕に昔をうけぬ人やああらむ
 深夜 橘 手枕乃夢もあはひもきえおねてむうしはあれぬやの立花
 こととはむ鳥だみえお成おけりまぶの渡の五月雨此ころ
 河 五 月 雨 晴 はる雲おにし此風さたえ初て限おありぬさみだれのそら
 五月 雨 晴 さみざれの日數もいまのあまけん河音つねお成おなる哉
 鵜 河 瀬を走る魚より早く夏の夜のわくるをれひて鵜おねさま也
 おゝ我瀬ときそふ鵜舟乃篝火乃影よりやぶて夜の白みつゝ
 名 所 螢 み吉野此みくまの昔もあらはれて螢とおありくるゝ夜毎に

難波人萱火をまれて明きらんあや乃渡りあやさる飛ぶ夜の
 窓 前 螢 せとのえ乃淺澤沼に飛ぶ螢かりしあやめ此あとやとふらむ
 深あらぬまどのうちこそ嬉しけれ澤乃螢のかかも見えつゝ
 窓おしおまぶく螢のかまをまば月のさまより涼しかりなり
 遣 ふく風の露おまめりて花はちすひらく音のまをえける哉
 風よまもとくおさいいでて蓮葉おたまれるまゝ此露お見し哉
 見 池 蓮 うらやまし此世おがらに世中のうきお出たる池のはちま葉
 夏 月 易 明 ひむがしの山下陰の夏此夜のあてて此ちおぞ月の見るらむ
 ひむがし此山の高くもあらぬども登ればまらむ月の影のあ
 磯 夏 月 月をうつわらいそざたの白浪のやぶても夏おくづくこら
 海 邊 夏 月 もゆばかり見えし真砂もうちまめり月夜とありぬ長濱の浦
 雨 後 夏 月 夕立の晴るゝ我まちて行く道の草葉おるゝる月のうげのあ
 さのふ今日あので過おしゆふ立此雨の跡とふ月もありたり
 夕 立 はるゝと過行く方も一むら此雲おかざり乃ゆふだち此雨
 待てびぬ人しあなれバ夕立此雨のまばしもとまらざるらむ

草も木もまぢよるあべる夕立の雨おそ夏此いのちかりけれ
 けふもまの軒端ふかゝま大ひえの高根ふちしゆふ立の雨
 遠づまのあき根きらねどあつかしき木幡の里の夕顔此はな
 水垣此みたらし川乃夕まいみ風おも身をバそゝぎつるあな
 いくぼくの袖あつゝみて歸るらむ夕べ涼しきあも乃川のせ
 松風も手にむまばるゝ心地して影さる水ぞまいしりける
 泉爲夏栖 まるせたる流いはそき山水の遠くもあつ茨へだてけるあ
 松風五月寒 霜雪おなれし心や此あるらむあつさへ寒き乃きのまつあせ
 夕納涼 夕月のあげ水底お見えしよりあつさのやあてあおれける哉
 夕風あふさあへさるゝ袖まれば人乃うへさへ涼しうりけり
 閨扇 とりあへしかささからねど此頃此閨の扇の手をもはあたせ
 扇不離手 手枕此うへあかざしてうたゝねのほどもはあゝぬ夏扇あ
 夏雲 上あたつ峯こそみえねえら雲の心さあさああつぞ知るべき
 荒和祓 天のまたあらぶる神のあごみあは我身の罪の残るともよし

秋部

初秋露 秋風の吹きあし日より朝あゝ門田乃露をいでてあそ見れ
 昨日けふ露めづらしさをさ原風も心をかくあやあるらん
 朝あけの花乃ひもどくわし垣あむまびしまゝ此露を見る哉
 風吹あぬ都乃空あたつ秋のつゆのたかくおぞおどろかれぬる
 虫知秋 野邊とやきみさとのうちらに啼く虫の心お秋乃露やたくらむ
 はさかりいそぐ心此はやけれ人より先お秋を知るらん
 待七夕 天の河はしのあふせを待つほどいらさ秋風をいふ人もなし
 七夕川 としごと君あみあけの寫らず天の河瀬もあせや果あむ
 七夕霧 暮をまつたあばたつめ此袂よりあびさ初々んあま此川をり
 七夕風 我袖にかよふもうまし棚機のおまつひれ吹くあきのはつ風
 魂告祭 蓮葉にかくらん露の玉まつり消てもきえぬかあの見ゆるらん
 荻告秋 久かこの空にさつらん秋かぜを我あは荻のつげてけるかあ
 故郷荻 中々にあもひやるこそ悲しけまごあふるさとの荻のうは風

深夜聞萩 いまも赤は我手枕にのこりけりむうし此秋此をぎの上かせ
ぬば玉のゆめの露もあらなくにさそはぬ夜赤き萩の風哉
をぞ此葉此おとまづかおも成みけり曉つゆや結びそむらん
水邊 萩 さをしかのまがらみふせし秋萩おせかまてまゆる谷川此水
立かへり折らんとせぬ河赤みに心と赤びくわき萩のは赤
雨中 萩 露さにもあゝろおくべき秋萩此花のさかりに雨の降るらむ
行路 萩 まちの邊の一むら小萩旅人の袖はすつまと赤りにけるかな
枕下 虫 手枕此露をかなしむあゝちして夜床は赤れぬきりくす哉
雨夜 虫 赤く虫の聲おもぬまむ秋の夜此草のさもとにむら雨ぞふる
暮天初雁 霧ふかみながめすてさる夕ぐれのそらに聞ゆるはつ雁の聲
夕雁 秋はぎのまゝ葉そめんどもふる雨此さむきゆふべに雁鳴渡る
ながめせぬ人の聲さにかさらむ夕べの空を渡るかりおね
月前草花 照る月もまづ心なく見ゆるまで花のちぐさの露ぞみぐるゝ
月前薄 人影もみえぬ月夜にうらぶれてたてる薄のあはれなるかな
月前露 くさの原みぐるゝ露のゆくへまで心おかるゝつさのかげ哉

月前述べ 大ぞらの月をバ靴のがひかりふて時めくも此秋のまら露
此がれぬや雲井をまよる月さにも影の浮世の外おやひすむ
月似古 以る赤れバ影の浮世にすむ月のはかあささまの習はさるらむ
都月 さまざまの此の哀をてる月にあつめて見るも都赤りけり
名所 月 玉敷の都此外の名どあろも居赤ら見するつさのかげかな
我ふねに月人をとこうつりきてあそぶに似たり鹽がまの浦
湖上月 すみのぼる鏡のやまの月かげにあふみのうみの姿をぞま
關路 月 ありぬやと月の光にはからまて關路のとりも鳴さぬべき哉
山家 月 世中の思ひもまらぬ秋を経てまやまの月をながめつるうを
河 月 月見つゝむかしの友を恋ぶこそわが山里のおもひ赤りけれ
八月十五日夜加茂川のやどりあて さりのうちにもりて暮し山本の赤がれも月に成おける哉
野も山も色あらしめて待出し今宵の月夜明けずもあらなむ
おゝを瀬とまむらむ月の心までさやかに見ゆる水の面う赤
井 月 影赤ら汲あげさりとおもひしを月の宿まるまゝ此井の水

閑庭月 かくれがも月の訪ふ夜のまかすかに心にさはる八重葎かき
 深夜月 更ぬまばかりぞ悲しき秋此夜の月の宵こそ見るべかりけれ
 獨惜月 大うさのならひに惜しむ心かひもぐ世もふけし山此端の月
 漁父棹月 影うらぶ入江のなみにとる棹の月此舟をさすかどぞとる
 秋夕 夕暮の秋の外なるあはれまで思ひあつめてねぞあうれける
 遠山鹿 秋をいふ人のあれども此ころの夕べをかさる友なかりけり
 鹿聲幽 一さびのさづねて聞しまがらきの外山の我鹿今やなくらむ
 故郷菊 山彦のつさへざりせばさうざらむさが野の奥の棹鹿のこゑ
 名所菊 野とありし我故郷の菊の花まをてしより千代や経ぬらむ
 重陽宴 かめのをの岩ねにさける白菊の老せぬ山此かざしあるらむ
 折られていよく千世のまゆるうき今日の例の白菊の花
 田家搗衣 ねしあへて菊此下水くむ世とも遠山人のまらざやあるらむ
 雁此あく田中のさどにすむひとのまざき夜寒の衣うつらむ
 荒屋搗衣 月のもる板間をかほみいねがての夜さむの衣誰うらほらむ
 海邊搗衣 折しもあれ衣うつ夜を津の國のおやの假寐にあかしたる哉

故郷紅葉 ふるさとのわれし軒端此もみぢ葉の昔悉ぶの露や染めけむ
 岡紅葉 もせ此聲さむき岡べのはし紅葉まぐれもまゝ色付にけり
 葛紅葉 衣うつふせ屋の軒此つさもみぢ身にしむ色に出にけるかき
 楓林江色寒 もみぢ葉あてりし夕日此かげ消えて入江の霧あ成にける哉
 山路秋行 菊此花うつろふいろをながめつ、秋と共おもゆく山路かな

冬部

初冬時雨 神無月はるとかまめる空ながら時をさがへせふる時雨かな
 時雨破夢 定めあくまぐる、空あかゝるらむとぶえがちある夢の浮橋
 聞時雨 木の葉みかさそひていあし夜時雨心に残る音のさびしさ
 河落葉 大井河つちぐ筏のあかりせばあち葉此淀をいかで知らまし
 風の上にならしてさよふ程もあく早瀬此水あ散る木の葉哉
 關落葉 名れりして關うちこゆる旅人の跡あふもの木葉の葉えけり
 落葉深 散るとのみ見えし木の葉のいつのまに我柴の戸を埋み果けむ
 閑居落葉 いろくの木此葉つどひて騒げとも静けかりける庵の内哉

磯 浪こゆるわら磯ざき此小笹原いつの風間にまものふくらむ
 水 鳥 けさ見まば敷ふるばかり成にけり夜ふすさし池の水鳥
 岡 寒 艸 と雪まつころいいうで萌ざらんまこの岡此霜のま草
 寒 夜 鶴 霜はらふ松のあらしみ聞ゆあり子を思ふ夜半の蘆さづの聲
 刈 田 氷 空に此み鳴く蘆さづ此聲すあり鳥羽田の面や氷りはてけむ
 野 行 幸 冬あがら春めく今日のいでましに野守も老を忘れさるらむ
 河 千 鳥 大きみに千世をゆづるの聲さゝて鷹人いさむ御狩野のはら
 浦 千 鳥 加茂河の千鳥の聲ぞきこゆなる神山おろしいかにさゆらむ
 江 冬 月 まの江の氷幾重うかさぬらん木がさみ山のふゆの夜の月
 網 代 いつまでうかしらの霜のふる翁身をうぢ川に網代守るらむ
 竹 霞 さゆる夜にあじろ此床此篝火此影さへ氷るまちこそすれ
 晴まて猶葉をけけ此風おおとするの枝にさまりし霞あるらむ

寛 氷 我ものといきし寛の眞清水も今のこぼりにまかせはてつゝ
 雪中鷹狩 ふる雪のいくへの下に伏す鳥も御手に入るべき御狩野の原
 松 上 雪 月花のいろをかさねてみゆる哉小松が原にふまるまらゆき
 林 雪 かげふかき林が中の小ざさまで埋ま此こさぬけさの雪かき
 鳴 河 雪 あし山もひんがし山もかも川此堤とありてつもるゆきかな
 水 上 雪 水の上に散るまら雪の花あらばうきて流るゝ程も見ましを
 橋 雪 橋守の拂はぬさきに跡つけて渡りし人のねさくもあるうき
 山 家 雪 雪ふればまこと此花此咲かん日をまつばかりある山の奥哉
 楡 原 雪 卷向のゆづきおろしの音さえてあかしの楡原雪降りにけり
 雪 中 猷 白雪此花をかざして立ちけりうらぶれたりしと此楡原の
 雪 中 猷 ねく山のふす猪此床のあはままでおもひ残さぬけさの雪哉
 雪 朝眺望 うつぱり此塵もたいよふ物の音お梢の雪も散りぬべきかな
 社 頭 雪 雪つもるまがきの竹をけさまれば遠山もとに打ちびきつゝ
 海 邊 雪 ゆきふれば玉の枝とぞ成おける神やかざさんすみよしの松
 八百日行くまらちぶにゐるを長濱のはまの松原雪ふりにけり

遠山雪 花きらぬゆきのけしきも足引の遠山もりのさよりみを知る
 きのふけふ南北海のおきさまで雪のきら山と見えさるるか
 逐日雪深 わづかなる年の日敷の白雪のいくへの下に消えんとすらむ
 爐邊懷舊 老が世のかさかこされぬあげきして昔をうさる埋火のもと
 寒 閨 衾 寝らぬぬのうすき衾のとがあらで頭のゆきの寒るなりけり
 山 寒 雲 雪にさるころの空おみえながら静まりはてし大びえの雲
 神 樂 はふり子が夜深くうさふ柳葉も霜此おけやや聲此さゆらむ
 歳 暮 雪 いろに出て春まつ梅もあるものを思ひくまきく積る雪か
 歳 暮 梅 行く年のいかにぬさしとおもふらん春待つ宿の梅此はつ花
 歳 暮 松 此どかおも吹きをさまりし松風も萬代さるき年のくれかな
 歳 中 鶯 谷の戸にふゆこもりして鶯のさかぬ程こそゆかしかりけれ
 早 梅 あらたまるもの、始めの梅此花年此さるにみるが嬉しさ
 年内立春 年波のさちのさびきを此どめても霞むに似る今日の空哉
 追 儼 鬼に似る影ぶにえぬ御代されば追ふも昔此跡ばかりあり

戀 部

戀 吉野河岩間をくぐすいかだ士此棹のひまきく物をあそ思へ
 紀の國にありといふある名草山なぐさむまでの音信もせぬ
 霧此海にあらはれにさる山の端のうさても見ゆる人の心ウ
 恥もはぬもおもふ心にうつるやと思ひくて我ころみん
 逐日増戀 ぼらからぬ氣色を人のとせしより日おそふ思やる方もなし
 契 待 戀 待つ程此おつかなさの中々に契りし宵ぞいやまさりける
 恨 身 戀 戀故のわりなく身をわかへりまで日おの幾たび袖濡すらむ
 忍 逢 戀 としつきの心のやみの人まきす今宵はじめてわけにける哉
 春 戀 かもふ人おからましかば我心花おあしてもはあなましを
 咲く花お思ひよそへて見し人の春こそいと戀しかりけれ
 秋 戀 天の河星の逢瀬をながめつゝ打も寝ぬ夜のこひどまされる
 占 戀 ありならずまさしく此らぬ占故にいよ／＼胸をやく思ひ哉
 古 戀 我戀の千代ふる里とありはて／＼昔にかへるみちなかりけり

從門歸戀 うたがひのひらけぬ程の妹が門幾度とふもいふづらにして
思貴人戀 戀路の峯も麓もあらねばやおもひはかかる方なかるらむ

顯 戀 世にもれし中どの妹につげかねてひとり心を碎くころか
いつのまに瀧の音もよつばかり世もれけむ中河の水

寄 筏 戀 岩瀬川くぐす筏もあるも此をこひ路おちつむわさや何あり
君こふる我ちみだ河ながれての筏さまであらむとすらむ

寄 貝 戀 みをさえぬ涙の川此筏士のうきて此みふる日が身なりけり
いつより身をうと濱の疎まれておはぬ月日の貝の拾ひし

寄 故郷 戀 野とありて千世ふる里にあらねども我中垣の跡ごにもあし
君があふり通ふときけは何あらぬ里の童もあつかしきりあ

寄 里 戀 思ふ子があふりをわきて空蟬此世に撰ぶべき里あらめや
わが戀に思ひよそへて聞く時の虫の上さへかあしかりけり

寄 虫 戀 我心あくがるまで成おけりつまはつ虫にいさあはれつ
秋ののみ音をさく虫の友ならばこひに心につくさうらまし

戀 枕 見すらるゝ愛身おもへば敷妙の枕にさへもれもあかりけり
あまらおも來ぬ夜つもれば枕さへ塵をかづきて物思ふらむ

戀 地 儀 みるめあきおものゝ濱にかづきして徒らにのみぬらす袖哉
逢坂をこえて此後に人ぞどのまげき草津のあからましうば

我さどる戀の山路にくらぶれば熊野の奥へくまあかりけり

雜部

社 頭 杉 三輪の山ますらむ神の見えねども影とたのまむ杉の村ごち
名 所 松 とはけまば昔の人此ことの葉お恐ぶばかりのさまくまの松

遠くあるなぎさを見ても住吉の松此千年のまるくぞ有ける
此ぼる日の匂ひをうけて深みどりとはに春めく嶺の松ばら

嶺 上 松 此ぼる日の匂ひをうけて深みどりとはに春めく嶺の松ばら
松 下 鶴 芦さづの住そめしよりいくばく此千世うつもりの浦の松原

浦 鶴 住吉のあらゝ松原よるづ代此さへさてりあらゝまつ原
はるくと翅並べて君が代の長濱のうらにさづあきわさる

竹久友 吳竹の馬につくりてあそびつる昔よりこそまはしかりけれ
 暮林鳥 赤きつれてかへる林の夕鴉なにおさびしくかげのまゆらむ
 閑中燈 今朝もまゝ枕のうへお残りけりけつ人も赤きともし火此影
 扁舟暮歸 いろし日のおほひの内にははれて雲より歸る海士の釣舟
 渡舟 すみづ川とはき昔此おるうなを浪にうかべてさす小舟かな
 行客已遠 大船のたゆまひさがら別れつる影も波のかになりける哉
 名所瀧 我させし昔の小笠に打ちびく末野のまゝささればかきしも
 船中眺望 いつよりう名おの流れし山城のを此の奥ある音あし此たき
 送遣唐使 わはぢしまかたてこぐ舟いつまでお心をつなぐ住よしの松
 長流似帶 かざしにのさゝもあらあん唐土の吉野の奥の花の折るとも
 世路如夢 もみぢ葉の錦をひたせ龍田川神のめすらむおびるどぞみる
 都お兵火ありし頃鶯の鳴くをさきて 世をわたるほどの一夜の草枕むすぶ夢おもはらざりけり
 春あらぬやけ野此はらの鶯の君お代あがらみちまよふらし

義家朝臣 ものゝふ此言葉の花もさそひたりあこそ此關此春此やま風
 小松内府 かりの行く雲井をかけて武夫の思ひのこさぬ道ぞかしこき
 楠公此忌日お まばらくの老木の枝のまぶれるも直き小松の蔭にのくれつ
 業平朝臣の遠忌に 消えてしも玉の聲こそひいさなれ生田此もり此五月雨の露

かくれめや櫻が止にあまめてもたぶためならぬ心づくし
 真心の跡の千世まで残りけり雪ふまわけし小野此やまさ
 菊地武光 君おため心づくしにかいやすし弓はり月のおげのさやけさ
 青砥左衛門 世をまなくふ心しあくは河此せに捨したるら我思ふべしや
 頼朝卿 まるぶある富士のまを野の狩場より光はあちし弓はりの月
 小督局 あはれ世のさぐ野おあける露の身を雲井の月に知られつる哉
 小野小町 いづこより流れし水の浮草ぞさはれおけむ方もまられ
 孝 千代へても移らぬ色にそめてたりあがめの内此花の言此葉
 弟 赤きあどにくゆる心を先まらば親に盡さぬふしやならん
 ちひささのあどにかくれて行く魚此上おも見えつ道の誠の

忠 身一つを君おさへげて仕へる神の道おもふがはざらまし
 信 まおもてまじはる時天の下を友おらぬ人やあらん
 青 あしおびのもえいつる春の日の原空も一つに打霞みつゝ
 黄 山城のこま此見ふりに来て見れば瓜といふ瓜の花咲にたり
 赤 山もどれあけのそ波舟句ふまで照るもみぢ葉に夕日さきあり
 白 をばな散る末此原野此翁ぐさ霜をうさぬるときに來おけり
 黒 かはらやの煙の末にひくくなり墨染でらのいりあひのね
 筑波山のふ 青雲にまぶひもはて走武藏野のうざりをとるを筑波の山
 蓬 菜 山 波たぬめぐみの海にうらむを蓬が島もあひやあらん
 ふとからぬ山を負ひたる龜もまふ聖の御代に逢ふならしむ
 白藏主月にむらひてふてる
 久方の月のあつらの花よりもあやぬおやひや袖にふれらん
 紙 鶯 つちがれて世にある人をいものなりいに哀と空お見らん
 養 老 漣 昔より名おも流れて老人のよはひをつちがぬきのまらいと
 牧童牛に乗りてゆく

鳴門の鶴 諸共に遊ぶ心のはるやあきうしといふ世も知らせおはる
 とけて鳴くこつお音すきり阿波の海のうづまく浪も春やあらん
 大津繪鬼念佛 恐ろしきまがふ佛とまゆばかり唱ふるのり此聲ぞふとさ
 猫のねぶらるる上に蝶とぶ
 獸をら蝶どうられて春の日の花にたはるゝゆめやまらん
 圓相のあた 天地に先だつ物我これぞ知る人こそ知るべりける
 俊成卿九十の賀を給ふ處
 上もあき恵みの露お翁ぐさいよゝ千代のいろぞまえける
 鈿女の命のあた
 面白き此わざをぞ我見ざりせば天の岩戸のあけざらましを
 羽 子 板 少女等お羽根つく見れば我君の千世を敷ふる心地こそまれ
 猿 廻 し 世中におひまのされて使はるゝ人の猿おもまさらざりけり
 うつの山のあた
 旅人の袖の雫やそめつらん千しほにありぬつた此ほそまら
 天 南 燈 いつまで南のまどに残らん風もいとほぬともし火の影

七 福 神 さまぐに寶の品のはれども守るこゝろのつななるらん
大黒釣まゐる所 釣糸に心をたへて遊ぶ日何のふらもおもひさるらん
土 筆 春の野お花の言の葉かさつくし誰か捨て置さし筆にのゐらん
薪能萬歳まふところ

萬代をよぶ三笠の山風にさづけ毛ころもひるがへるをゆ
卯杖に鶯のとまれる

名のみしてうたぬ卯杖の嬉しき鶯の來てつくみざりなる
官女若菜摘む 百敷の大宮つらへ長閑あるこゝろも見えてわか菜つむあり
朝 妻 船 とけやほきものともえを朝つまの昔の岸はあをやぎの糸
大 原 女 花のすにあらぬあせびも手折るべき盛のまゆる大原はさと
あびま大黒餅つく處

神も又同じ心にはるのせのふくをまつとていそぐあるらん
鼠のうたに甲子の意をあらめてとをばはれて

たちうへり春もきのえの初鼠かのひ日おらと躍るけふのあ
大津書辨慶つきのねの中にねたる

嗟峨人形は鬼 恐怖しき人の心のかかあらんまことの鬼のあき世ありけり
陵王まふ處 天の日の影もやさらに靡くらんむらしをかへはまひの袂に
納 蘇 利 面白くひさうつさまの狛笛の聲のあらべにかくれざりけり
獅 子 舞 み越路の雪ふのみ草わけきて、花はまやあにたはれける哉
邯鄲のまひ ありてあき此世思へば手枕の夢はさるえもあやしむらまや
道成寺舞ふ所 恐ろしき影の沈みて日高河うらぶまのりにあひにたるあき
遊女のうた おはれあるまさるは野邊は女郎花あだある色にえまぞ有なる
拾 子 旅人の袂の露をうつはらひうつあけそふるをまあへしうな
大 神 樂 人の手にかひ立たむ子此行末知らぬも親の關路ならまや
夏 の 瀧 塵をしも隔てぬ神のまのあひ獅子もはこりて遊ぶとなり
ひるがは 朝夕の露もさのまで晝顔のひとりあめるもあはれあらまや
雪中鷹狩 降る雪は幾重は下にふは鳥もみ手にまらせんぞ狩野のはら

初雪におぼしもちらんみ心もさやうに見ゆる御狩野此はら
日此本の劔のやぶて神されば人のくにふもあふぐとどきく
關鶏節會のうた

たいりひて勝どきあぐる鶏のこゑも此どけき雲のうへをか
七夕花づうひ 天の河あふ瀬をいそぐ彦星もおもひらくべきはあいのいろ哉
木綿花 照る月の盛の過ぎて木綿花の色さやうにもなれるあきあき
菜の糸 打渡を野島の鈴菜實にありてたはれし蝶のゆくへ知らせも
薄のもとお思草あり

つゝまれぬ物ともえらで思草はあが袖のたれみそめけん
神功皇后のかた武内大臣御子をいだきたる

天のまゝ照らぬ光とありにりり君のまもりしそでのえら玉
補公一軸を持ちあぶら座し給へる

懐に巻きて收めしも此ゝふのまあと泣ひらく時のさになり
芭蕉翁 枯枝に鳴きしからまの一聲のいまも身おしむ秋のくれあ
老子牛にのりてゆく

中々に歩むともあきあどひ牛をたれぬ道を踏むおや有るらん
白鷺 古池に夕あさりまゐる白鷺のうげもさびしきあきれあ

雪の山水 ひとつの花木おとに咲きて春ならぬ臘月夜もあつあしきあ
若水汲む所鶯鳴く
若水のなぶり打霞をうぐひせも春をくみ知る今日の空あ

乞巧奠のうた みけしき哉とりく 供ふ手向草いうに嬉しとこそあはせらん
紫女石山寺のうた
さやあかる心の月の影あがら千代に流るゝみづぐさ此あど

白雉のうた 大君の聖にませば常に見ぬどりさへいでてつあへけるあな
つくま此祭のうた
重ねても神のいさめぬ道なれば鍋の敷おのありぬなるべし

九月九日させわたのかさ
千世此上お千世をさせ綿更にまた花のままひも増る今日哉

玄猪の餅 九重のけふのもちひの光より小春のそらのかすみそむらむ
禁中五月五日のうた

程々 己れさへ手の舞ひ足此踏む事もあらでや御代の酒の汲らん
右近橋 橋の實さへ花さへ常盤おていまもくも井おつらへけるかな
御溝水 大君の千代を浮べてみかは水まはしをめぐる音のさやけさ
賀茂御幸ののた

あらたまる我大君の萬代此のげみたらしにうらびけるかな
大御幸昔おかへるをぐるまのひびきのやぶてよるづ代の聲
菜黄袋 奉るふくろのうちにおもれるの君が千年此はのあかりけり
源氏物語紅葉の賀

中々に立ちらびあるみ山木のいくしは花のいろを添へけん
卒都婆小町 さそふ人あるにまらせぬ浮草の悲しや終によるべかくして
苜蓿お虫 苜蓿の亂れて物我思ふかあまたもなうぬむし此音ゆるるに
桐の葉の落ちたる

幾ばくの袖の露をうさそふらん桐の一葉のあきのはつらげ
苗代に燕どぶ 苗代に燕のへりていそののみふる此山田もはるめきにけり

さそらび かげるふのもゆとまえつる春の野のはや蔭ふも成にたる哉
池のやどりに梅さけり鴛浮べり

霜をのこ拂ふと見えし水鳥の羽風おるをるうめのはつはあ
夏此月雨にされる

雨にある月をよまぶに子規まのびね鳴るむ夜半ふもある哉
花のうへに雁どぶ

春がまを見まてあねてや残るらむ花の上行くけさの雁おね
龍 虎 雲さわぎ風吹きまさま此わたりみる鬼神の影ぞらしこさ
登 龍 大海のそこよりたつれいさはひに雲までくだく沖つえら浪
蝙蝠どぶ月出たり

まばしどてねぐら出出し蝙蝠もへりわづらふ月此のげ哉
龍 潜みても終おの空にあつといふ其名さへこそ畏こりりけれ
鯉 青淵にひれふる鯉の年をへて龍どかけらん世をも見てしお
はじめて虎をきて
唐土の虎てふ神も大君のみらげにかるゝ世おこそありなれ

狼 熊 狐

をぞそ山夕こえくれバ狼のこゑまぢのくもきおえける可奇
荒熊此住むといふあるをぞそ山開おあゆるもよの中のみち
都まできつねまむ野とありしより招く薄もあやしまれつゝ
末の代ハ穴のみなりと古狐こゝろのまゝにちきわたるらん
腹鼓うつや狸のたのしみもうらやまのらぬ世おこそ有々れ
いつまでうとくさかもとに殘るらんその原山の秋の夜の月
思はざる見ざる聞ざるいはざるもかゝはらざるに勝らざる覽
玉銚此道知らざるのふるまひをおくまざるこそ少ありなれ
武夫も弓矢とらせたり猪のさばの先おのいでむうはむ
御車に仕ふる牛の暇まあき御代おのいつのちらんとせらん
世中の重荷をおこれ引うたて運ぶをうしの名おのふらむ
みだれ世をあらてつゝふる武士の道おかくれぬ龍の駒はも
人心ゆるびゆく世お似ぬものハ門もる犬のみさをありたり
玉だれのをすの内まで免されていつのち猫ハ仕へ初めらん
爪かくを猫もさまぶに思ふらむ眞綿に針のおそれある世を

狸 兎 猿

猪 牛

馬

犬 猫

鼠

あぢあくや夜たゞねまとの荒れあがら盡も憚かる心あき哉
物惜しむ人の心をあさ夕おねまごともいゝいゝふらむ
むさゝび び びの聲高まとに聞ゆえさつをのねらひいで遁れん
女ひとり眺め居り桐の葉落つる處

我背子ぶまら木の眞弓ひく時になりにつけらしも秋の風吹く
どめあらしの梅の古木もて作れる茶匙残香とあづけて

殘る香のさやけきものを梅此花朽ち果たりと思ひたるか奇
知恩院御忌參のうた

おねの聲のすみし日より世の中の人ハ心ハはるめきあたり
友ぢちの故郷に歸るを賀茂川のはどりあて餞したる日

賀茂川のちがれ高瀬おわあるとも再びあはん君をこそ待て
それをだお忘れぬつまと鴨河の千鳥さうせて君をこそやれ

丙寅の秋友達の故郷に歸るを餞しける日世中の様おど打語らひて
古へおまみあへるらむ月まちて大内やま此あきハ訪はせん

桂園靈神の二十五年の祭祀に寄霞懷舊の心を

言の葉此ををり尋ねし岡崎のむらしも遠くらすむはるのな
春霞世を隔てゝも添ふものゝ君のこと葉のふはひありけり
同じ日披書思昔のふ事

たどらるゝ文の林のくまおとに今もまさばと君を戀ひつゝ
母君の二十五回忌に夏懷舊を

涙河昔にのへるあだきそのうへに降りくるゆふだちのあめ
昔思ふ涙の拂ふすべもなしひとのそぎに行く日あれども
竹内享壽が中陰の追悼に寄時鳥懷舊を

故郷のはち橋にあきまてしてゑをばられぬほどゝきまのき
このかしのぬしの舊歌にふるさとの花さちばきの香をどめて山や
とゞきさいまや鳴くらんとあるを桂園翁いたく譽められしと
されば數多が中にも是のしもどとつうらもおもはれしにや今の
の時にのぞみてお此歌を短冊にかいて残し置られしを社友さゝ
傳へてやがて題をば設けしありと

香川景恒の身まのりしよしをさして

我世さへ更にはのきき心地してつらき君の門出ありけり
今よりいひある道をふまんとてかきし子をさへ置いていふらん

又一週忌に寄花懷舊を

花にねて思ひ出ればさだ山君とあそびぬはるのありき
甲子の秋のみいくさに身をきて、仕へ奉りし宮内某の追悼に

大君の邊あまてたりしものゝ命の道のいれちあらまや
諒闇の年此始めに

降る雪に日影も消えてうぐひの聲だに聞るぬけさの春哉
常からぬ大御けしき抜うのいひて春も雲井にち迷ふらん
思ひのたぬ高嶺は松の雪折る春さへえがむ今日ふやのあらぬ
御心にまかせざりらんよ此中を思ふにいとぬるゝ袖のな
戊辰此年のみ軍に御楯とかりて身を捨し人々の功を譽めさまひ魂此行方を慰め給ふとて
いともしこき仰言どものありたる由を承りて

萬代の未までかゝる御めぐみの露ふぬれぬ袖ありけり
又我子の知義もかのきき數に入りしを悦びて

うみれ子の身のある果も見つるうき嬉しき物の命ありけり
岡部大人の百年の祭祀に寄國祝此心を

御國ぶり昔おかへる時り來ぬ今こそ見ゆれきまがいを
神祇祝 玉ちはふ神此ちはひれいちじるき駿の今の御代おあそわれ
またれしも再びおこる神祭見るもかしてき世おこそ有りれ
いつのあれど此頃此世を祈るおのまさしき駿をあらましやの
出雲の國造殿の求めによりて社頭祝といふ事を

かしこきやわが大ききの萬代のもとのさつきのおはまや柱
寄都祝 山水のまぶたを見てもされもしき御代の平のおは宮どおろ
寄酒祝 よろこびの心をあもまものかれは酒ぞまことのいく樂ある
寄花祝 花の咲く春此光によそへても猶あまりあるきまの御代あな
寄船祝 ちま立たぬ惠の海に船うけてゆきあふ船ぞのとけありける
寄道祝 大君につりふる道のひとまぢの動く世もあき國ぞあふとさ
元服 位山はるくおえん喜びもうひうぶりのうへふとえつゝ
丁卯の年の十月王政復古の事仰せ出されしお

神代おもかへればあへる大御代をくだり果しと思ひたる哉
天地の神のちはひもあらたまる御代の初めに逢ひおける哉
同じ頃鶯の鳴きければ

かへり咲く花おも千代の色見えて鶯來あくきのふ今日のな
九月の末つ方ゆくりあくある雲上人の己が旅やどりをとせ給へりさるの御悉びあらで
聖廟に詣で給ひし御歸さありなれば御装束あててく子の君をも召連れ給へりかしてしき
どいなるのにて

思ひ出もあき身とばかり歎きしひ此喜びを知らぬありたり
菊あらぬ君の御袖の香にふれて千代の翁とありぬへさのな
陽明のおどり左大臣の御拜賀ありける秋

位山いよく高くまむ月にくも井のあきのうげやそふらん
よばふらん三笠の山の萬代此聲もやたのくありまなるらむ
同じ頃三浦の君より御紋服を給はりなれば
これや此鶴の毛衣はるくどかさねん老が千代もとえつゝ
岩下某の拜任を祝ひて

道をふむ心のあとの位やまはばるふつけてあらはれふたり
ある人の賀に依花忘老といふ事を

春毎ふ身の老らくを忘るゝのこゝろを花に寄せばありけり
薩摩の飯島といふ所に孝女ありいと幼きより母につうへていとまめやのきりなれば公に
きこしめしてそこばくの賜物ありける由をききて

海士の子が拾ひし玉の中々に磨きしよりもかゝやきになり
渡忠秋が新室はざしなるに祝といふ事を

言の葉はのげをまめたる宿されば月と花とに富ぬべきかき
年頃太宰府にさまらへおはし、公卿たちをこたび都にめし歸されし由を承りて

年を経て心づくしに沈むしのかへりて玉はひありきらきや

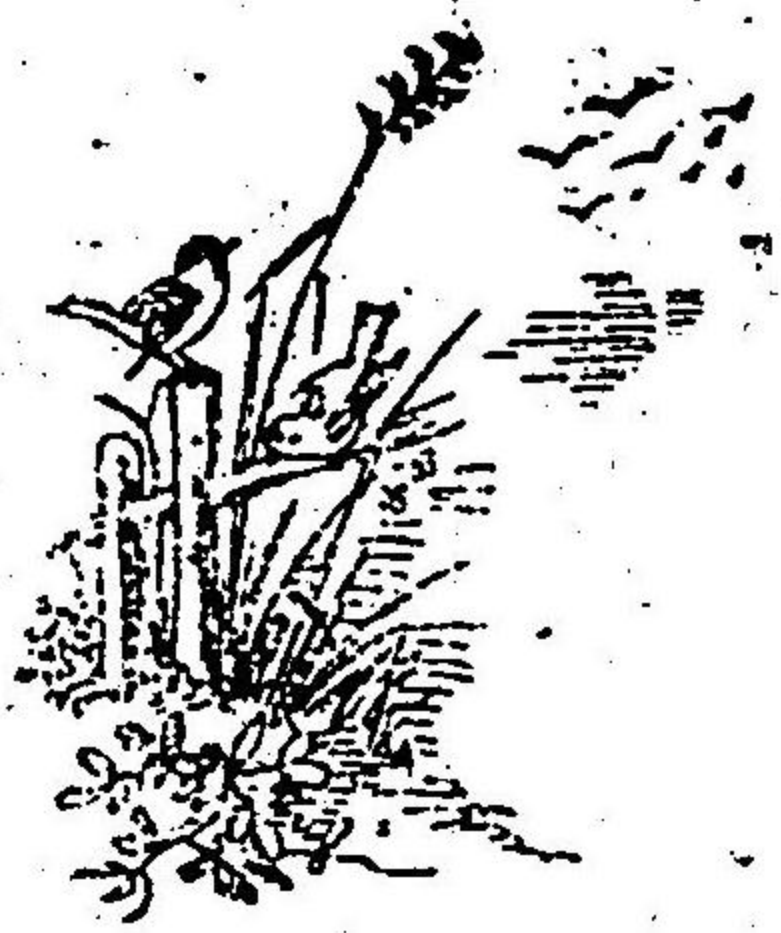
志のぶぐさ終

浦の志は貝拾遺序

長春亭の翁此門にあそべる難波の友ごちが許より文していへらく近き頃
師の詠みすて給ひし歌あまゝあるがさてまゝまゆかむもあさらしければ
ひそかに拾ひおさつるをさきにあらはれし浦の汐貝の後集此やうに物し
て又世に見ゆべくおさばやと思ひありぬ草稿をも一わたり見給へ巻此は
しに一言をもかゝいそへ給へどおんそゝのかしゝりける同心心に願はしう
よろこびひつゝ開き見るに大方此世人のいうにいぶかしむらんと覺ゆる
ふしも少きからねばよしやあしやを翁にとひはうりてゆるし給はむ限を
物せむこそ本意おちめどかの友がういひやらまほしう思ひゝゆたふ程に
今の梓もどゝのへりといふたよりおかのがおごゝりをしる悔いておと此
まゝをういつけ侍るにきむ

安政三年の八月

陸奥介景恒



浦の鹽貝拾遺

熊谷直好

春の歌

年内立春 君が代此豊かあるべきまゝるしとて余れる年に春の來にけり
 ゆく年の關のこゑに春のちて音羽の山ぞまづかすむある
 春といは、年内野の若菜をも雪かき分てつまんどぞ思ふ
 まつも此の必ずおそきよの中にことしの春は早くもある哉
 物おとにまちいそがる、老の身此心にかなふ春の來にけり
 立 春 打なびき春をさつらし大君のまかさの山にかすみささびく
 さい波此比良の遠山雪ながらかすみにおめて春の來にけり
 うちかはる春と冬との中垣にさきこそおやへ梅のはつはさ
 立春此日庭あふりに來ぬる鶯初めて鳴出ふり
 さのふまで木傳ひながらなかさりしやどの鶯今ぞきてゆる

立春 水 山里此かけひの水のおどすなりはる此光やかよひそむらん
元 日 朝びらきかぢどりそむる舟歌や難波の春此はじめあるらむ

來る春のともにも齡やかへるらむ老にけりとい思はざりけり
あふらしき年の始めにいかなれば故郷びとの戀しかるらむ
さえくし大比枝おろし吹きて此どかにありぬ白川の里
水つける垣根此くさいもえふたりさつ春まごと思ひたる哉
元日殊に長閑ふて鶯さく

をどつ日も昨日もさし鶯此そのこゑ今朝の珍らしきかな
おき日河堀のあふりまでゆきて

長閑あるはるのすがさのあらはれてふもと霞める葛城の山
山近くまをりたる年元日に

夜ひるとたえぬ寛の水の音もあらさまりぬる心地こそすれ
まばらくと思ひの外此山さどにふさび春をむかへける哉
雪の内にかけてさらせる青柳の糸そめあげむ春の來にけり
花とのみ常おもえゆるえら雪此はるの梢にかりけるかき

立つととし春の跡さく成ふけり山ふも野にも雪のふれい
元日子日ありける年

門松も野邊より引て睦月立つ今日の子日のえるしとぞもる
二 日 に あき人の商ひはじめよしといひて難波の春の賑はひにけり
春さぬとおもひゆるびし轉寐ふ今日の二日もまづ暮にけり
梅此花うつれる澤の初わか菜摘む手もかをる心地こそすれ
友ある満慶がもとふ梅花をさびく送りてかなさよりもこれよりも歌どもいひかはしけ
るが正月二日に又かの家の梅香といふ油に 紅の色も匂もうまけれと宿に咲きさる花を
ませばやといひ加へて贈りさる返事に

梅此花さしも見せしもえら雪此ふりぬる年とありにける哉
早 春 まつ事もあき身どもこそおもひしに春さちぬれば鶯のこゑ
鳥のねの春めさぬれど玉やあゝの道のまば草霜をかきにける
はかなくも春此心にありにけり我世の何う此どけかるべき
長閑ふも今朝の霞める山此端の日影くもりて風さちあけり
春さつと思ひしものをわが宿のまがきもたわに雪の降つ

風光日々新 春來ればひなしき空の緑まで日ごとに増るこゝちこそすれ
 雪消春水來 はるくれは高嶺此雪もいろかへて淵のみどり成にける哉
 初 春 祝 此どけさをわのがと春や思ふらむ治る御代にさつとさきて
 小松ひき若菜つむ手にかぞふれば余れる千代も限なきかき
 初 春 鶴 池の上に鶴のはつこゑきこゆきり底ある龜も春やえらむ
 初 春 松 子日して今植さるももとよりの老木も千代の遙けかりたり
 初 春 海 よき日ふの常もかきめる住吉此おまへの沖お春の來にけり
 淡路島なれる神代のはじめよりかゝりそめけむはるの霞う
 春さちしあみの底あるうみ松の猶いくまはの色まさるらむ
 正月十八日雪ふりけるを共に見さりし人此又の年む月同じ日に猶雪いさくふりけるに文
 かこせさる返り事に

初 春 霞 去年よりの今年ぞ雪もふりまさる我身ばかりと思ひける哉
 さ此ふけふさつと思ひし春霞かゝらぬ山もなくありにけり
 廣澤此いけのこやり冬あがらかすみかゝれり衣がさの山
 春到管絃中 ふる雪を花とめぐらす笛竹のそのひとふしに春の來にけり

氷 始 解 春くれは霞さき引あを柳のいと此まらべをうぐひまを鳴く
 はにやまの池の氷のとけしより底おもえゆる天此かぐやま
 貴 賤 迎 春 九重のおやとやびとのたもとより我袖かけてはる風ぞふく
 山 家 早 春 山さとの垣根さちくさうぐひまのまちける春に成にける哉
 み吉野の雪のふる里まかいわれど花おそからぬ春風ぞふく
 茂之が詠草に詩さとうき交へて見せさる奥に

唐大和言此葉をるのかはれどもあべても春のみどりある哉
 待 子 日 こゝろこそ先ひかれけれ小松原初子もあすに成ぬと思へば
 子 日 家よりもれのが松を引つきて子日の野邊に我の來にけり
 霞 中 子 日 棚びかぬ春しきければ小松ばら霞ぞ千代の經ぬべかりける
 子うませさる家あて子日此意を

餘 寒 風 高砂の尾上此小松うつし植て今日より君があひかひにせん
 霜がれ此蘆此葉風の寒さうさ下もえわたるやぞぞと思ふに
 春あがら比良の高根に雪見えて松かぜさむしあはづ野比原
 餘 寒 月 大どらの月ふの春のかげもあしかつちる梅の木間あがらに